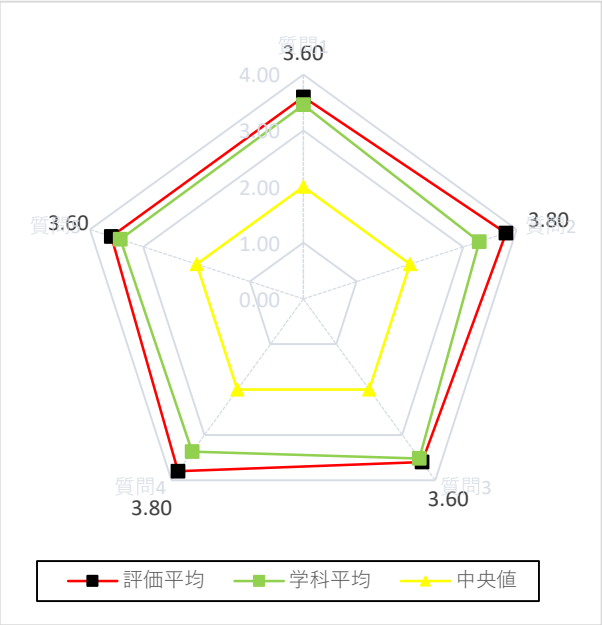
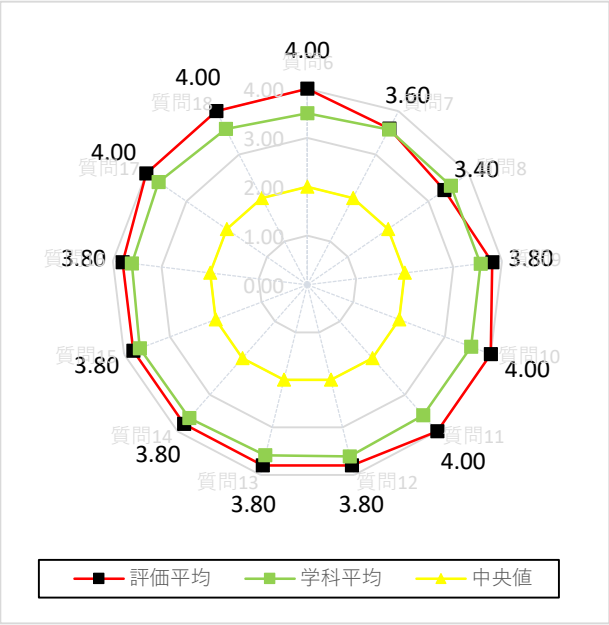
学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろう（初年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

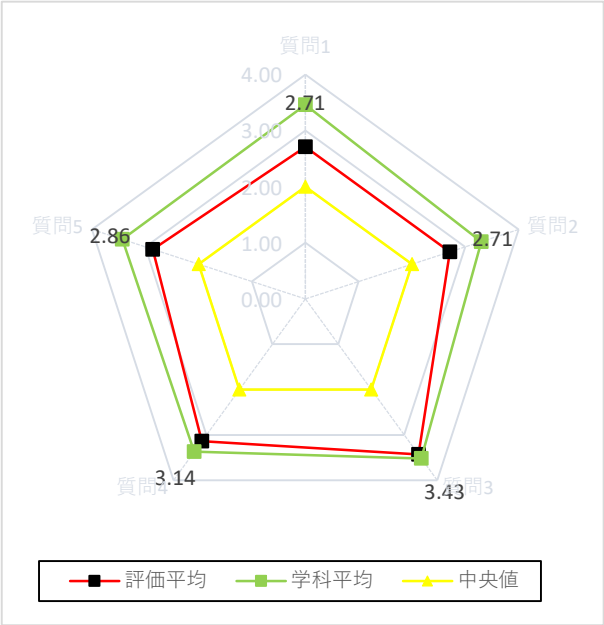
結果を見ると、やや平均以上であり、良かったと思う。今後もそのようにしたい。

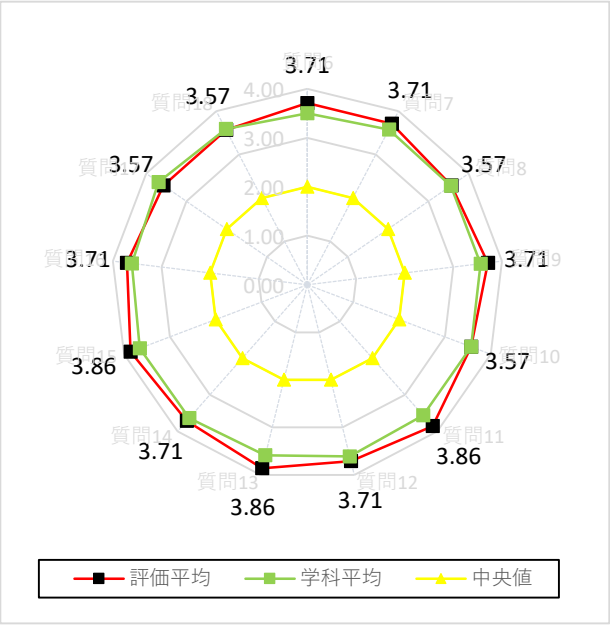
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も熱意をもって学生と関わりたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう（初年次教育含）	8名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

「あすなろうⅠ基礎」については、年度計画において全体で行われるもの、ゼミごとに行われるものに大別される。さらに、全体の中で進められたものであっても、それを踏まえてゼミに持ち帰ってさらに一人ひとりが活発に意見し、メンバーで考えるという討論の機会が設けられており、より発展したものになるよう方向づけがなされている。

本年度はコロナ禍も明け、対面による授業を行うことができた。個人やグループでパワーポイントを作成し、プレゼンテーションを行う機会も多く、それぞれがしっかりと発表できた。これについては学生間で質問等も積極的に出されて深めることができるよい機会であった。

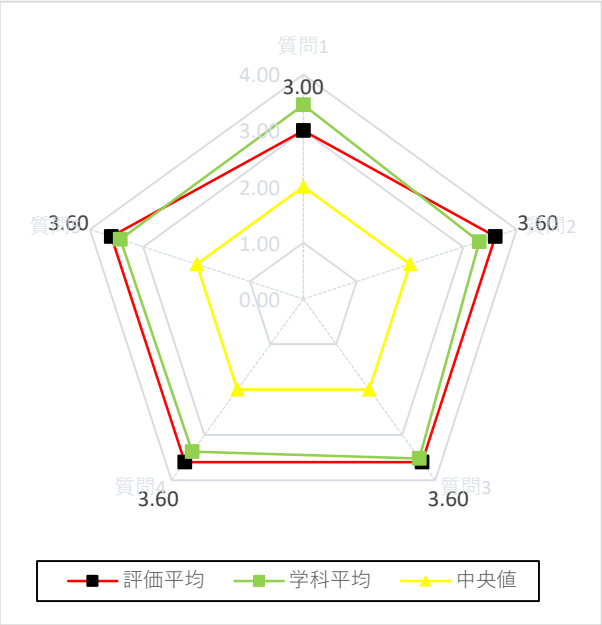
一方、あすなろう体験についてはコロナ前に比べると学生の意識も低く、なかなかボランティア活動に応募せずポイントも最低を取得することを目的とする学生が殆どであったため経験不足に終わってしまった。

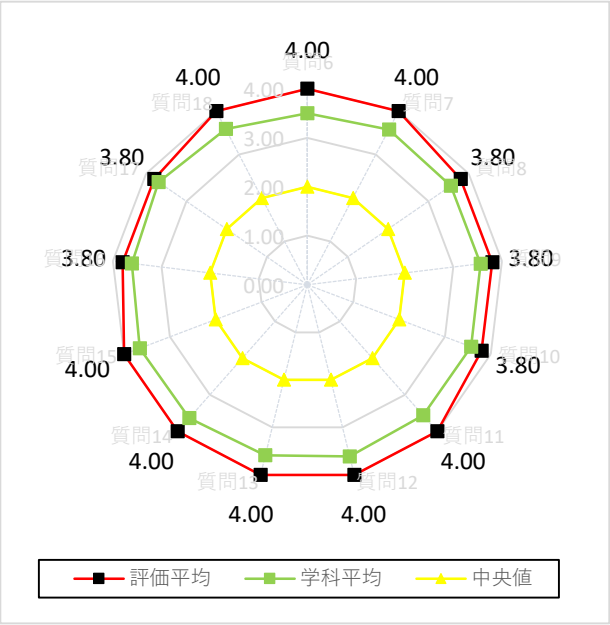
（３）次年度に向けての取り組み

「あすなろうⅠ基礎」の授業の予定はありません。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろう（初年次教育含）	6名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

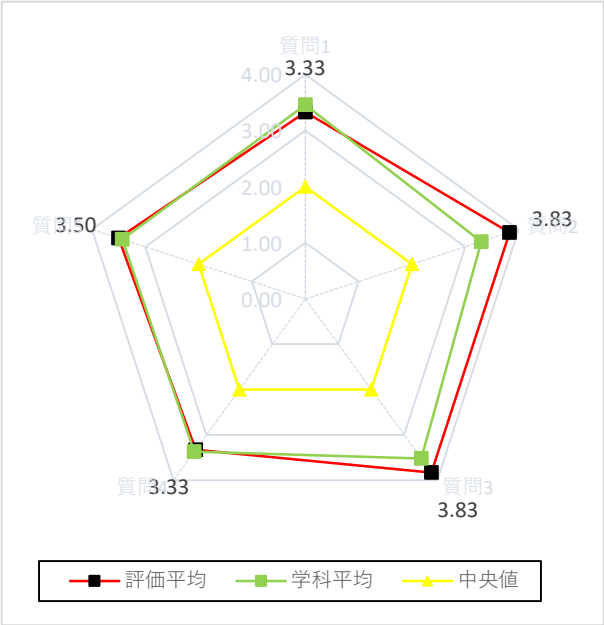
授業への欠席が目立った以外は、学科評価より高い数値であった。
欠席理由は、体調不良によるものが多く、授業への熱意は１年間を通して感じられた。
個別的なサポートを丁寧に行った成果だと思われれる。

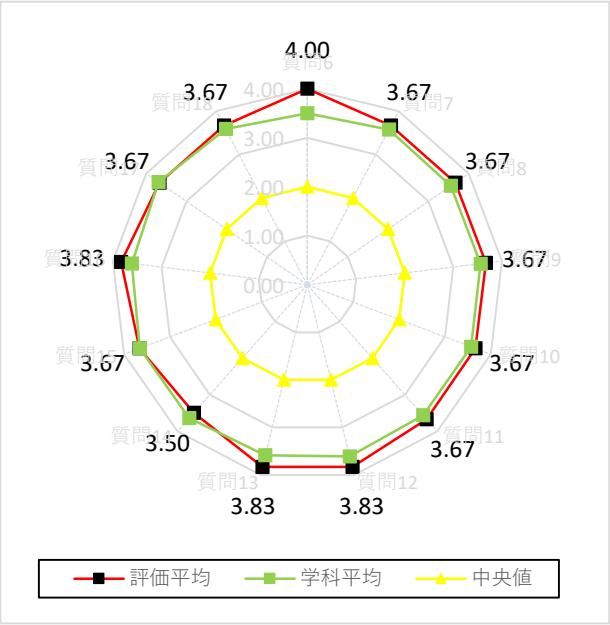
（３）次年度に向けての取り組み

個別的な不安を抱いている学生も多く、少人数ならではの丁寧な教示や関わりが必要だと思われる。
引き続き、必要な視点だと考えられる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろう（初年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

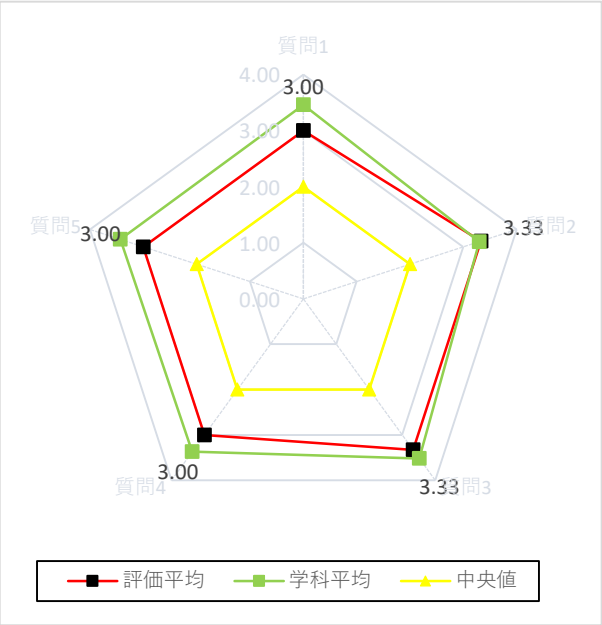
概ね評価は高いようである。この評価を維持したいところである。一方で、一部学科平均を下回っている箇所がある。質問14学生の質問等に誠実に対応しましたか、においては学科平均を唯一下回っていた。連絡等の一元化をしていたつもりではいるが、細かいところに不備があった可能性があげられる。ゼミ単位での対応が望ましいであろう。オムニバス講義でもあることから、難しい面も多々あるが、個別対応等でのゼミ単位のでの対応などは改善していきたい。

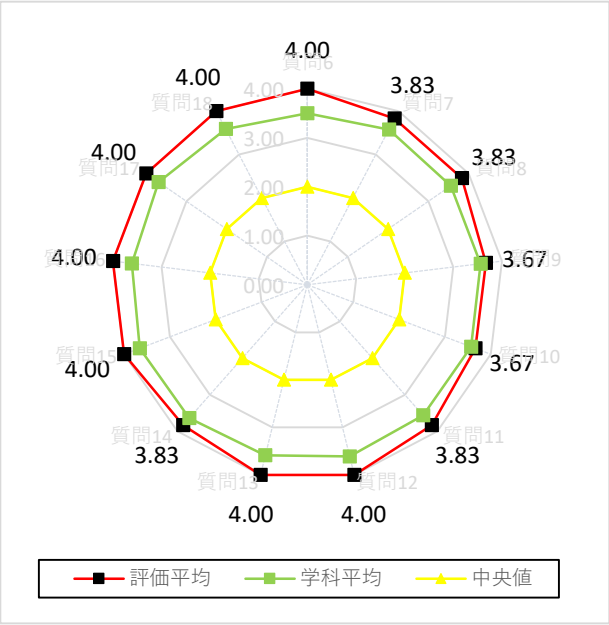
（３）次年度に向けての取り組み

次年度に関しては、内容が大幅に変更されるため、精査する必要がある。また、今年度同様にオムニバス形式であるため、難しい面もあるが、可能な範囲で学生の興味関心に近づけて授業内容を精査していきたい。また、大学全体のコンテンツも増えるため、個別の連絡等の確実性もあげていきたい。その他の項目に関しては、ある程度高い水準を維持することを心掛けて講義を進めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろう（初年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

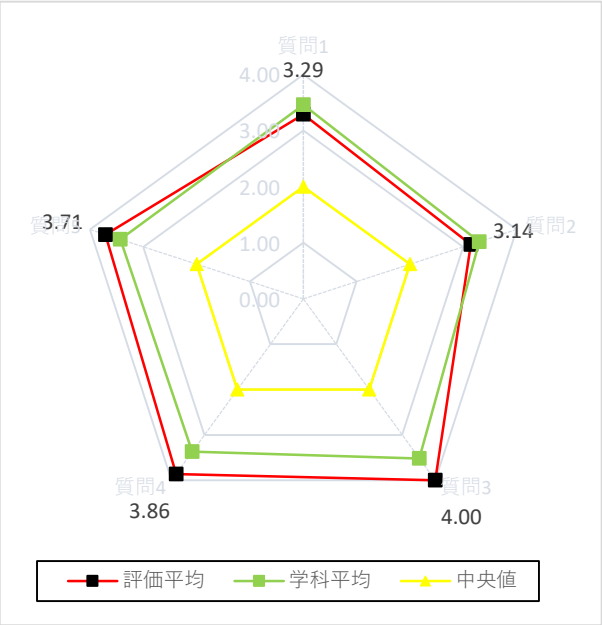
授業評価回答数については高い回答率を得た。学生自身の自己評価については、個人によりばらつきが大きい状況であった。教員への評価については、全ての項目で学科平均と比して高い評価であった。
授業内容は学科全体で共通した内容を行い、授業形式については全体授業とゼミ別授業とが混在していたが、ゼミ別授業では、できる限り各受講生に個別的な声掛けを行い指導支援を行った。また、一週間の記録票を活用して学生の生活実態の把握に努め、細やかに声掛けをするとともに、気がかりな状況がある場合、個別に対応するよう心掛けた。
学生からは自由記述においても各週の振り返りに関するやり取りについて高評価を得られ、また授業内容についてもレポートや発表等への達成感の記載が見られた。今後も、学生への公平なかかわりやレポート・発表指導等を丁寧に行っていきたいと考える。

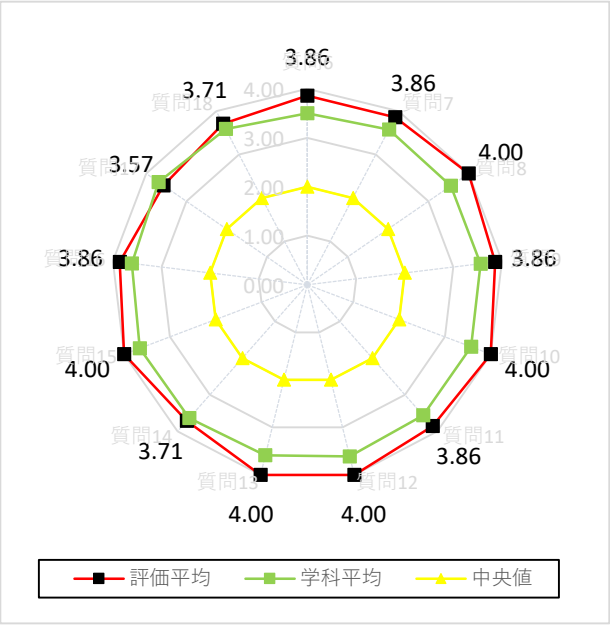
（３）次年度に向けての取り組み

次年度は、共通教育科目のカリキュラム再編の関係で、今年度同様のかかわりが難しくなることが予想される。後期は各学科における授業が行えるため、今年度同様に全体へ向けては指示の明瞭さに留意し、また学生には誠実・公平に接する姿勢を重視して、教育に取り組んでいきたい。
　また、一人一人のあすなろう体験実習の進度や生活状況などを把握するなかで、気になることがあれば早めに声をかけることで、学生が大学生活を滞りなく送ることができるよう教育・支援を行いたい。
　授業評価については、次年度も最終講義回で十分な授業評価回答時間を設けて回答を促していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろう（初年次教育含）	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

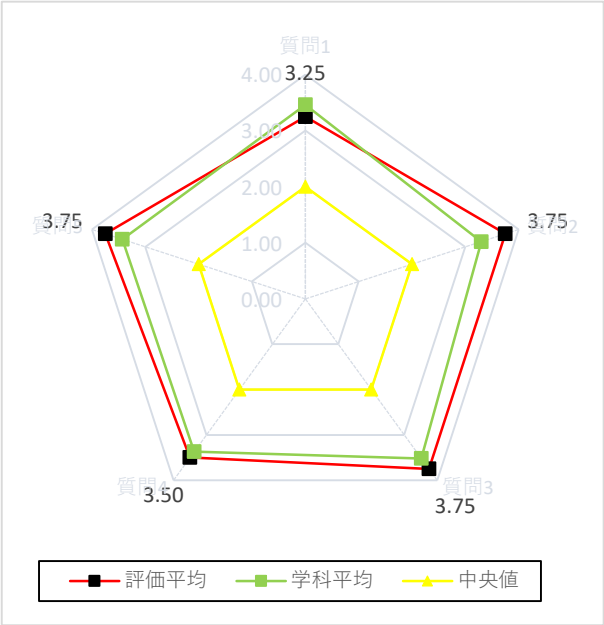
質問１，２，１７以外は、学科平均得点を上回っている。

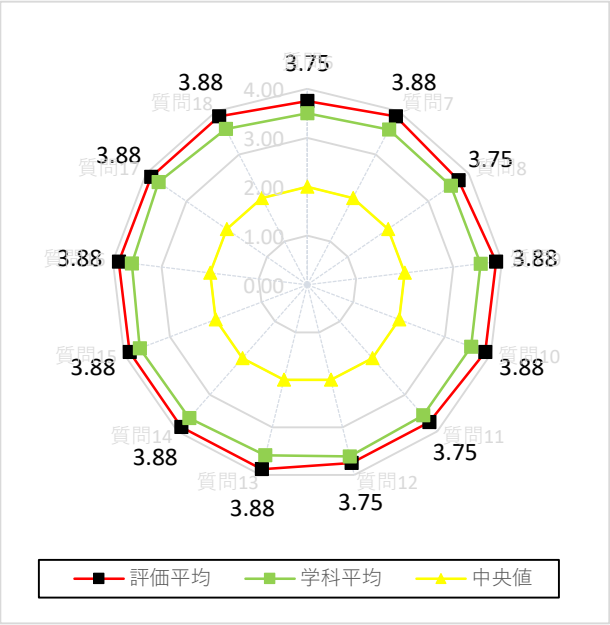
（３）次年度に向けての取り組み

シラバスで説明を行うことと、学生への声かけを多くするように取り組む。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう（初年次教育含）	8名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

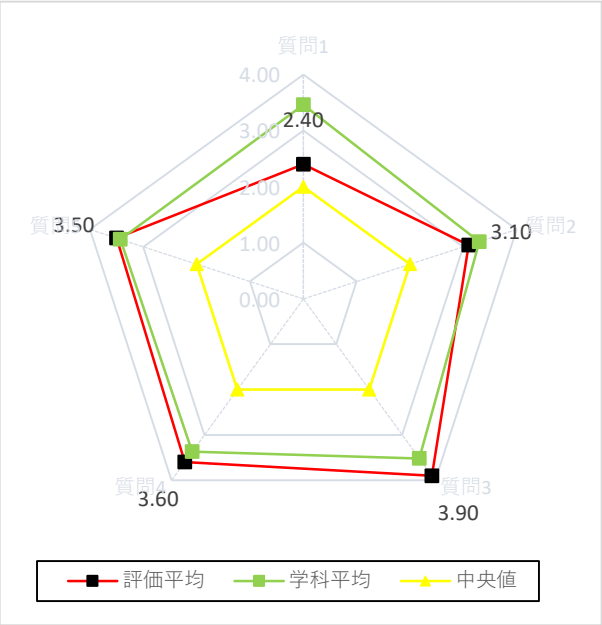
本授業の前半は１年生全体での共通性での学び、体験で実施された。
後半の授業においてはゼミ単独での個別で実施した。
前半部分では、社会人となるために必要な姿勢・スキル・知識等の学びが多く実施された。
後半では、本授業で共通性として明示されているボランティア等の体験活動への参加、及びゼミでの自分にとっての価値あるもの・こと等を整理し、それをプレゼンとして作成し、他者へ伝える、という活動を繰り返し行った。
次年度は本授業の実施方法が大幅に変更される予定である。

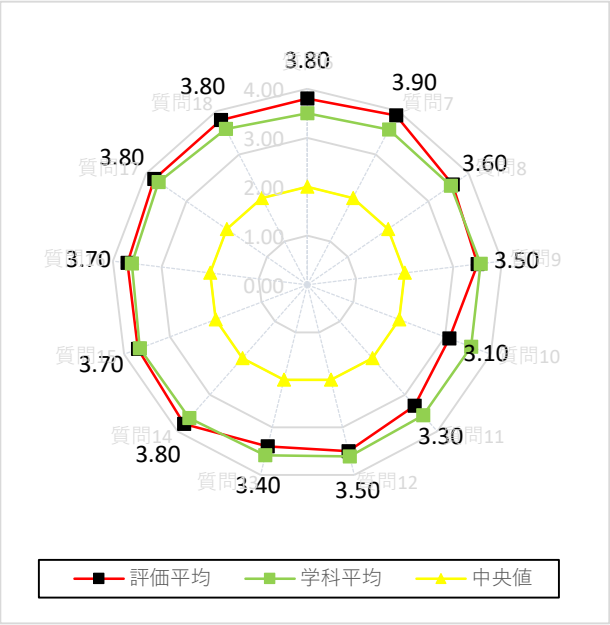
（３）次年度に向けての取り組み

次年度は前期は学内共通で神崎キャンパスで実施されることなる。
本学科における授業は後期での実施となる。本学科内での取り扱いは現時点では明確に示されていない。
本ゼミ単独での授業実施の際には、２年次の発展に繋がっていく内容を実施していきたい。特に本授業の対象は１年生が対象となることから、２年生からゼミ内で行う療育体験活動に必要となる知識やスキル等についての学びを深めていくこととする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		あすなろうⅢ 地域協働（インターンシップ）	12名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

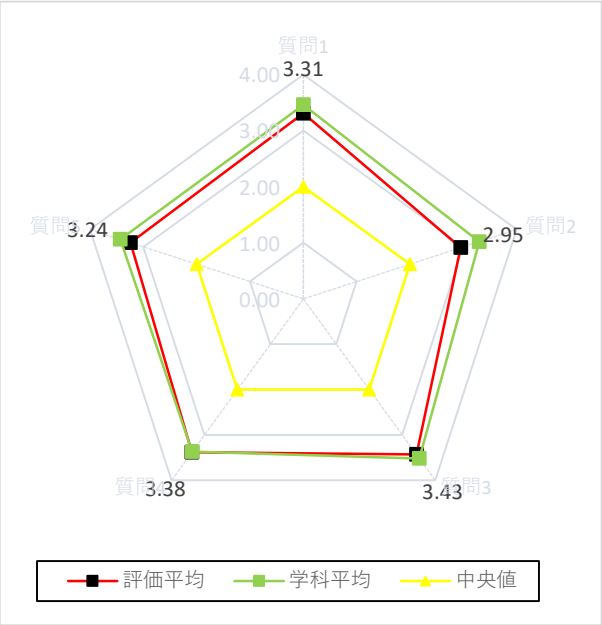
この科目は、提携を結んでいる小城市教育員会の協力のもと、小城市内の小学校で「子ども支援ボランティア」として実際に子どもたちとかかわりながら実践活動を行う科目である。
質問項目１の欠席回数については、通年で週に１度3時間程度の実習を就職活動や体調等で欠席が生じた学生が複数いることが影響していると思われる。
また、質問項目10・11・12・13の点数が平均を下回ったことについては、授業形式が講義形式でなく、実習と実習後に実習記録をもとにしての個別指導の形式で行ったことが関係していると考えられる。
中間報告会・最終報告会として各小学校での活動を学生が報告する機会を設けた。報告会の中で、これまでの心理学の学びを応用して子どもにかかわる貴重な機会であったことや、学校現場の実際に触れることができることができたこと、子どもたちとのかかわりを通して成長できたことなどが語られている。個別指導の中でも、学生自身の子ども理解・かかわりについて著しい成長が見られていた。
自由記述の中で、小城市内の小学校への移動の大変さの意見が出されていたため、今後対応を検討していきたいと考える。

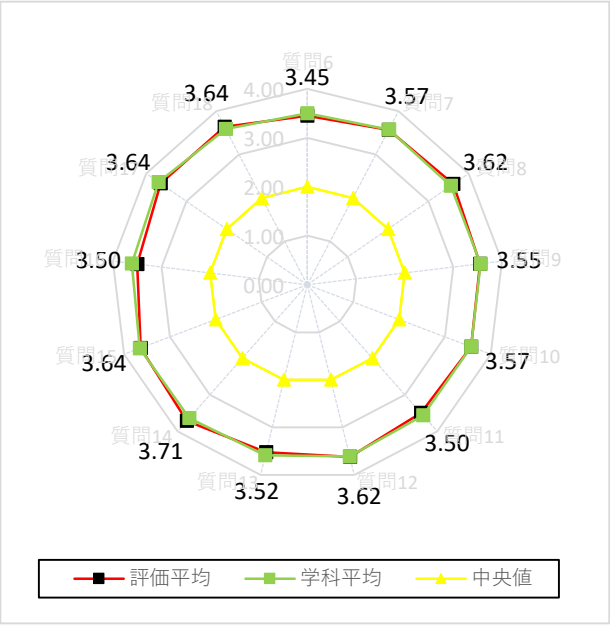
（３）次年度に向けての取り組み

次年度においても、実習活動後の個別指導を丁寧に行いながら、学生の成長につなげたいと考える。また、受講者全体で取り組みを報告するだけでなく、情報交換や相談等の機会についても増やしていきたいと考える。
また、自由記述に記載されていた小城市内小学校への移動の問題について検討していきたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		英語コミュニケーションⅠ	44名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

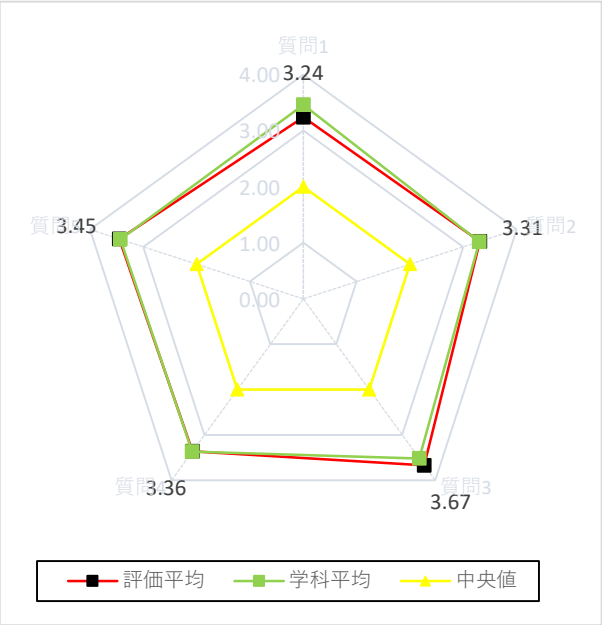
平均と同じぐらいのレベル。シラバスをいつも紹介するが、毎週毎週次回の授業について案内するので、シラバスを活用する必要はないと解釈する。

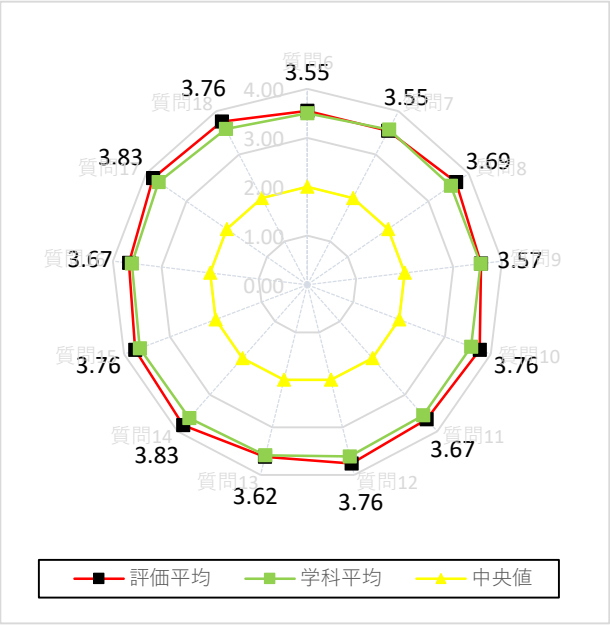
（３）次年度に向けての取り組み

次回から英語コミュニケーション1とⅡは学会別でなくなるので、より広い数の学生に教える方法ややり方を探る予定である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		英語コミュニケーションⅡ	46名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

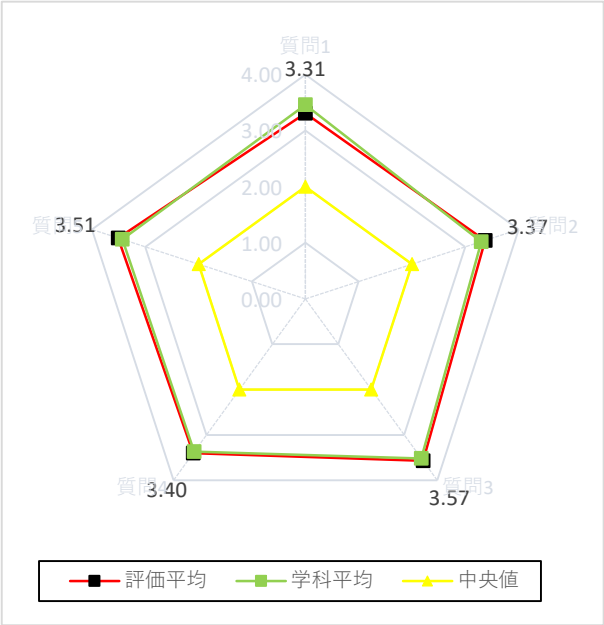
平均と同じぐらいのレベル。シラバスをいつも紹介するが、毎週毎週次回の授業について案内するので、シラバスを活用する必要はないと解釈する。

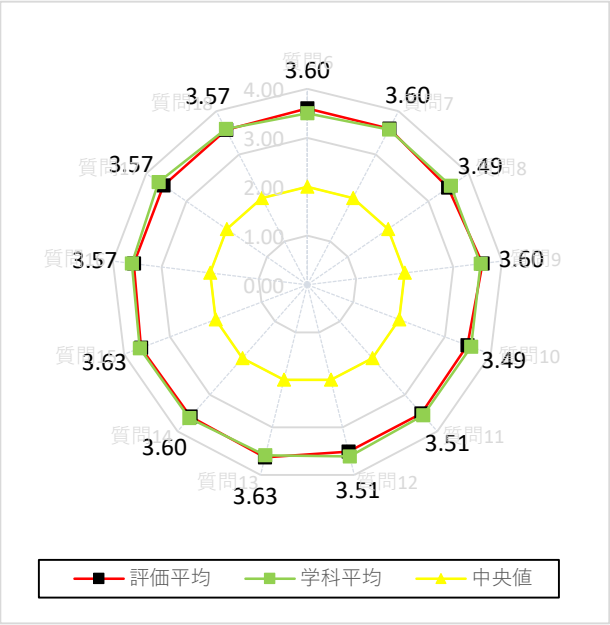
（３）次年度に向けての取り組み

平均と同じぐらいのレベル。シラバスをいつも紹介するが、毎週毎週次回の授業について案内するので、シラバスを活用する必要はないと解釈する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		データサイエンス演習	84名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

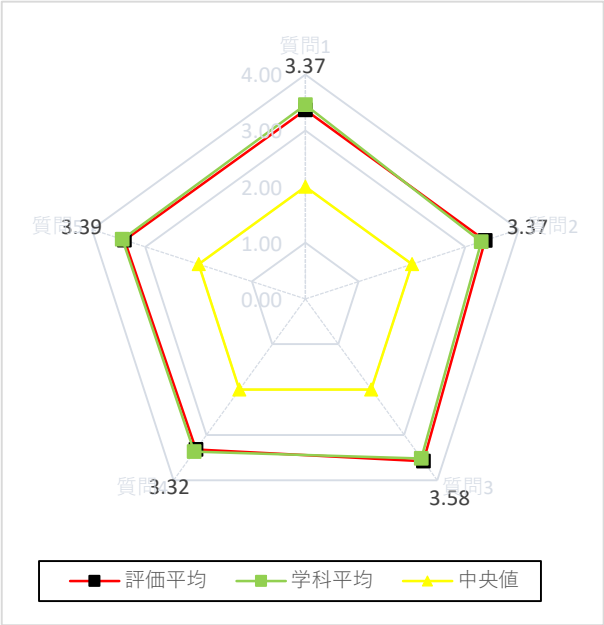
子ども学科１年生全体での共通課題に取組む授業及び、身に付けたスキルを活かして課題に取組むゼミ別での学びで授業で進めてきた。
共通性関してはエクセルやパワーピント、ワード等の基本的なソフトのスキルの向上及び、目的に沿ったデータ活用のための知識、スキル、倫理観に関しての内容で行われた。
ゼミ単位での個別性の課題については次の３点について行った。
①　パワーポイントを活用しての「自分の街紹介」
②　ワードとネット情報からのダウンロード等を活用した「私の紹介したい１冊」
③　自分のこれまでを振りかえるための「自分の履歴作成」
①及び②については、個々のイメージを活かして「伝える」という視点から、よく整理されたものを作成することができていた。このような体験的な活動や親和性のある課題を通した学びは、学生にとっては主体的、能動的な学びとしての体験として効果的であったと考える。
③については、日ごろあまり考えることがない自分の過去の時代のことであり熟考したり、書き方に迷ったりしている様子が見られた。今があるのは「過去があるから」そして「未来があるから」ということを考える機会となったと思われる。

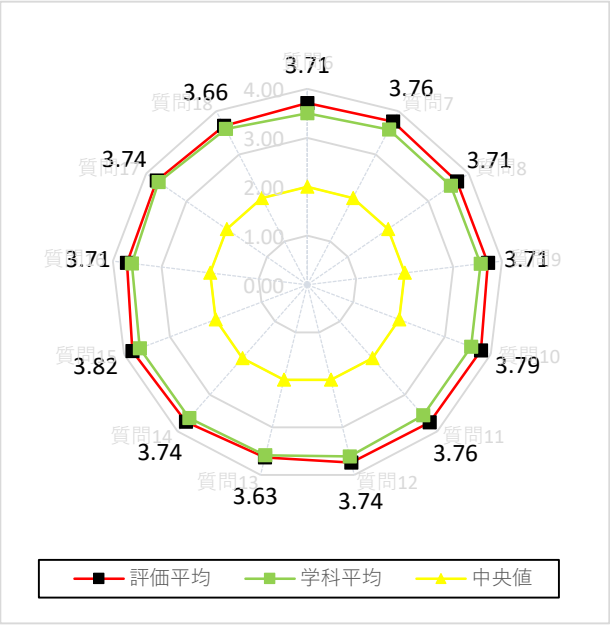
（３）次年度に向けての取り組み

次年度については実施方法が大きく変更されることになっており、現時点では未定である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		データサイエンス演習	41名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

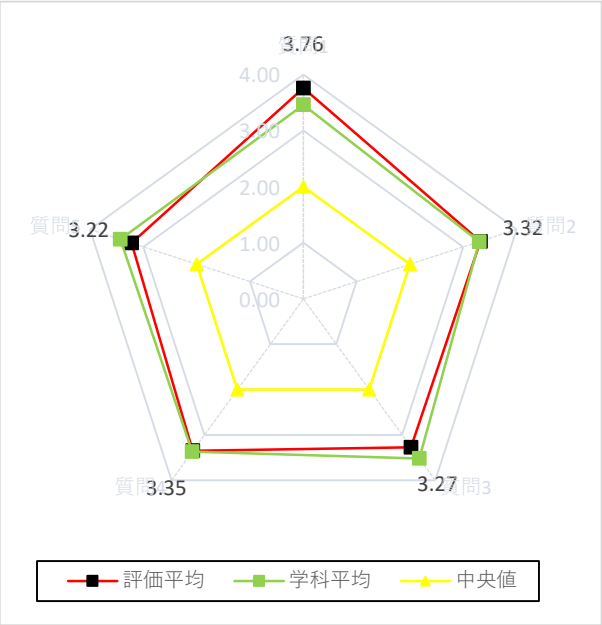
全体的な結果としては、学科平均と同じくらい（やや上回る）の値であった。
中でも高い評価であったものは、「視聴覚期や板書の使い方」に関する項目であった。
これは、ゼミ内でのアクティブラーニングを展開する際にホワイトボードを効果的に活用したり、スライドの共同作成をおこなった成果ではないかと考える。
また、最も低い評価は「授業の進む速さ」に関する項目であった。グループワークでの課題の提出〆切がタイトであったことも考えられ、他科目の課題との兼ね合いや、他ゼミとの足並み等もあるため、今後、総合的に検討・調整していくことが課題であると考える。

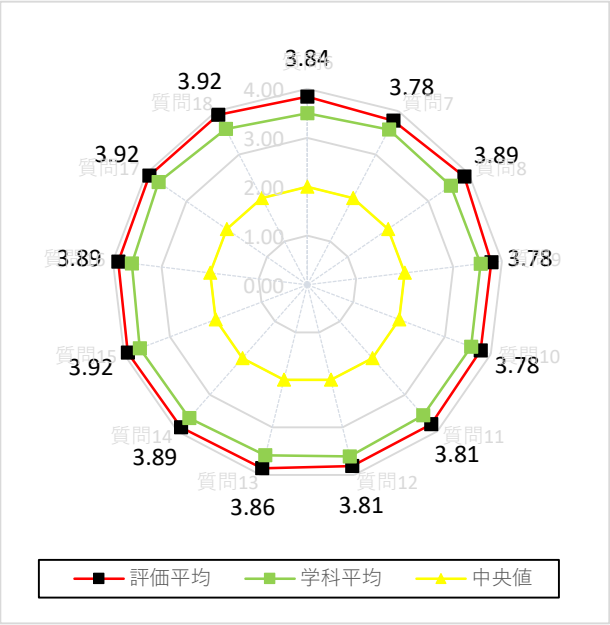
（３）次年度に向けての取り組み

ゼミ内でのアクティブラーニングが主な取り組みであり、学生主体で授業や課題を展開することができていたと考える。
また、先述したとおり、グループワークでの課題の提出〆切がタイトであったことも考えられ、他科目の課題との兼ね合いや、他ゼミとの足並み等もあるため、今後、総合的に検討・調整していくことが課題であると考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学概論Ⅰ	41名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

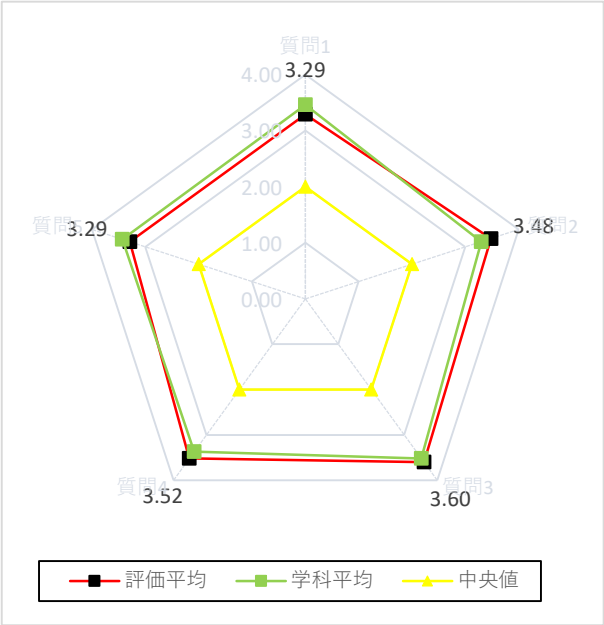
講義としては、全体的に高い評価を得ている。前年度の反省を踏まえて、シラバスに注力したり、映像メディアの変更等を行ったことが良かったようである。ひとまずは、高い評価として認識していたい。

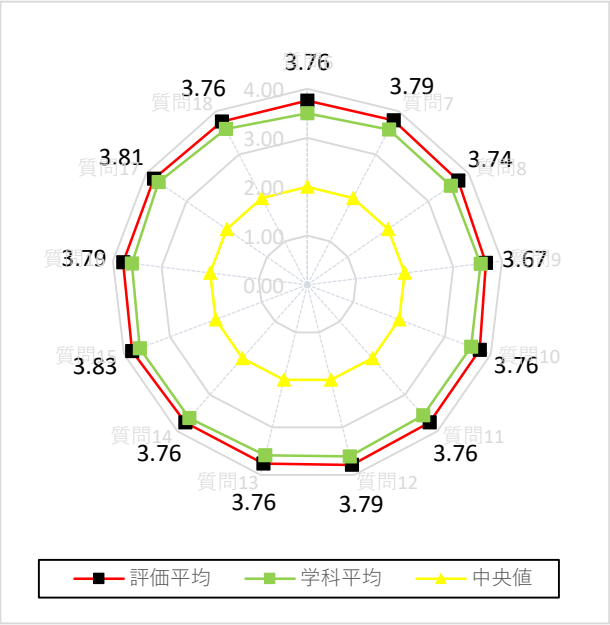
（３）次年度に向けての取り組み

次年度に向けては、この評価を維持できるように実施したい。そのうえで、映像メディアなどは最新のものに変更しながら、より良いものを提供していきたい。さらに、学生の質の変化にも注目して、内容等も考慮していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学概論Ⅱ	43名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

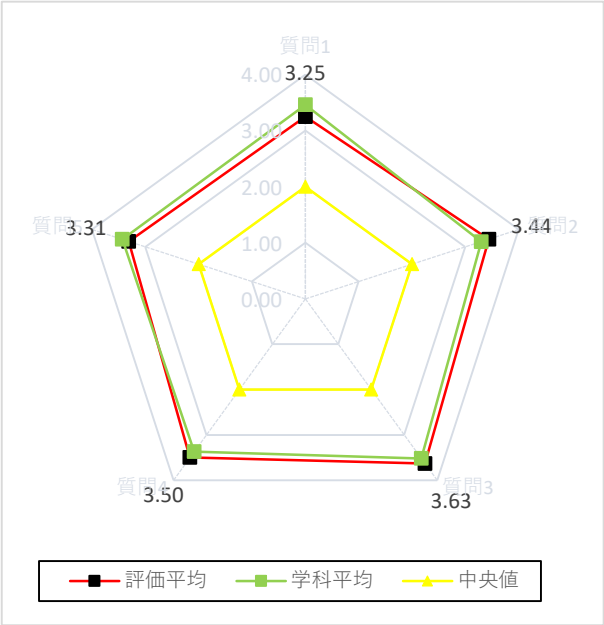
評価の偏りなく、かつ、十分な評価を得たと言える。授業のねらいと評価のポイントをしっかり伝え、また、中間テストをもとに成績優秀者の勉強の仕方を紹介することで、学生は内容の学習のほかにメタ学習の機会を得たことと思われる。また、１月１日に起こった能登半島地震をふまえて次の回のテーマを災害心理学に変更した。このような即応的な話題提供も、学生に心理学への興味・関心を維持高揚させることに関与したと思われる。

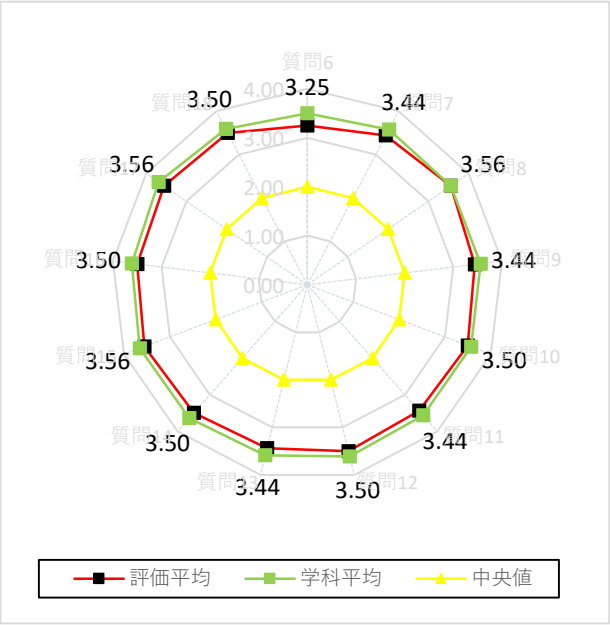
（３）次年度に向けての取り組み

この授業自体は今年度までだが、類似する他の授業でも今回の取り組みを生かしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		発達心理学	87名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

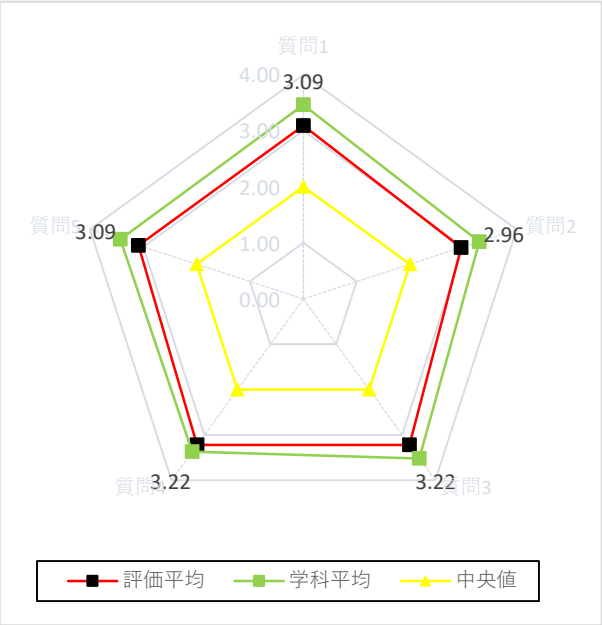
令和４年度の授業評価対象となっている。ここでは分析対象としない。

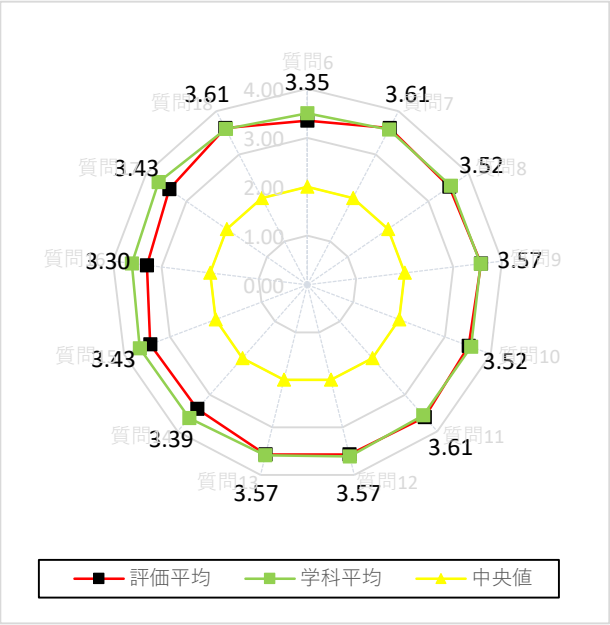
（３）次年度に向けての取り組み

令和４年度の授業評価対象となっている。ここでは反省の対象としない。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理カウンセリング概論	46名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

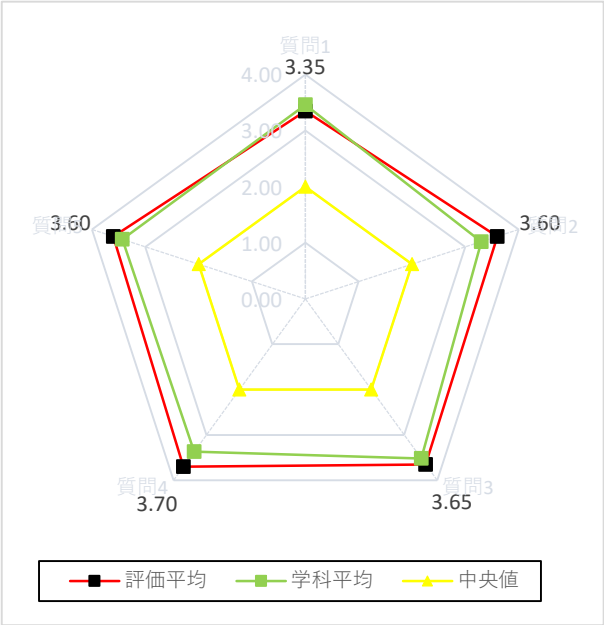
シラバスを用いて授業開始前に説明はしているが、十分に伝わっておらずわかりやすく説明をしないといけないと思う。
学科平均と村部て、あまり落ちている項目はない。
双方向的なやり取りのある授業が必要である。

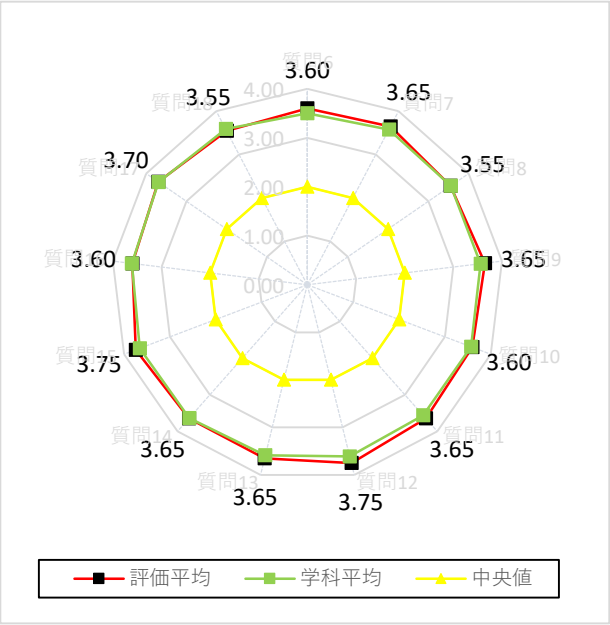
（３）次年度に向けての取り組み

シラバス説明を十分に行うよう努めたい。
授業が一方的にならないよう学生の意見を聞きながら授業をすすめていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		特別支援教育総論	91名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

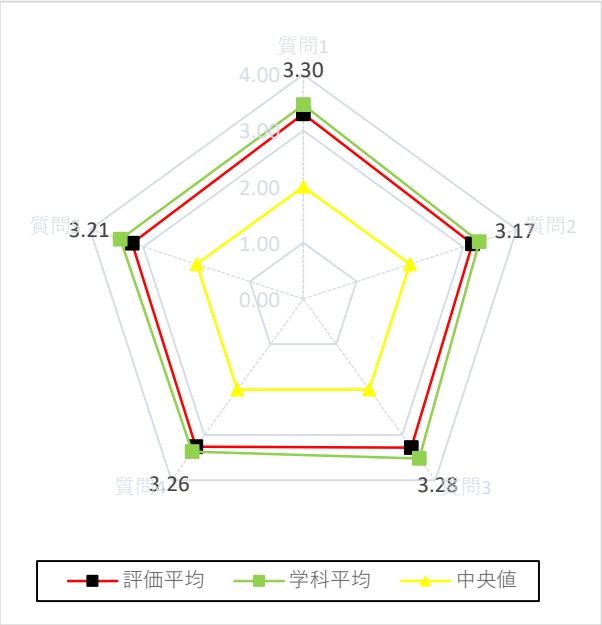
評価平均は学科平均をやや上回り、評価項目間には数値のばらつきが少なく、評価結果はバランスの良いものであったと考える。

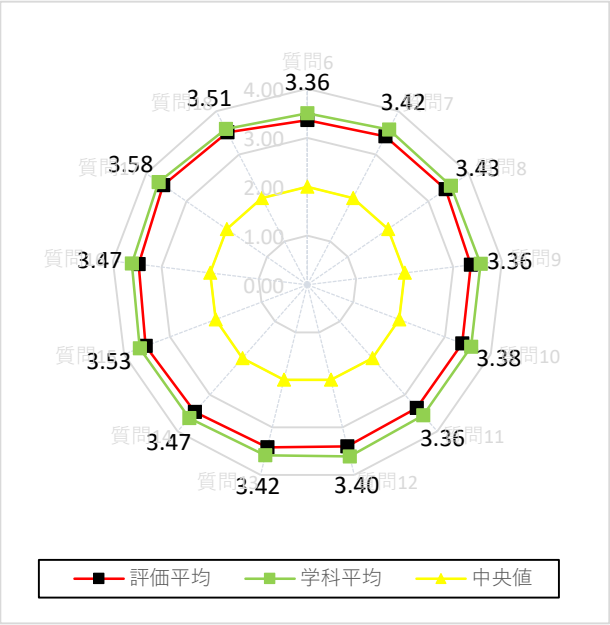
（３）次年度に向けての取り組み

今年度の授業を踏襲しつつ、必要な改善を加え、授業の充実に努めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		教師論	87名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

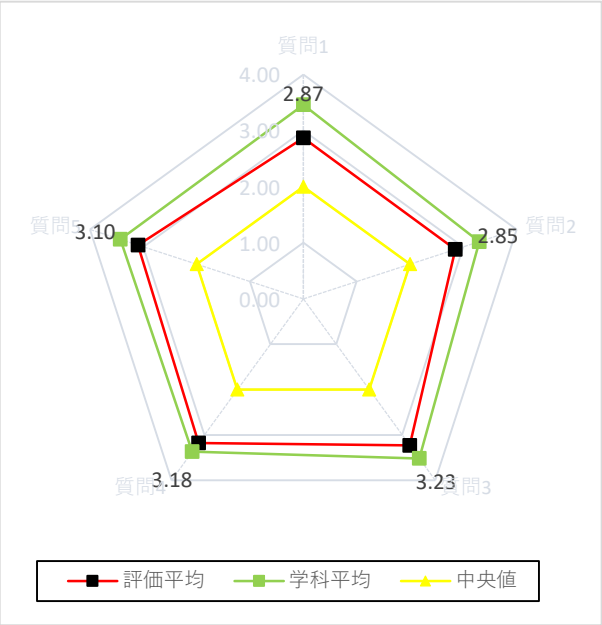
学科平均とほぼ同じ傾向である。

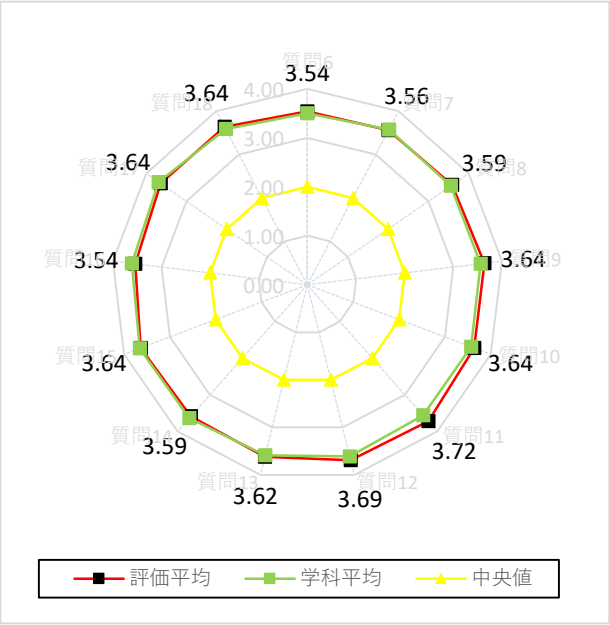
（３）次年度に向けての取り組み

さらにわかりやすい講義に取り組む。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		臨床心理学概論	47名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

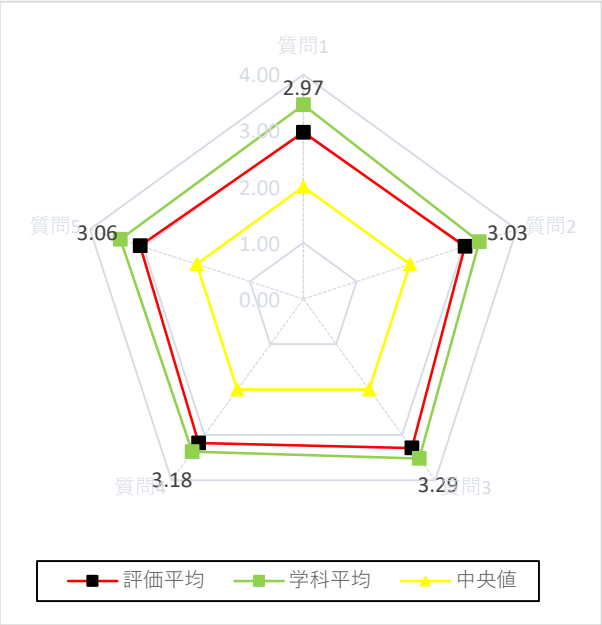
学生自体が、授業を主体的にやっていたかが、やや問題になっているようです。講義は満足できるようでした。

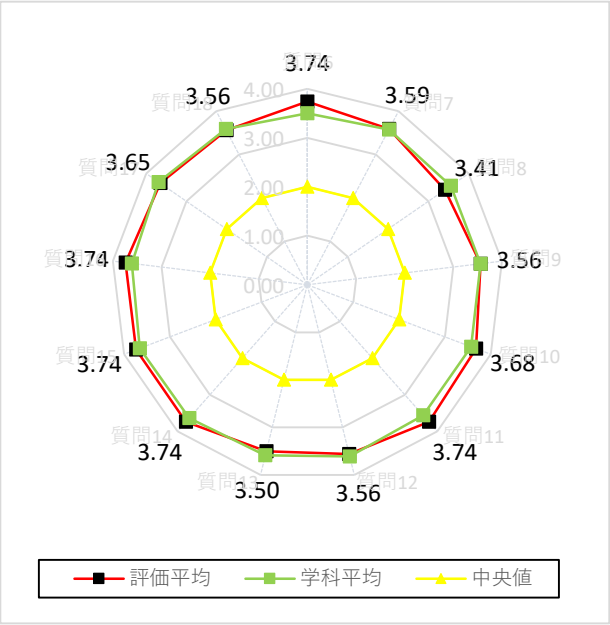
（３）次年度に向けての取り組み

学生が主体的に学修できるように導きたいと思います。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学研究法	46名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

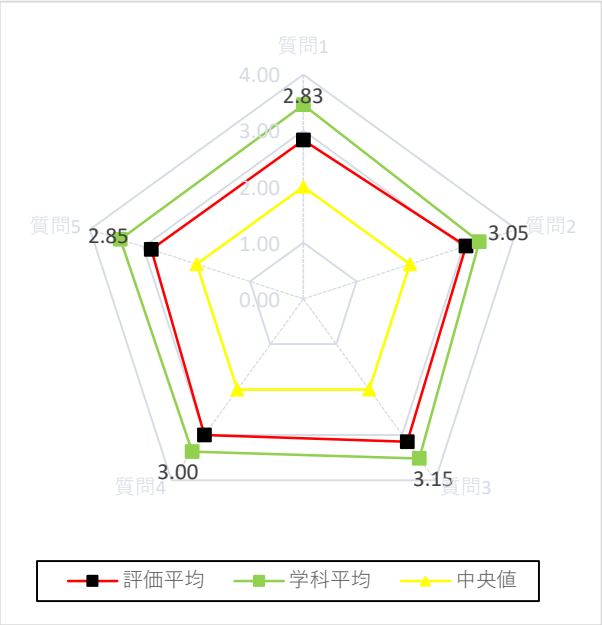
心理学の理論や援助に関わる科目に比べ、この領域の評価は低くなりがちであるものの、ほぼ学科平均レベルを保っていた。その中でも、質問８や13が若干であるが学科平均よりも低くついているところは、学びの定着に比して進度が早いのかもしれない。ただし、その分、質問11による資料の使用や、質問14や16で質問や意見が促されることになり、それに対する対応がよく評価されたことが考えられる。

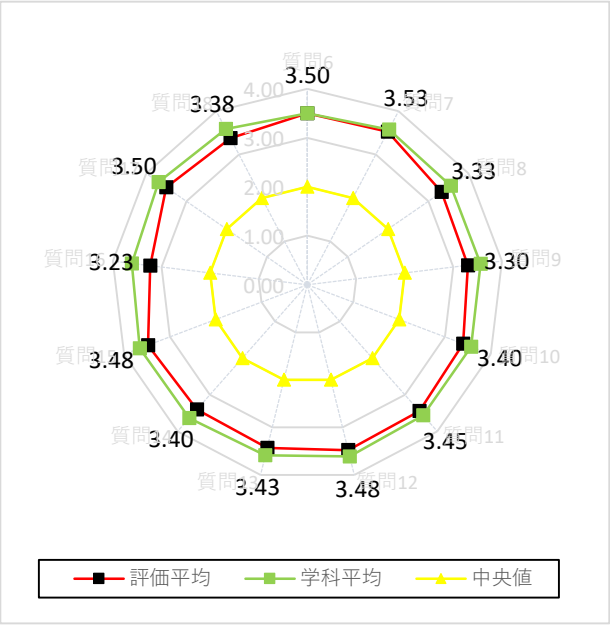
（３）次年度に向けての取り組み

次年度は別の教員が担当することになっている。後任者によかったところや難しかったところを伝え、充実した授業を行ってほしいと思う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学実験Ⅰ	48名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

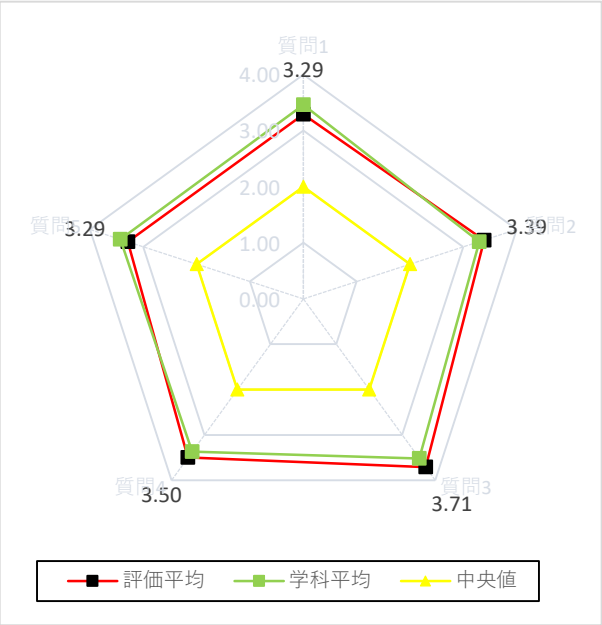
３点台前半なので悪い評価ではないが、学科平均と比べると全体的に見劣りのする結果であった。テーマごとに回数をかけて実験の実施と分析、執筆と進めていく性質のため、欠席が学びに与える影響が大きくなることが考えられる。

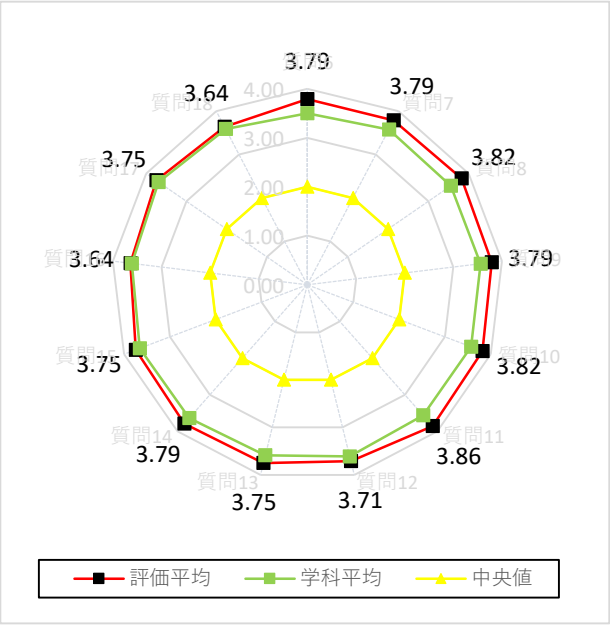
（３）次年度に向けての取り組み

次年度は授業者が一部交代し、授業回数や実験数も変更されるので、同じ条件での評価にはならないが、欠席が学びに及ぼす影響を補うための方策が、プリントを渡す程度しかない現状に対しては、録画録音を含め何らかの検討を試みたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学実験Ⅱ	44名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

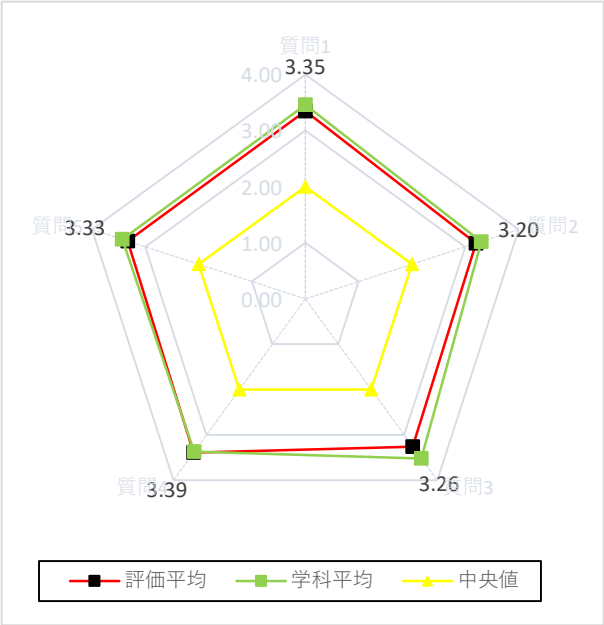
全項目において、ほぼ学科平均を少し上回る結果であった。
質問６～１３までは、授業・教材の工夫についての評価であったが、平均より上回っている。
学生の主体的学び・アクティブラーニングへの工夫が、学生からの評価に反映されていたといえる。

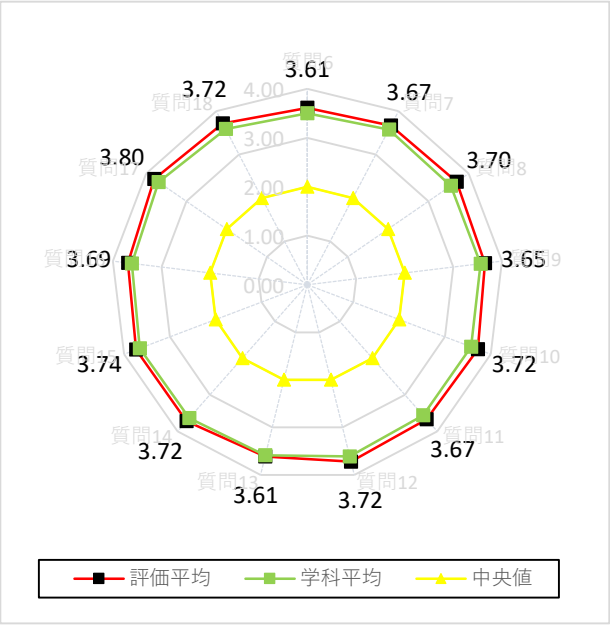
（３）次年度に向けての取り組み

次年度もアクティブラーニング、学生の主体的・能動的学びを実験の中でどのように担保するか、教員間で工夫して取り組んでいく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼児理解の理論と方法	63名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

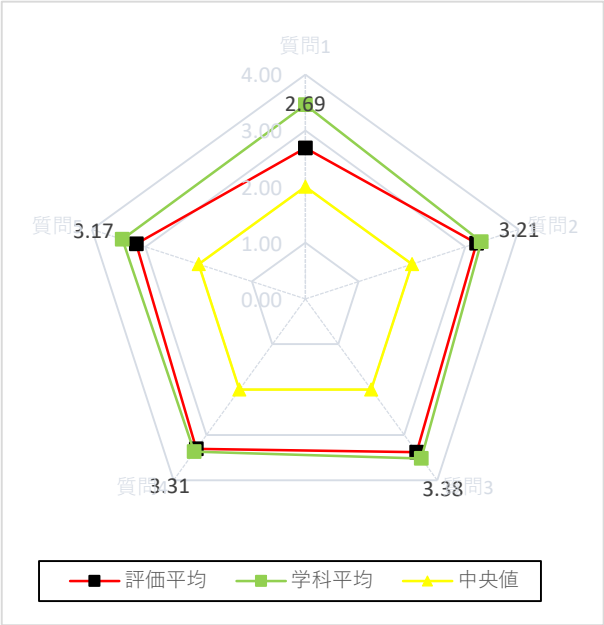
授業に対する学生の評価の平均値は学科の平均値に比して、全ての項目において０．１以上高かった。これは評価者が１年生ということも関係している。このことを差し引いても、授業者の授業が学生に高く評価され、本科目の授業に対して一定の満足を感じながら受講しているととらえられる。従来質問６の「シラバス（授業計画）について説明がありましたか。」の評価が低かった。今年度はこれを意識して対応した。その結果がそのまま表れていると思われる。学科平均値を０．２以上高い項目は質問８「授業は興味・関心が持てる工夫がされていましたか。」と質問１０「視聴覚機器や板書の用い方は適切でしたか。」の２項目である。質問８は授業者が授業展開の中で最も留意しているところである。このことが評価に反映されており、意図通りの評価が得られたと思われる、。質問１０はパワーポイントでの表示について、学生がその内容を筆記する時間的猶予を与えていることが反映されたものと思われる。相互評価も高く、全体として良好な授業実践と思われる。一方学生の自己評価は学科平均と近似の評価となっている。このことを次年度の課題とする。

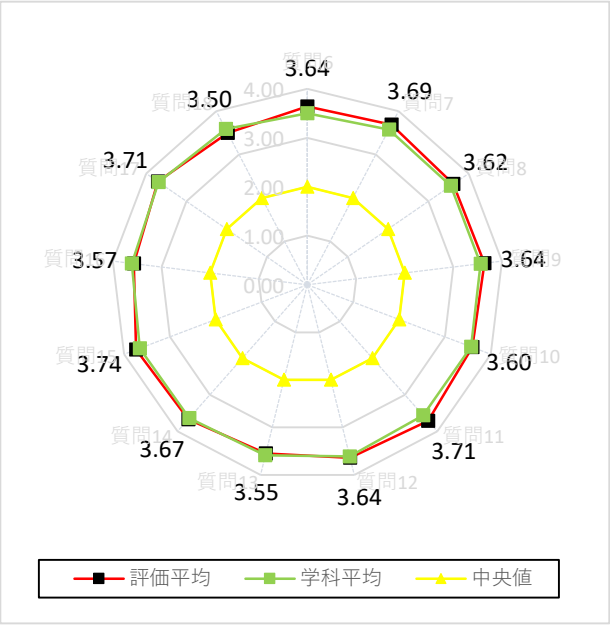
（３）次年度に向けての取り組み

授業評価は全てにおいて、学科平均より高い。これまでの実践を積み重ねることが肝要と思われる。一方学生の自己評価が学科平均と近似の評価となっている。学生の主体性を尊重しながら、授業にわがこととして取り組むように促したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容総論	60名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

学生の授業評価については、すべての項目で一定以上の高い評価を得ている。本年度はすべて対面授業ができたため、コロナ禍におけるオンライン授業と異なり、学生とより双方向の授業が可能となった。

一方通行の授業にならないように一人ひとりからの意見を聴くように努め、演習として手遊びをするなど工夫して行い、学生も積極的に参加することができた。双方向的な授業であるアクティブラーニングを意識して進めたことがこのような評価につながっているのではないだろうか。

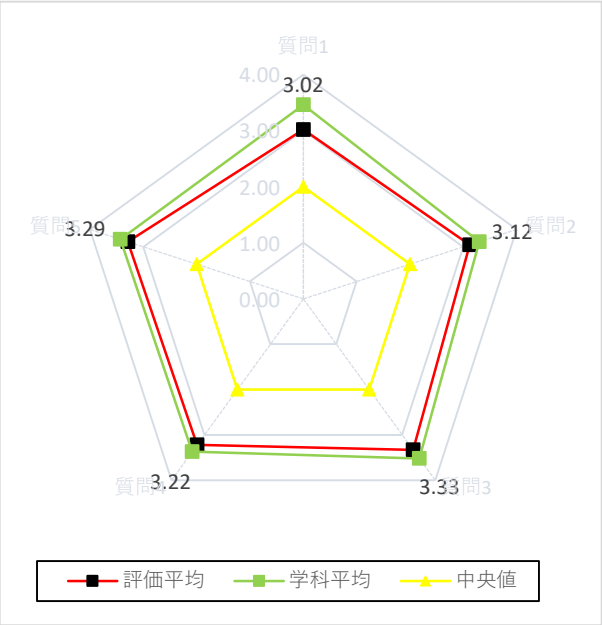
また、本授業は1年次後期の授業である。次年度には初めての実習体験をすることを視野に入れて、学生が子どもの姿や保育所・幼稚園の1日の流れをイメージできるような授業が期待されていると考える。そのため、特に保育現場で求められる「記録」の取り方については実際にワークをとおして重点的に行った。その成果は現場での実習に活かされると期待する。

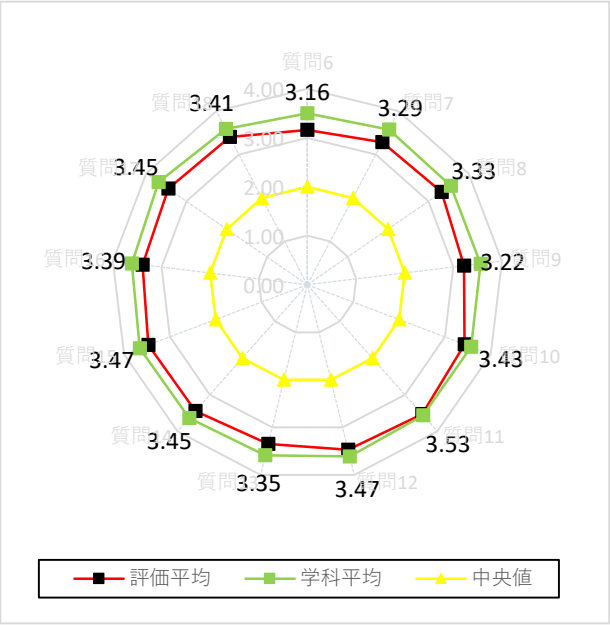
（３）次年度に向けての取り組み

令和6年度については、対面授業をとおしてより双方向的な授業が可能であると考える。基本的には今年度と同様の方法で授業を展開したいと考えている。実際に保育現場に実習に出る際に、その成果が発揮されるよう細かくサポートする体制が必要である。今後も、より現場に即した内容の授業ができるよう、対面授業の特性を活かし、アクティブラーニングの形で行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容指導法（人間関係）	67名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

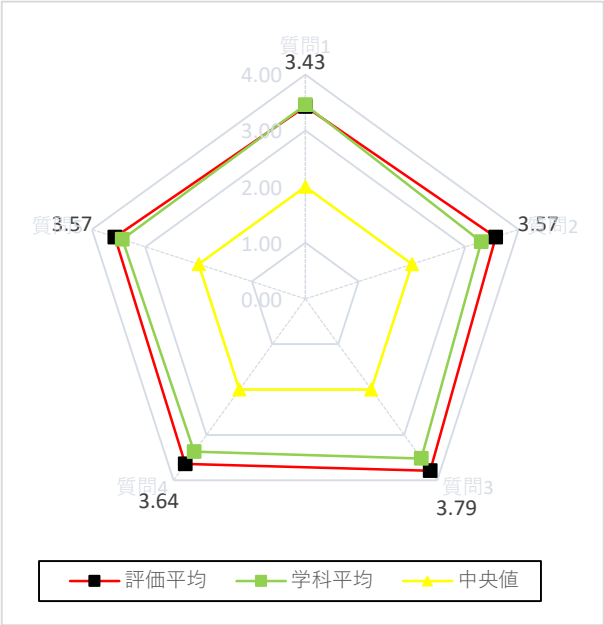
この授業は、乳幼児期の人間関係の発達に応じた遊びや生活環境について事例を通して学ぶ事。また実習の経験を活かし、人間関係に関する内容と人的環境の重要性について理解する事。担当制で手遊び発表・指導案作成など保育技術の向上である。学生が育った環境や実習体験から自分に引きつけて考え、個人で感想を書いて見つめる機会を作った。事例や実習体験エピソードの取り扱いは、周りの学生で意見を交換し合い、他者の考えにも触れる機会となり、グループで話し合うことで全体で発言することもスムーズに出来ていた。自由記述には「質疑応答に優しく答えてくれ、ワークシートも分かりやすくまとめてあり、楽しい授業」とあった。また「DVDを視聴したり、教科書の内容を互いに共有する時間が設けられて学びのある授業」とあり、他者が「教科書を読んでいる時間、ぼーっとしているのでその工夫が必要」との意見もあったので是非改善したい。グラフの質問1欠席状況は、他学年の幼稚園教育実習Ⅱ・小学校教育実習の公欠の影響もあったが、体調を崩す学生も多かった。質問6は、一回目にねらいやスケジュールを詳しく説明しているので、シラバスとして学生に周知させたい。

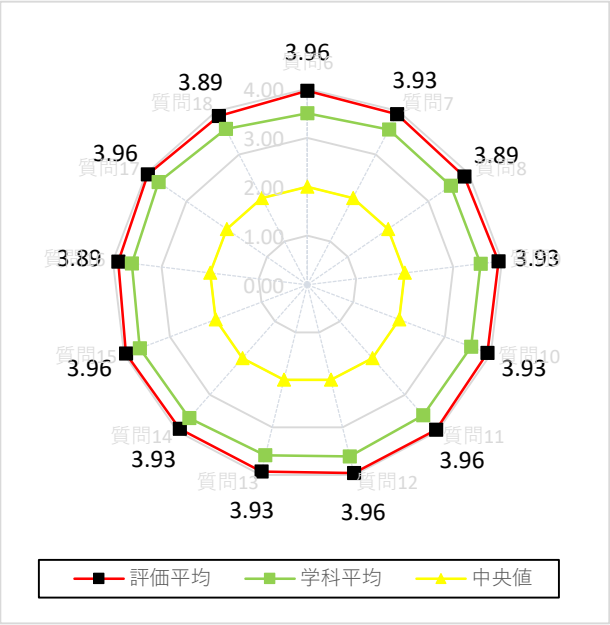
（３）次年度に向けての取り組み

事例や経験談を大いに取り入れ、意見交換をして大事な事を心に留める時間を作りたい。教科書で理論的なこと確認していく時間の改善が必要なので、今までよりも増して質問や確認を学生に振っていく。手遊びは楽しい模擬保育とし、頑張りの度合、貢献の評価を工夫したい。指導案は次回の正規の実習に生かせる計画案としてより実践的にしていきたい。毎回、授業の感想を文章で書くことに関しては、得て不得手を考慮しながら、時にはフィードバックして表現することが個々人のステップアップになるので、十分に配慮したい。その感想を授業の最後には学びのプロセス図解として個人でまとめる中で、人間関係を浅く捉えている学生もいる。ポイントは①愛着形成や信頼関係の構築が土台、②子どもが遊びや生活の中で心情や意欲を持って行動、③友だちとの関わりにおけるいざこざを当事者として解決していくことが人間関係の力となる、④保育者の援助の見極めや役割の重要性、⑤乳幼児期の心の発達と身体的発達の両方の特徴を専門的に理解する事、の等を捉えて、今後の実習や経験において気づいて欲しいので、教員の評価に留まらず、図解の活用を考えていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		カウンセリング基礎演習	42名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

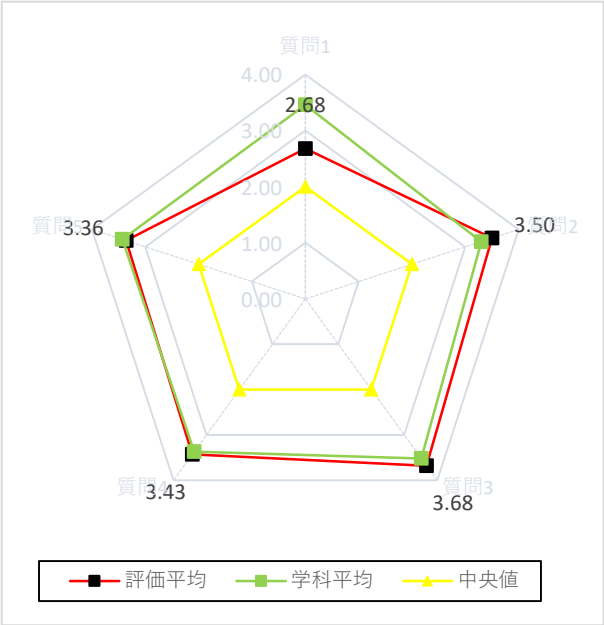
すべての項目において、学科平均を上回る結果であった。
これは、
・授業回ごとにシラバスの確認を学生と行う。
・授業を欠席している学生には毎回メールにて授業内容の確認・保証を行う。
・授業がグループディスカッション・ペアワーク・グループ学習といったアクティブラーニングを毎回実施する。
・授業後、Teamsを用いて学生に授業の理解度を記載させ、教員がコメントを行って返却する。
上記授業の工夫が功を奏していると考えられる。

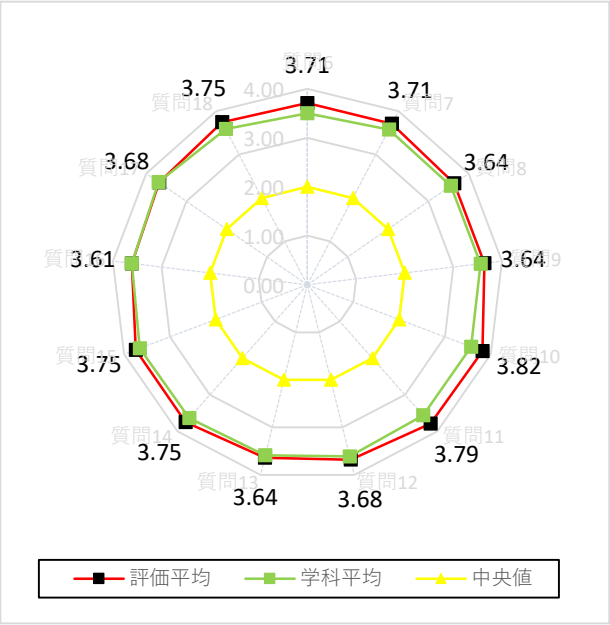
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も引き続き上記授業の工夫を行っていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		カウンセリング実践演習	44名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

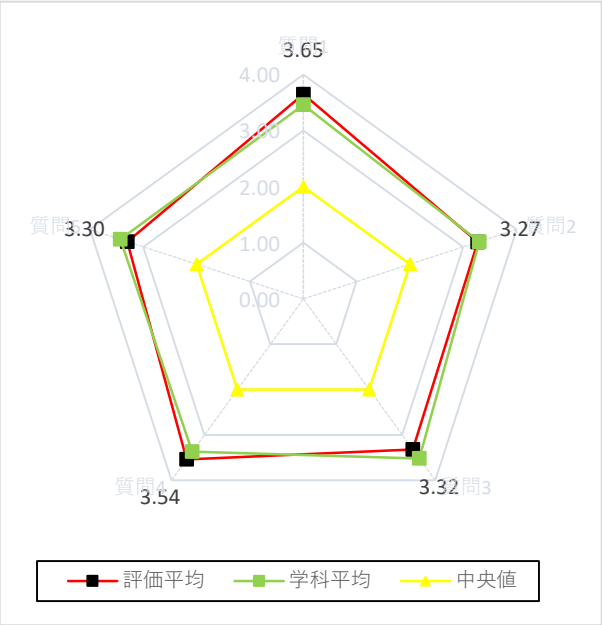
質問１を除いて残りの項目すべてにおいて、学科平均同等もしくはそれを上回る結果であった。
これは、
・授業回ごとにシラバスの確認を学生と行う。
・授業を欠席している学生には毎回メールにて授業内容の確認・保証を行う。
・授業がグループディスカッション・ペアワーク・グループ学習といったアクティブラーニングを毎回実施する。
・授業後、Teamsを用いて学生に授業の理解度を記載させ、教員がコメントを行って返却する。
上記授業の工夫が功を奏していると考えられる。

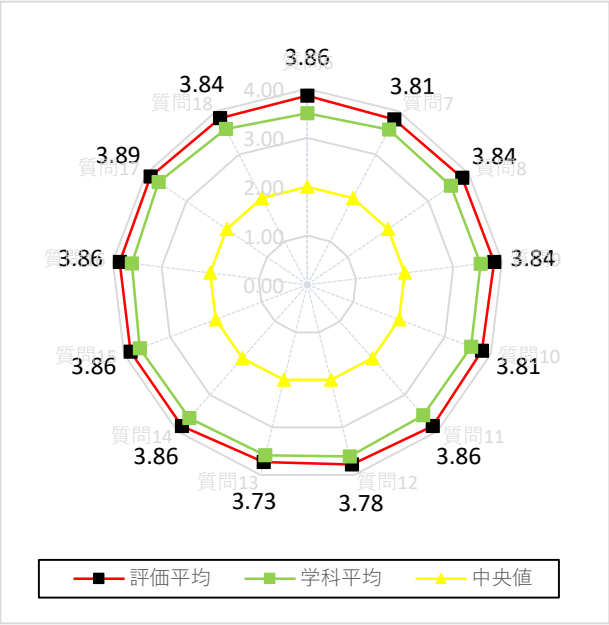
（３）次年度に向けての取り組み

質問１が学科平均より低いことについては、授業内容が「自己理解を深める」「他者理解を深める」といったカウンセリングの基礎を深める内容であり、その内容に耐える資質がまだ育成できていない学生は、授業自体に出席することが難しくなると考察する。
次年度は、
・授業内容や評価について、学生に理解できるように説明する。
・グループワーク・グループディスカッションの内容が侵襲的にならないように配慮する。
以上２点を、担当教員で工夫しながら実施する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		発達心理学Ⅰ	44名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

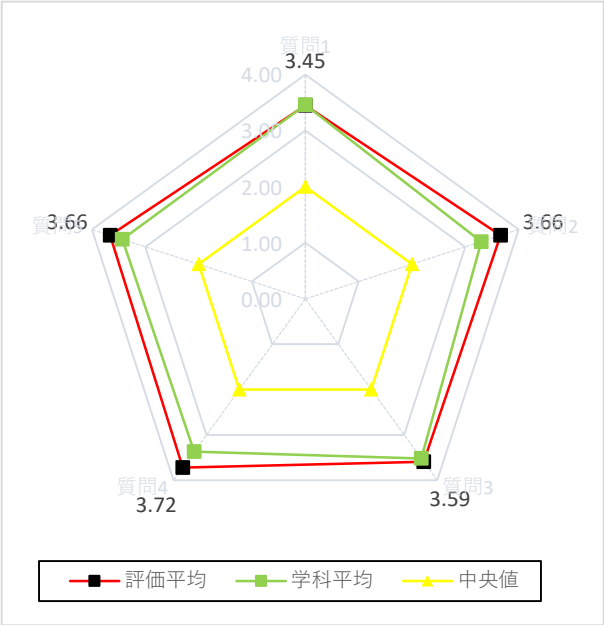
質問３以外は、学科平均より高い数値となった。
午後の授業であり、学生の疲れも大きく居眠りをした学生が自己反省的に評価をした結果だと考えられる。
その他は、双方向の授業実践により、きめ細やかな授業構成ができたことが評価につながったと考えらえる。
特に、視覚教材の工夫やＤＶＤ利用などにより、より理解しやすいように授業を実施したことが有効であった。

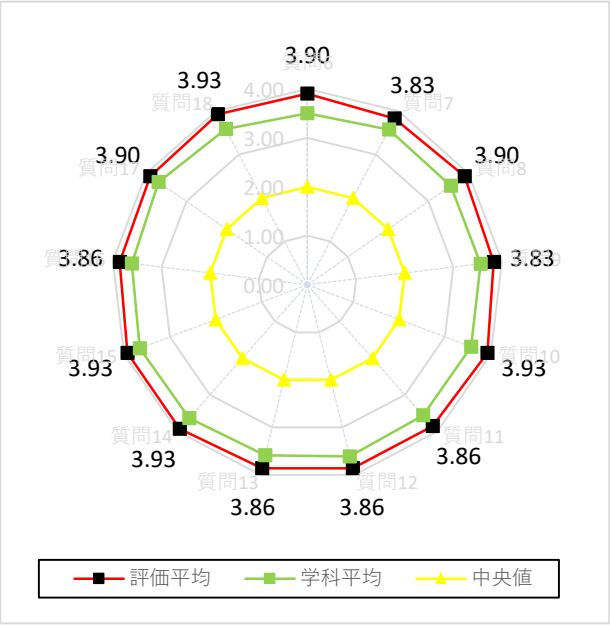
（３）次年度に向けての取り組み

１年次の初段階における科目のため、学生が理解しやすいよう双方向の授業実践を続けていく必要がある。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		発達心理学Ⅱ	41名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

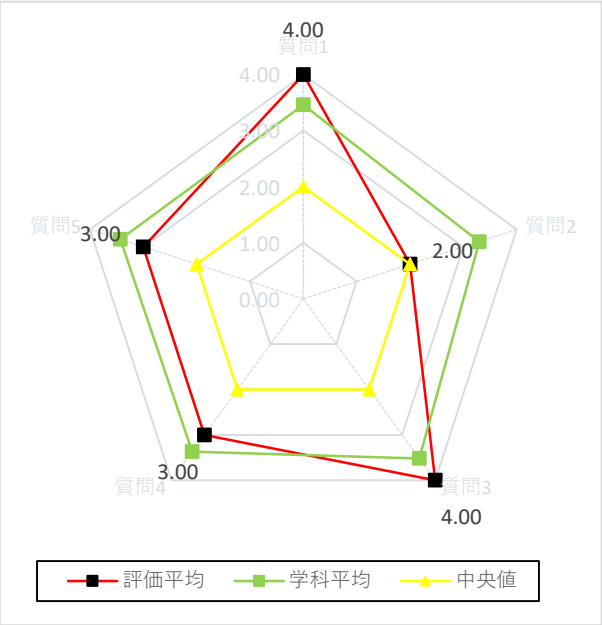
全てにおいて、学科平均よりも高い数値となっている。
発達心理学Ⅰに引き続き、発達の学びのつながりの工夫によって高い評価となったと考えられる。
特に、記述式による小テストを用いたことで、より理解しやすいよう授業内容の提示を行い、学生の意欲や理解につながった成果だと思われる。

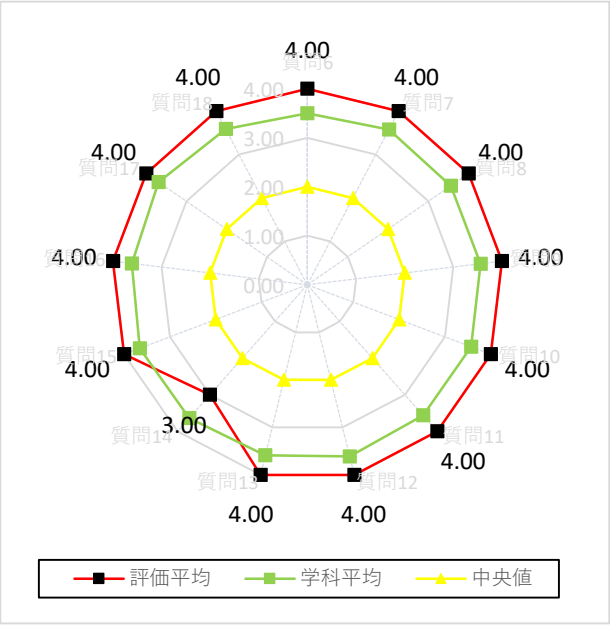
（３）次年度に向けての取り組み

１年次後期において、次年度への土台となる学修になるよう学生が理解し、より学びたいと意欲な姿勢につながるようなシラバスの工夫が必要であると思われる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		教育相談の基礎と方法	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

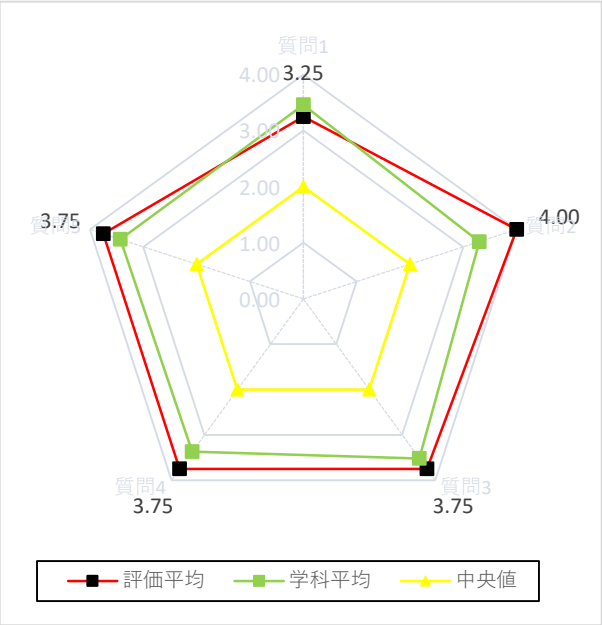
令和４年度の授業評価対象となっている。ここでは分析対象としない。

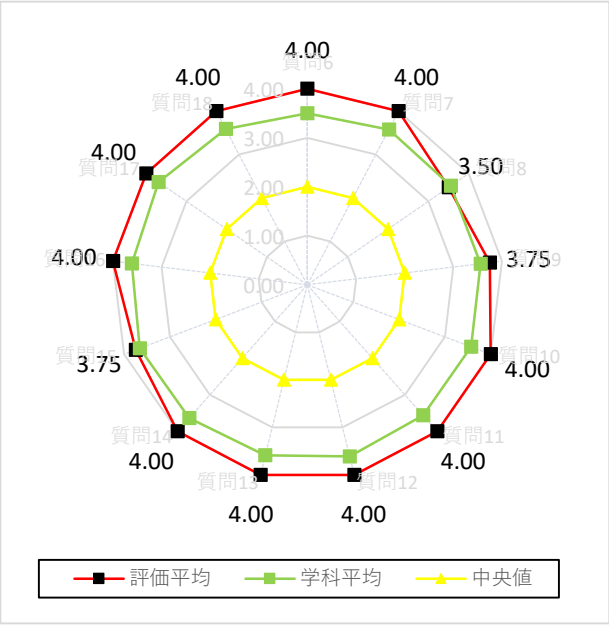
（３）次年度に向けての取り組み

令和４年度の授業評価対象となっている。ここでは反省対象としない。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		知的障害者教育	51名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

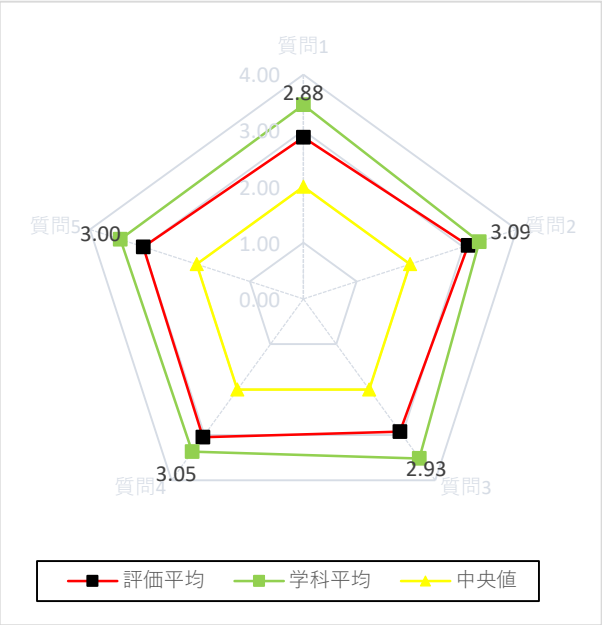
評価平均は学科平均を上回り、評価項目間には数値のばらつきが少なく、評価結果はバランスの良いものであったと考える。

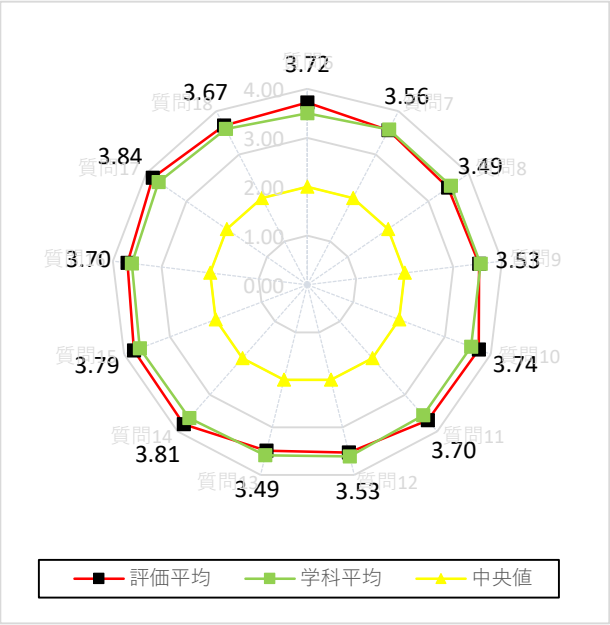
（３）次年度に向けての取り組み

今年度の授業を踏襲しつつ、必要な改善を加え、引き続き授業の充実に努めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		社会・集団・家族心理学Ⅱ（家族心理学）	47名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

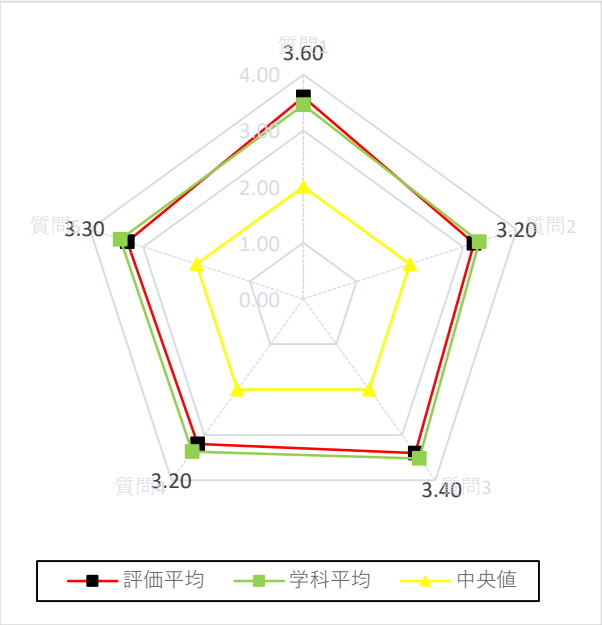
授業評価回答率は授業最終回に回答時間を設けたことから、91.5%という高い回答率であった。教員への評価は学科平均と同程度であった。
家族心理学に関する様々なテーマに関して、学生が調べたことを発表し、テーマに関連するグループディスカッションを取り入れ、教員が解説を行う形で行った。授業終了時の感想では、「グループワークで色々な意見が聞けて良かった」「自分たちで調べることでより理解できた」との感想が見られていた。授業評価の自由記述では「過去の公認心理師試験の問題を期末課題として解くことで試験対策にもなり助かりました。」という意見や、生活に役立つ知識が身につけられたこと、家族に限らず人間関係の在り方について理解することができたこと、追加資料で理解が深めやすかったことなどの肯定的な意見も見られた。学生の発表時間とグループワークの時間、教員の解説時間のバランスに留意したことも肯定的な評価につながったと考えられる。

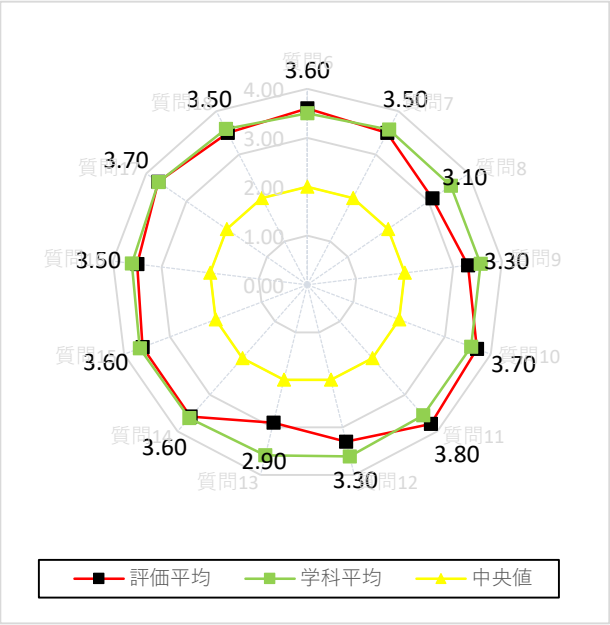
（３）次年度に向けての取り組み

学生の主体的学修推進のための授業形式であることの意義を周知して授業を進めることを次年度も意識したい。グループワークの取組みは高い評価も得られており、公認心理師資格試験の過去問解説などについても、今後も継続していきたいと考える。
授業評価回答数について、次年度も高い回答率を維持できるよう、授業最終回に十分な時間を設けて回答を促していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		知的障害者教育総論	54名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

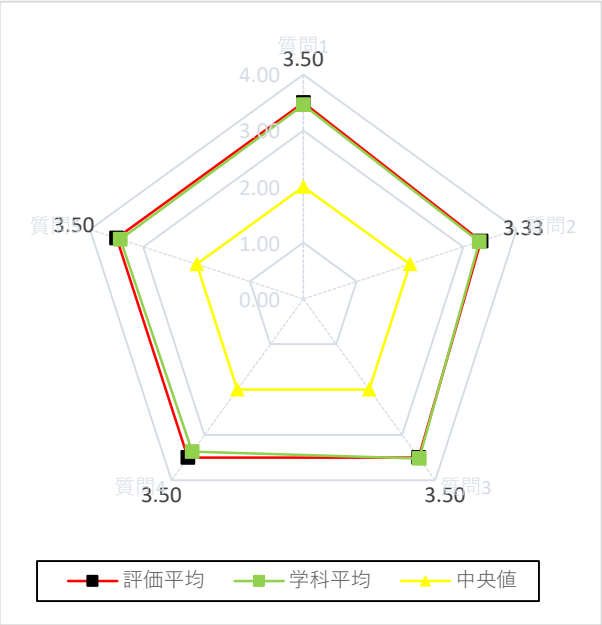
評価平均は学科平均程度であるが、一部の項目で学科平均を下回った。（興味・関心、授業進度）

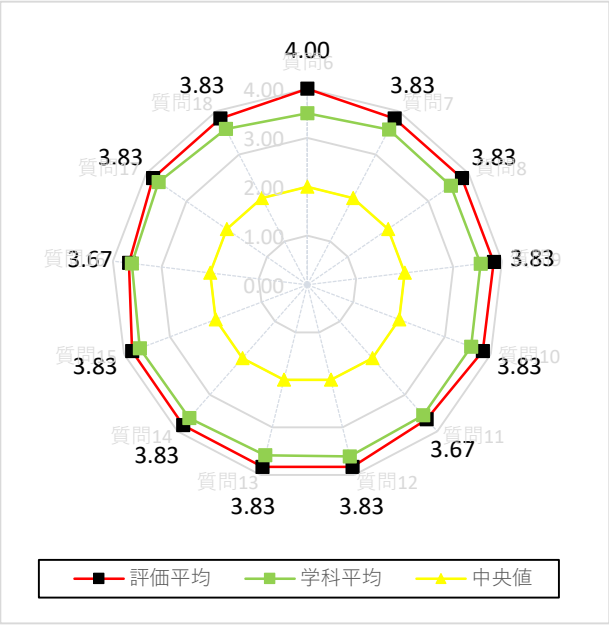
（３）次年度に向けての取り組み

今年度の授業を踏襲しつつ、学生の興味・関心や授業進度等に就いての配慮を加え、引き続き授業の充実に努めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども 心理カウンセリング		子どもの支援Ⅰ（基礎・実習）	8名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

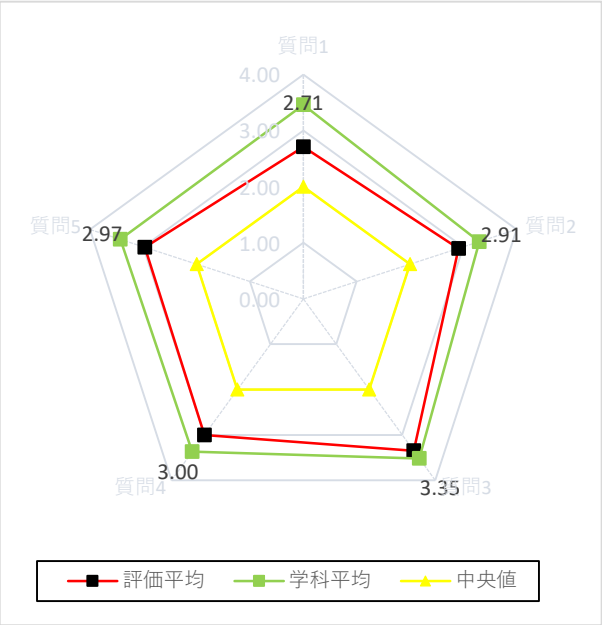
概ね計画通りに実施できた。
また、演習に関しては、当初の計画より、さらに内容量、質ともに実施できたと考える。特に、学生が主体的に学ぶ機会の確保や、その機会の中で、多様な学びの方法（ディベート含め）を経験する場を提供することができたと考える。

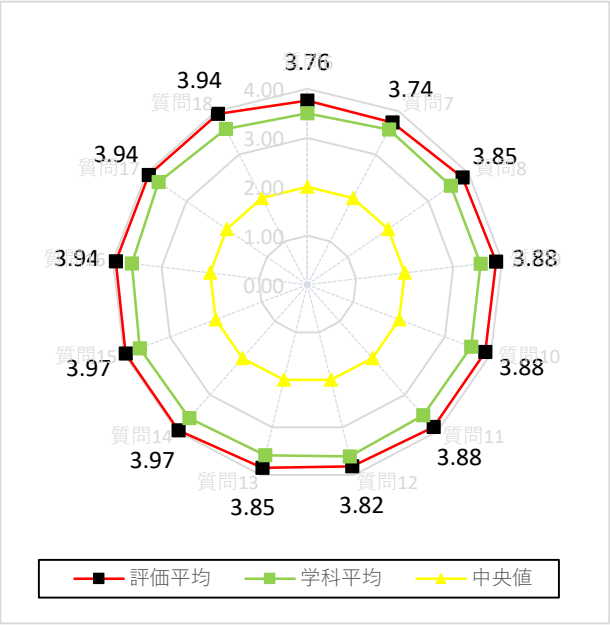
（３）次年度に向けての取り組み

感染症対策等の緩和により、学びの環境の提供等を柔軟に計画、実施することが可能となってきた。
また、この講座は近年特に保・幼・小・中等々の保育、教育の場で重要となってきた育ちにくさのある幼児児童等への理解と対応、及びその家族支援を含めた発達支援の在り方を学ぶことができる大切な機会であると考える。特に、理論、演習、実務等々幅広く、継続的な学びを可能とするものであると考える。今後も、継続的な学びの場の提供や専門性の獲得に向けた授業構造の工夫を行っていくこととする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		教育・学校心理学	49名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

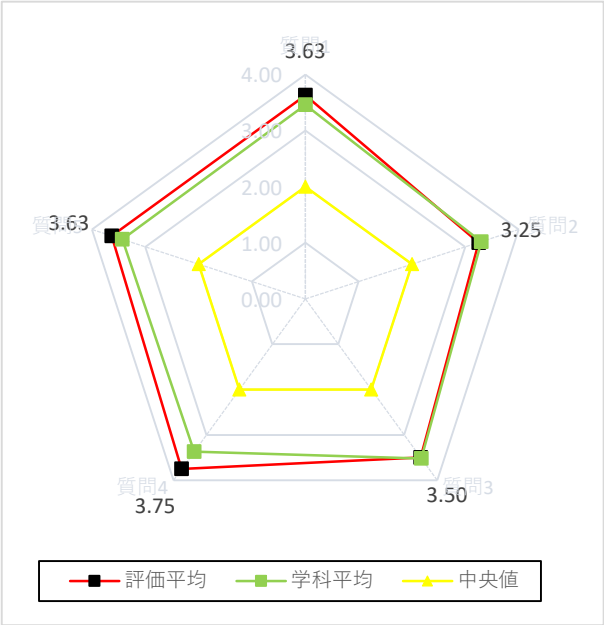
講義としては、昨年度よりも高い評価を得ている。継続して高い評価である講義を維持できるように実施していたい。映像の更新や研究内容に関しても最新のものを取り入れて、講義を行っていきたい。

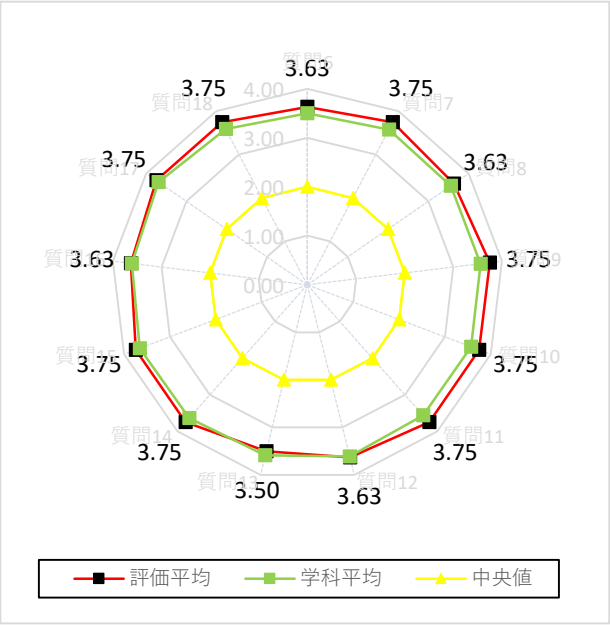
（３）次年度に向けての取り組み

次年度に向けては、上記でも記載したように高い評価を維持していきたい。また、最新の情報（研究成果を含む）ものも取り入れながら、講義を行っていきたい。また、好評であった個別ワークに関しても、引き続き行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		障害者・障害児心理学	52名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

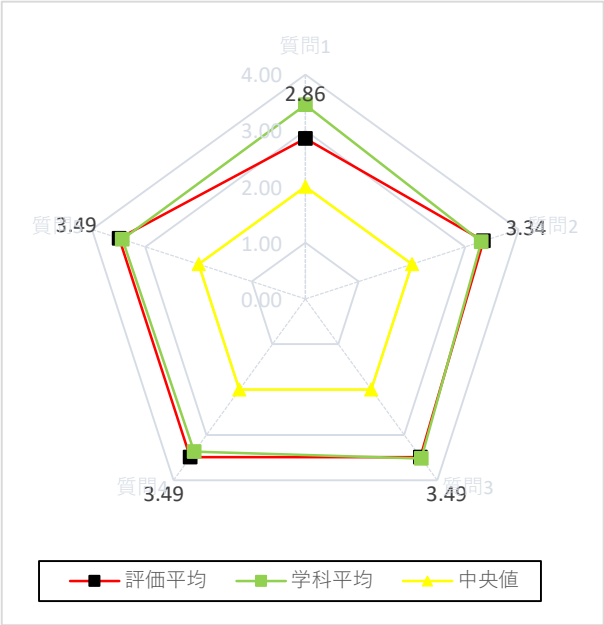
すべての項目について、学科平均同等、もしくはそれを上回る得点であった。
質問１は学科平均が3.19のところ3.63，４は学科平均が3.37のところ3.75，５は平均3.3のところ3.63と大きく上回っている。
これは毎回の授業で、
・授業の復習
・次週への予習
をパワーポイントで学生に示し、自己学習への動機づけを行ったことと、
・小テスト
を実施したことで、学生への主体的学習態度を促進することができたと考えられる。

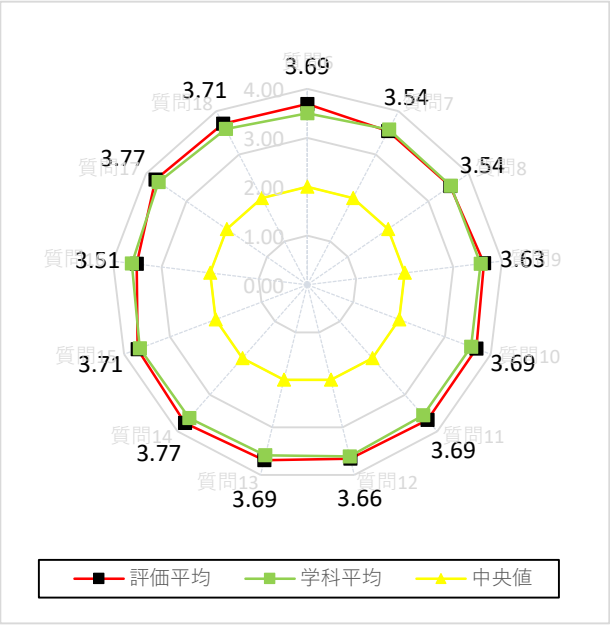
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も引き続き上記内容を取り組んでいく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学的支援法	42名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

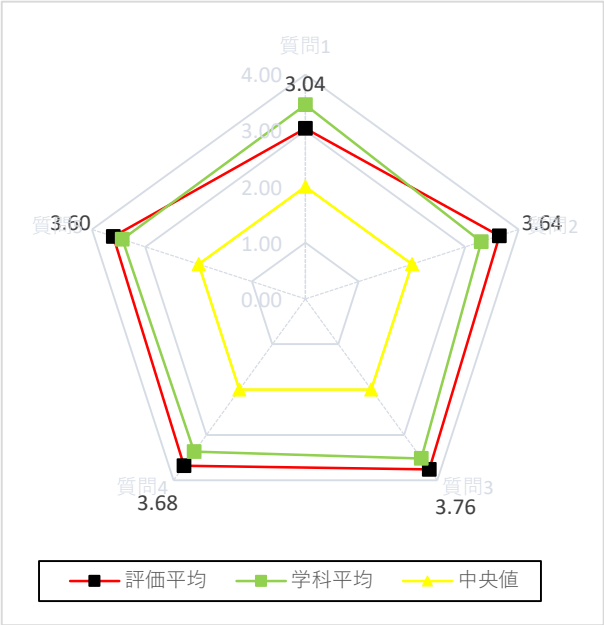
学生の学びのところで、やや低いか、学科と同じになっています。講義は学科の平均だと思います。

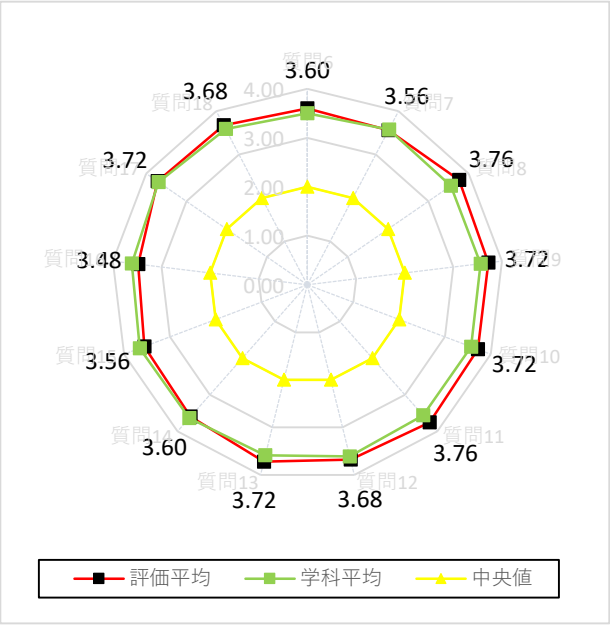
（３）次年度に向けての取り組み

学生が主体的に学修できるように最初のオリエンテーションを大切にしたいと思います。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		遊戯療法	44名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

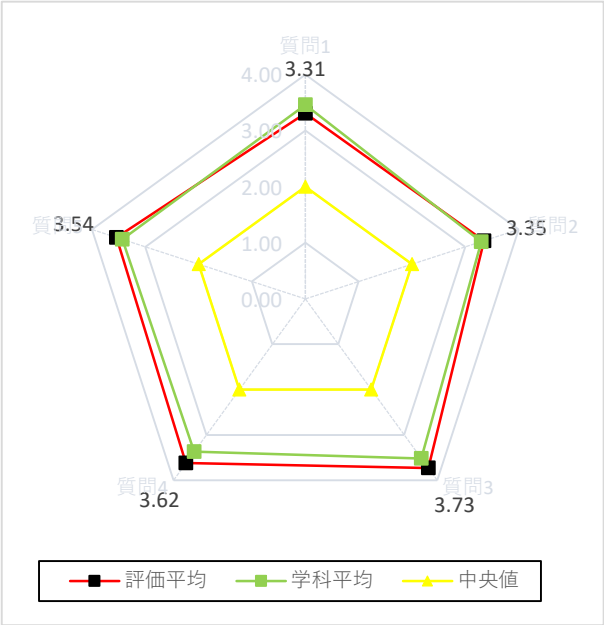
学科平均と比較しても高い評価を得ている。
学生がこの科目へ興味を持ち授業を受けていることがわかる。
授業の進め方も学生の協力が得られ計画通りに進めることができた。

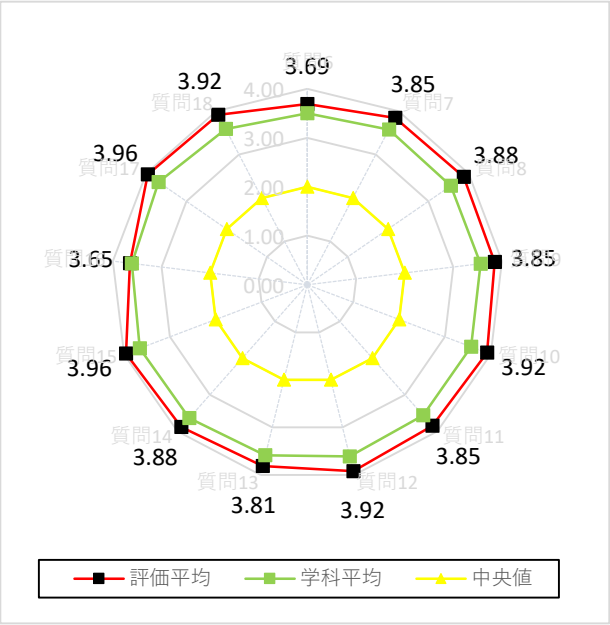
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も学生が興味をもてるような内容で取り組んでいきたい。
さらにグループで話し合いをしながら授業ができればと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		福祉心理学	49名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

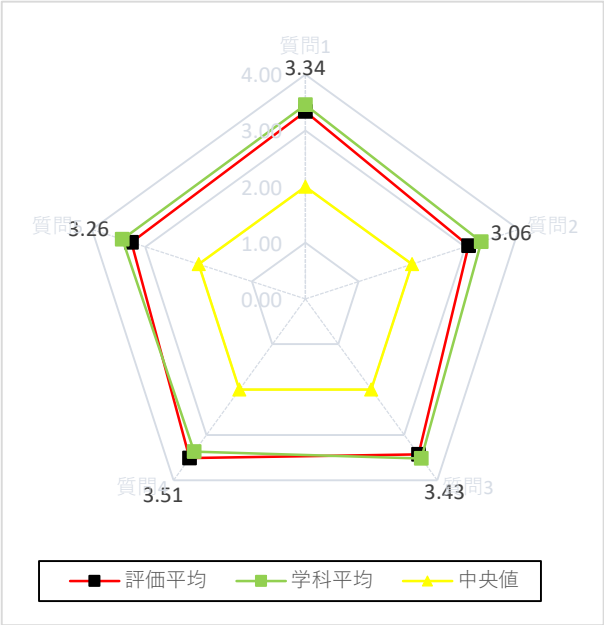
全項目で学科平均以上の得点であった。
・毎回シラバスとの照合を行ってから授業を行う。
・ビデオ動画を用いて具体的なイメージを学生が持てるように工夫した。
などが功を奏したと考えらえる。

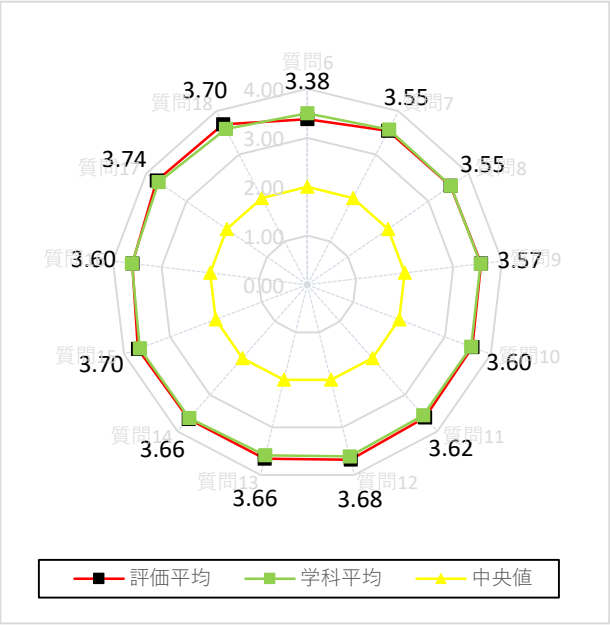
（３）次年度に向けての取り組み

次年度は双方向授業を行うことを意識して、授業への工夫を行いたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子どもの理解と援助	57名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

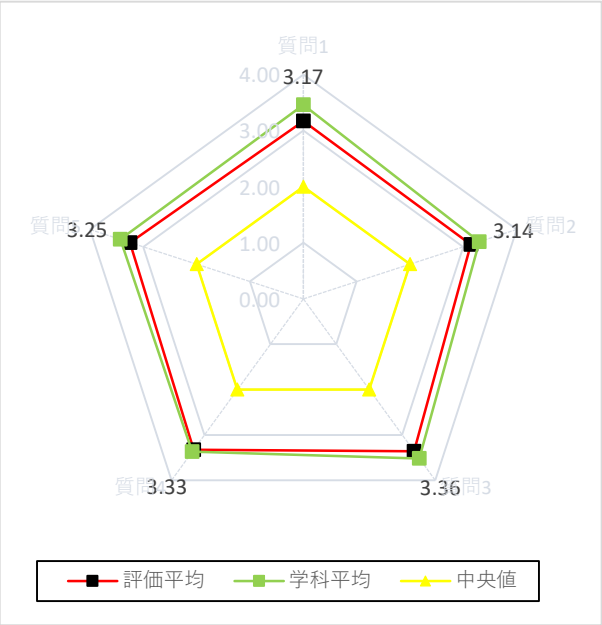
質問６「シラバス（授業計画）について説明がありましたか。」の評価が唯一学科平均の評価より低くなっている。授業者としては授業の展開を説明したつもりであった。ただし、シラバスそのものを取り上げての説明はしていない。そのことが反映された評価と思われる。次年度以降の修正すべき事項としたい。他の項目は学科の平均評価よりも高い。ただし、近似の値である。その中でも声の大きさ、話す速さ、授業の進む速さは０．１５以上高く評価されている。このことは授業者の従来からの特徴である。今後もこの長所を生かした授業展開を実践したい。一方学生の自己評価が学科平均に比べ低い。特に質問２の「シラバス（授業計画）を活用しましたか。」が低い。この評価は当然のことである。授業者がシラバスを読むことを進めたり、これを表示しなかったが影響した評価と思われる。次年度の課題となる。

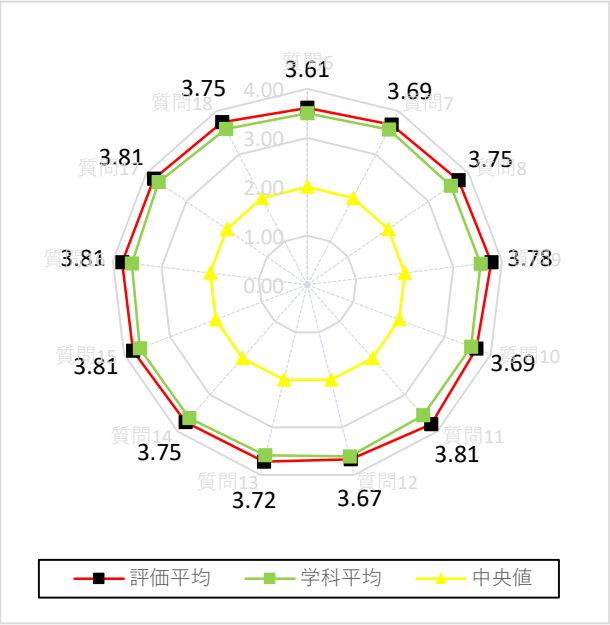
（３）次年度に向けての取り組み

これまでの授業評価の反省事項となっている、「シラバスの説明」をしっかり実践することが求められる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		肢体不自由者教育	43名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

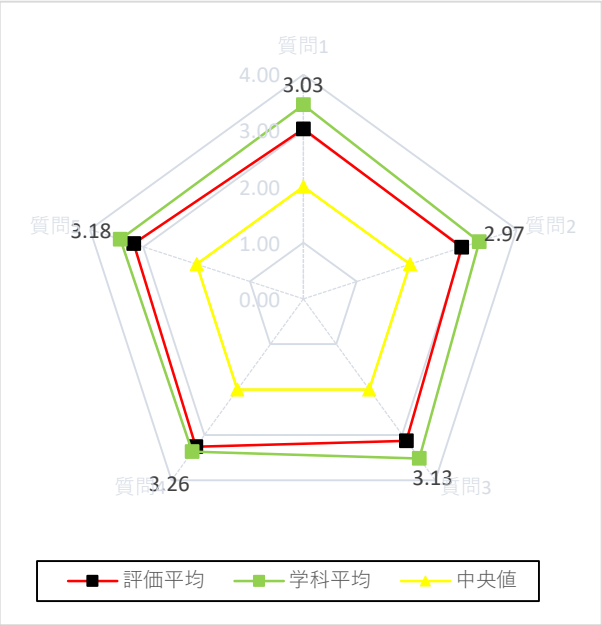
受講生の評価平均から次の3点のことが考えられる。
① 授業全体（15週）を通して受講生は主体的に学ぶ意欲を持って取り組んでくれていた。
② 授業は基本的には「全体像を把握でき、振り返るができる」「必要な時に、必要な情報、知識を得ることができる環境（物理的）の学生への提供」「調べる、整理する、発信するという機会を可能な限り確保する」という授業構造が、受講生の学び易さに貢献した。
③ 常にポジティブな受講生の学習態度、姿勢、発言・発表等の評価を伝えていることが、安心感を持つことに繋がり、また、本授業への親和性を感じることになったと考える。

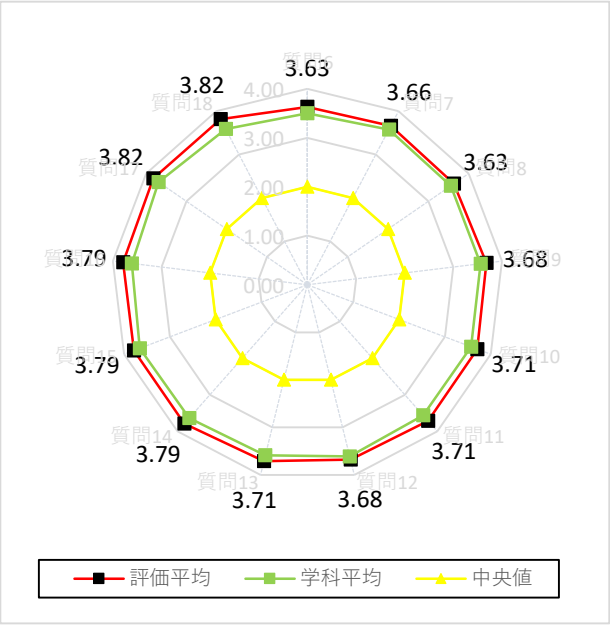
（３）次年度に向けての取り組み

本年度においても、昨年度までの授業の基本的な構造は変える必要はないと考える。
学生は年度ごとに、性格、気質、学ぶおとへの意識等々は異なることがほとんどであるので、特に4月当初の授業において、授業スタイルの定着を図ることを重視したい。
また、授業のスタイルが受講生の中にある程度定着していくのに合わせて、より専門的な知識の獲得、より、実践に結びつくようなケース検討を含めた内容へというように、「より深い認識か、より広い認識へ」というように受講生の学びを進めていきたい。
本授業の受講生に限らず、本学在籍学生の多くが「勉強はしなければならない」という受け身的な学び方である場合が多くみられる。本授業を通して「勉強はしたくなるもの」という積極的、主体的な学びを体験することができるように進めていきたい。そのために、本授業が学生にとって価値あるものとして位置付けられていくように心がけたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		肢体不自由者教育の理論と実際	42名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

本授業は後期設定である。本年度は履修する学生の多くが、教員採用試験実施時期の変更に伴い、小学校教育実習実施期間が急遽変更になり、本授業実施時間を大きく変更することになった。そのこともあり、学生の方がリズムを作ることに苦労したのではないかと思われた。次年度からは本年度の流れが基本となるので、学生の心構えにも変化がみられると思われる。

本授業は前期の肢体不自由教育との関連の中にあることを基本として、肢体不自由教育で理念、本教育の対象となる子ども状況の多様性とそれに伴う教育内容の多様化、関連する多職種連携、保護者との連携等を含めて、幅広く見識をもってもらう内容で構成し、それを受けて本授業では、特別支援学校及び地域の教育機関で学ぶ子どもたちの育ちや実態等の重度化・多様化に対応するために、教育の場で用いられている指導法や考え方等に焦点をあてた内容を前半で行い、後半では、多くの肢体不自由教育を担う教育機関で用いられている方法である「臨床動作法」の理論・技法等の演習を主とした内容で構成している。

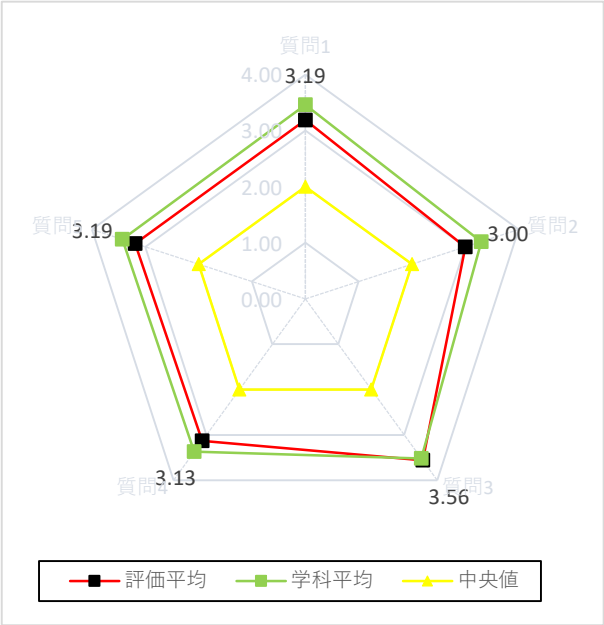
この構成により、学生が知識と実際の体験的な学習とを関連させて学ぶことができているという言える。

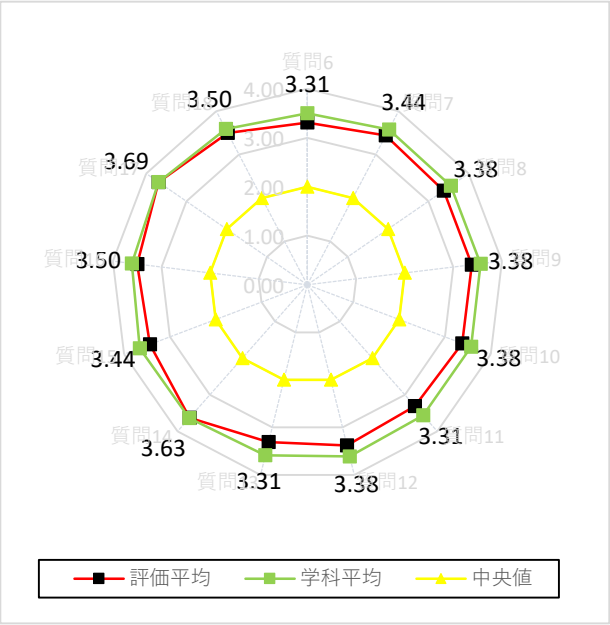
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も本年度の授業の位置づけと内容構成で実施していく。
前半の授業においては、受講生が自身の考えを整理し、発信していくという学びのスタイルを増やしていくこととする。そのことで、より後半の授業における演習との関連が明確になっていくと考えられる。
さらに肢体不自由のある子どもの状態においてその実態は重度化から多様化へと変化してきている。このことは医療的な確定診断の在り方に関連しているところもあるが、実態の多様化の中で肢体不自由という障がいの程度が極めて重篤・重度である場合と、その程度が比較的軽度である場合との二極化の傾向がみられることにも関連している。特にその程度が比較的軽度の場合においては、教科等における限局的な学びの苦手さ、社会性、コミュニケーション行動、自己行動の制御、自己の管理、障がい理解の未熟さ等がみられることが多い。言い換えると神経発達症（発達障がい）として理解すべき子どもが確実に増えている現状がある。そのことを踏まえて、本授業で障がいの多様性という視点で学ぶことの意義は大きく、実際の実習等の臨床で必要なことであると考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども 心理カウンセリング		学校ソーシャルワーク	77名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

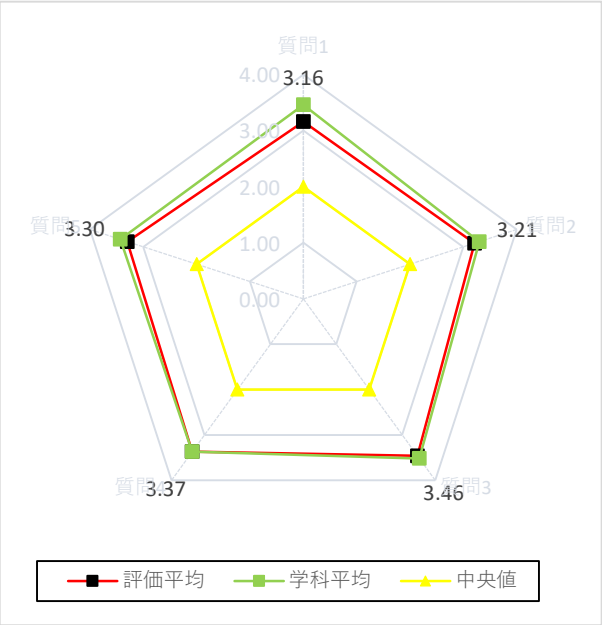
学生との双方向的なやりとり、熱心な態度などは学生から若干の評価を得ていたようだが、授業計画を中心に展開方法や資料等の工夫が学科平均よりやや低いことが分かった。また学生自身の態度評価においても学科平均と比較し、やや主体的に取り組めていなかったと評価していることがうかがえる。両方に共通する点として、授業計画の理解に問題があり、その理解には教員の説明不足が考えられる。

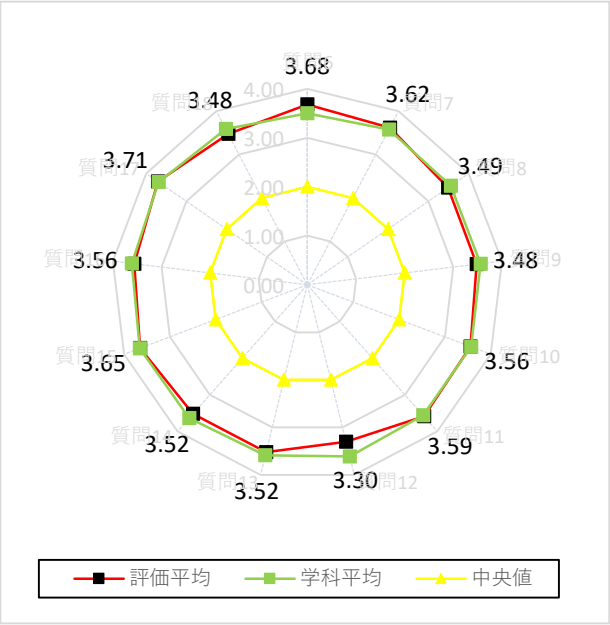
（３）次年度に向けての取り組み

初回のオリエンテーションにおいて、シラバス内容に沿って、授業をどのように展開していき、学生への取り組みの期待についても説明していく。
また15回の講義の中で、モチベーションを維持するためにも、途中でシラバスに沿って、進捗状況の確認と、学生自身の取り組み方を振り返る声かけなどを行っていく。
単に口頭指示をするだけではなく、スライドや配布資料などの視覚情報も保障していくようにより意識して取り組む。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		社会	69名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

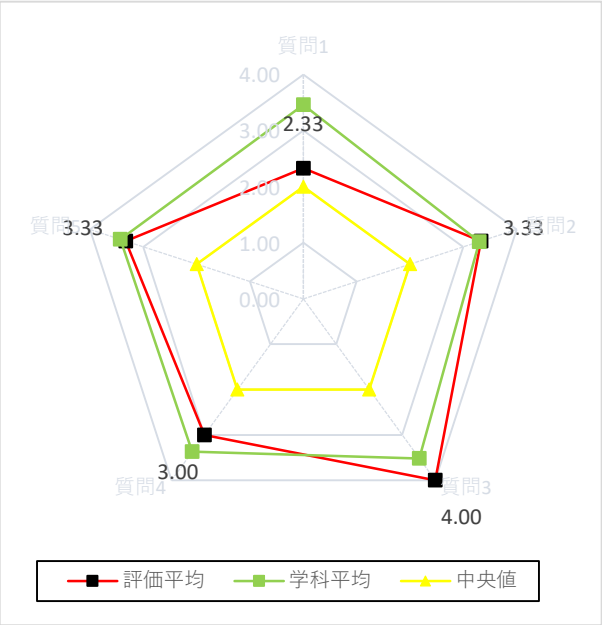
質問1「授業は何回欠席しましたか」は，学科平均（3.36）を下回っていた（3.16）。
質問６「シラバス（授業計画）について説明がありましたか」は，学科平均（3.46）を上回っていた（3.68）。
質問12「声の大きさ・明瞭さ・話す速さは適切でしたか」は，学科平均（3.53）を下回っていた（3.3）。
他は，ほぼ学科平均と同様であった。
自由記述では，「佐賀や他の地域の歴史や土地の特徴について学びとても勉強になった」，「小学校で習う社会がどんなものか振り返ることができた」，「小学校の社会科についていろんなことを学べて良かったです」，「分かりやすかったです！」という肯定的な評価の他，「小テスト等を返す際に、模範解答を提示してほしいです。人によって採点基準が異なるように感じます。なぜ間違いなのか、正解は何だったのかが明確に分かるようにしていただきたいです。」という批判的な評価も一部見られた。授業時に模範解答は示しているのであるが，採点基準を示すなど，次年度は改善を図りたい。

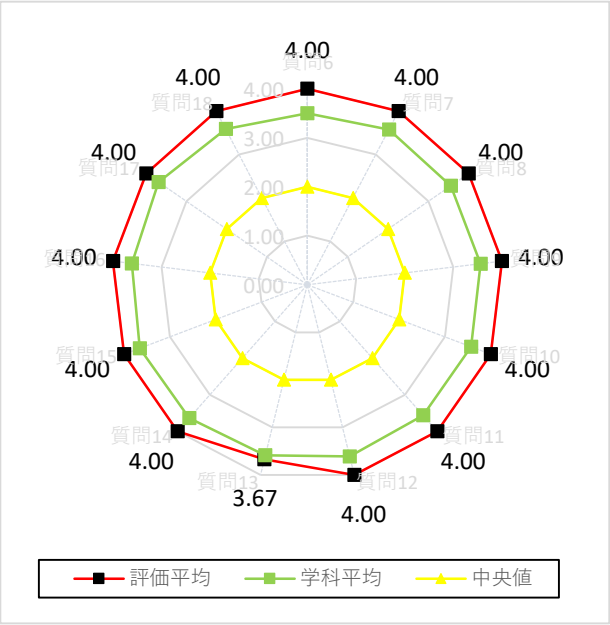
（３）次年度に向けての取り組み

学科平均を下回った項目については，改善を図っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども家庭支援の心理学	3名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

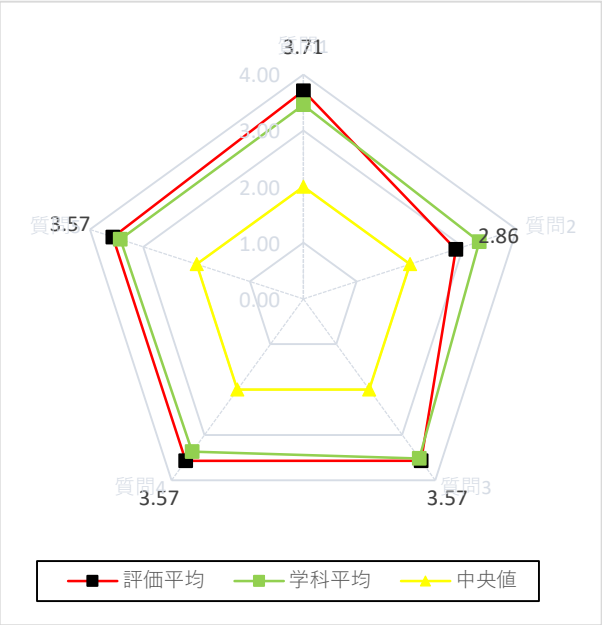
今回の授業は小学校教育実習の時期が変更になったことにより、予定の３年生が受講しなかった。再履修者のみ、３名の受講となった。いずれの項目も高い評価であった。少人数授業での展開であり、当然の評価と思われる。また、学生自身の取り組みもしっかりしており、学生の自己評価通りである。

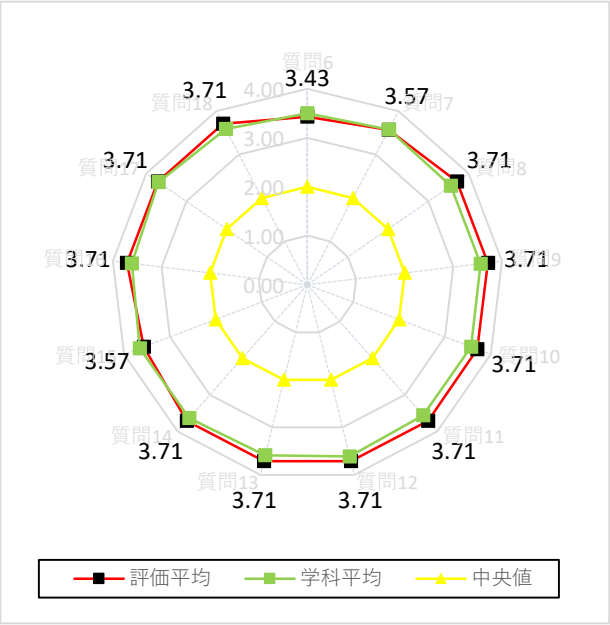
（３）次年度に向けての取り組み

今回は特別の状況での授業となった。次年度の参考としない。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		芸術療法Ⅰ（基礎理論と箱庭療法・コラージュ療法）	45名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

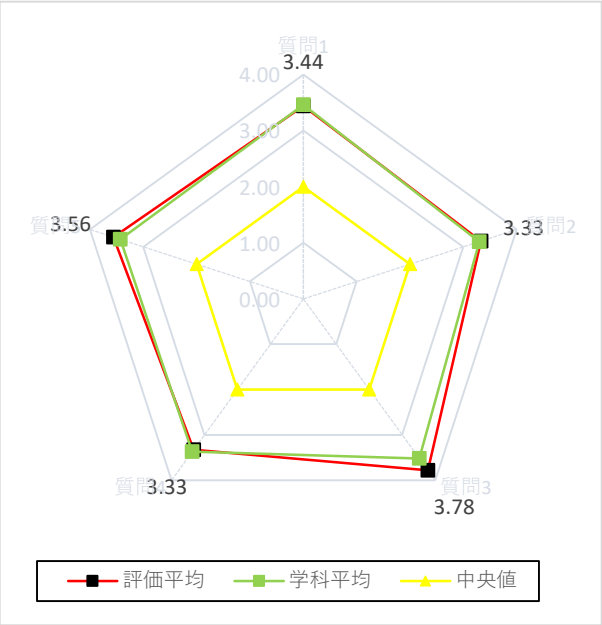
学科平均と比較しても高い評価を得ている。
授業に対する関心度の高さが伺える。
シラバスの説明はしているが十分ではなく次年度の取り組みが必要である。

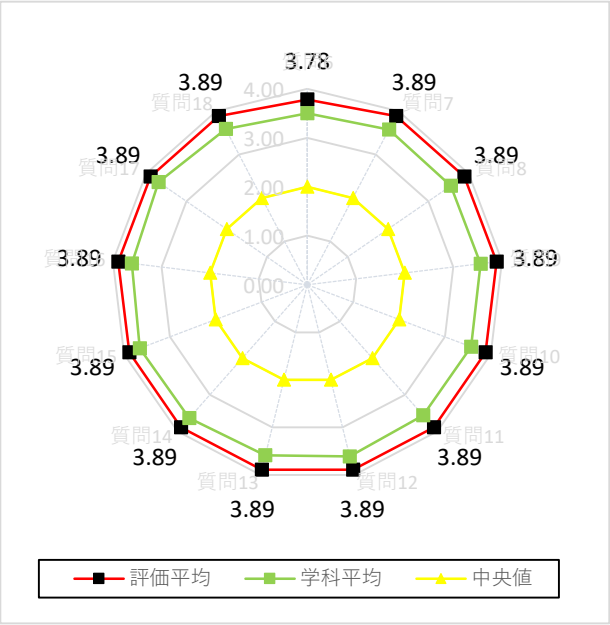
（３）次年度に向けての取り組み

この授業は学生の関心も高く出席率もよい。
また、後期の授業とも連動しているため、後期の授業にも入りやすい。
学生自身この授業を通して自己理解が深まっていることをレポート等にも書いている。
次年度は、シラバスを十分に説明し、芸術療法に関心が持てるよう授業を展開したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		芸術療法Ⅱ（心理劇の理論と実際）	41名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

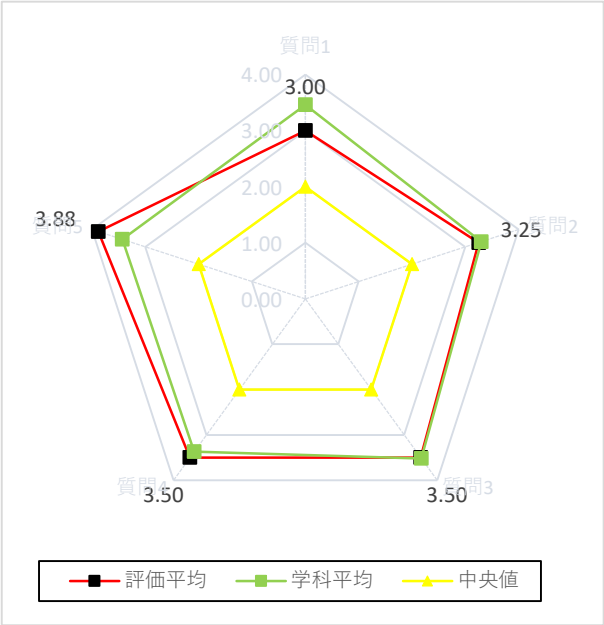
回答者数が少ないため全体的な評価にならないが、回答してくれた人の範囲では大変学びと満足度の高い授業であったと言える。受講者集団の様子を見て、一部内容を改めたりしながら受講生間のコミュニケーションと自己理解をもとに授業のねらいを満たすスタイルが支持されたと言える。

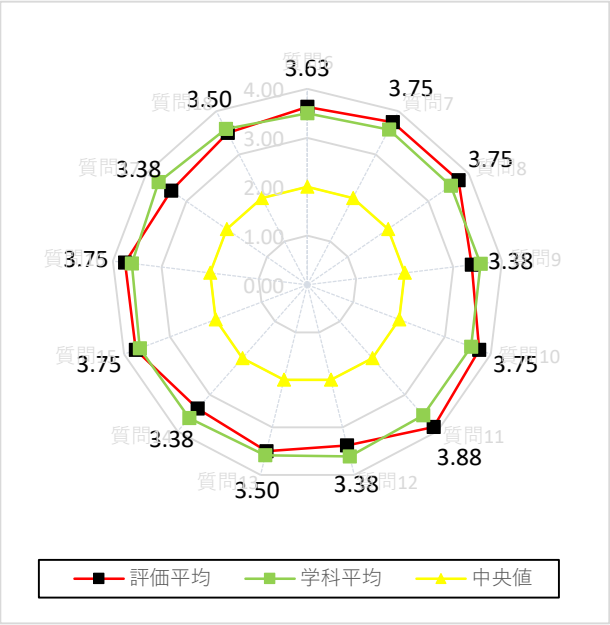
（３）次年度に向けての取り組み

回答者数を増やすための方策をとるとともに、メンバーが変われば集団の様子も変わるので、即応しながら授業のねらいを満たすよう取り組みたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子どもの保健	40名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

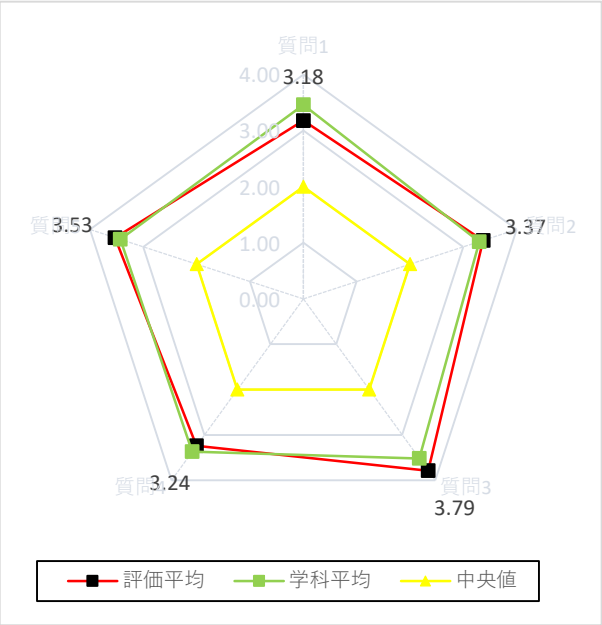
学科平均に満たない項目として
質問９分かりやすい工夫がされていましたか。　学科平均3,49　田中3,38
　　PPT資料の改善工夫が必要
質問12声の大きさ・明瞭さ・話す速度は適切でしたか。　学科平均3,53　田中3.38
　　はっきりとわかりやすく速度を落として授業を進めていくようにする
質問14学生の質問等に誠実に対応しましたか。　学科平均3.59　田中3.38
　　学生が質問しやすい雰囲気・声かけや配慮が不足していた。質問には誠実に答えてなかった。
質問17先生は熱心に授業に取り組んでいましたか。　学科平均3.64　田中3.38
　　熱心さが学生には伝わっていない。または熱心さが足りない。

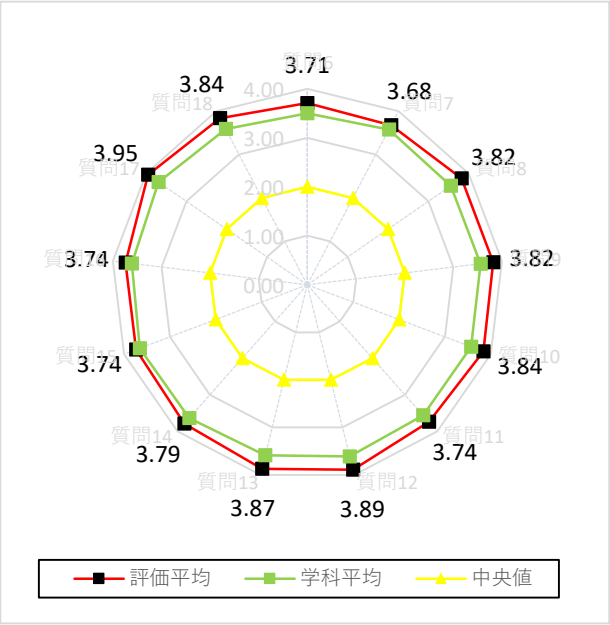
（３）次年度に向けての取り組み

PPTの資料の見直しを行い、わかりやすく作り直す。
はっきりと聞き取りやすい口調で話す。早口にならないように気をつける。
質問しやすい雰囲気作りや声掛けを行う。
質問にその場で答えられない時は次回授業の時までに調べておく。
もっと意欲的に熱心に授業に取り組む。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		芸術療法Ⅲ（芸術療法の実際）	41名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

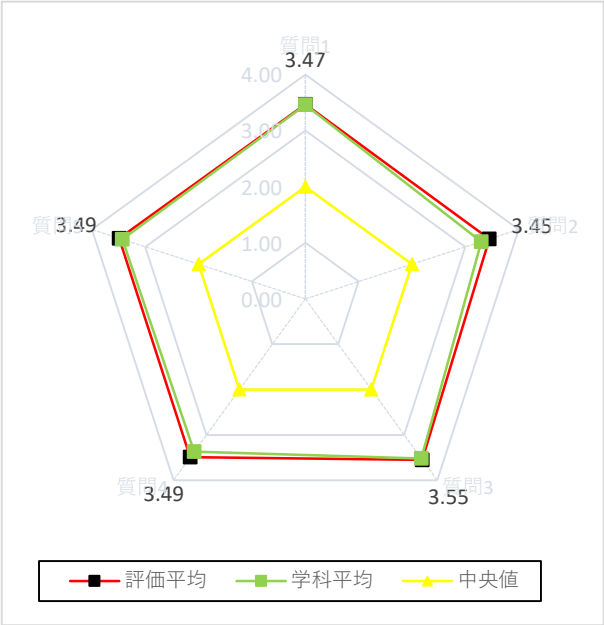
　ほとんどの項目で学科平均を上回っており、学生の関心度の高さがうかがえる。
居眠りや私語等はなく熱心に受講していた。
この授業は、学生の内省化を促すことを大きな目標にしており、授業を通して自分を振り返りながら自己理解を深めているものと思われる。

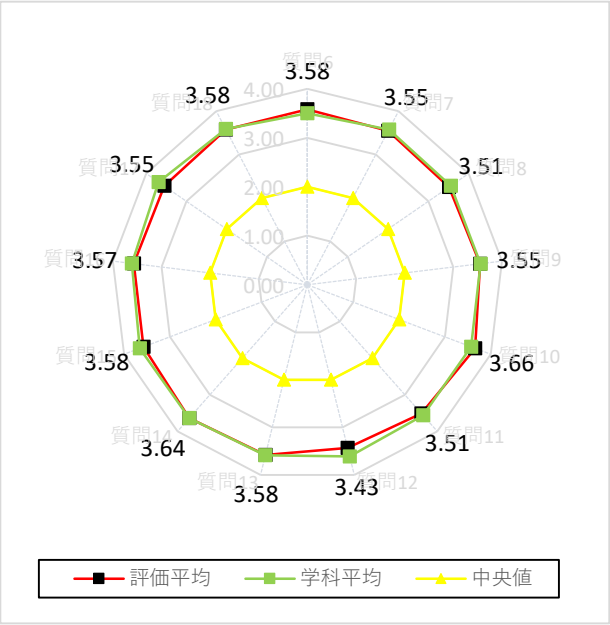
（３）次年度に向けての取り組み

　学生の関心度の高さもあり、継続して授業が展開できればと思う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		生活	82名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

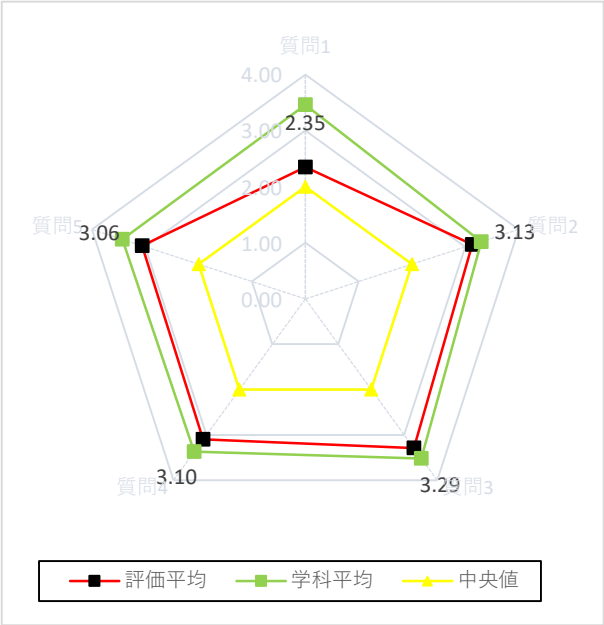
全ての項目が，学科平均と同様か，少し上回る成績であった。
本科目は，１年前期の科目であり，「幼小連携」を内容とするので，１年生全員に履修して頂きたい科目である。
この科目は，オムニバスであるが，R4，R5のアンケート対象に入っていない。申告漏れかもしれない。

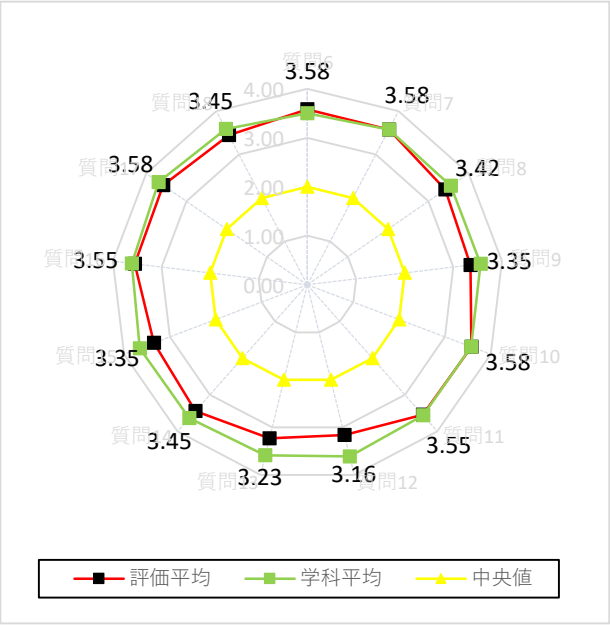
（３）次年度に向けての取り組み

時間割の変更により，「月曜１限目」となってしまい，２限目以降が「空きコマ」となっている関係で，R6は，履修者の激減が予想される。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		感情・人格心理学	47名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

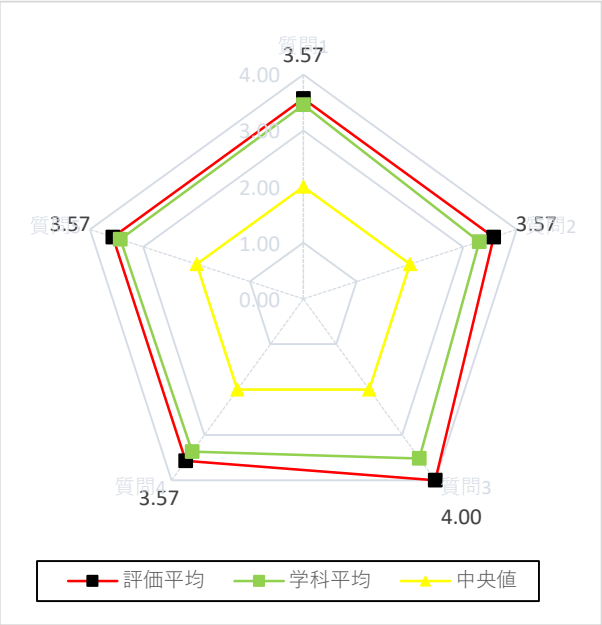
授業評価回答率は66%であり、回答数を増やすことが課題である。
授業では、重要な点を穴埋め式にした資料を事前配付し、講義では重要点の解説を行うことで授業に集中できる工夫を行った。各回授業後のミニレポートで感想や疑問の提出を求め、疑問点については翌回以降に回答することで、学生が疑問を持ち越さないよう留意した。更に授業外課題でも理解度把握を行った。
授業内の解説等の時間配分の関係で、感想等を書く時間が少ないということが自由記述に挙げられており、質問12・13の点数が学科平均を下回ったことに反映されていると思われる。また、感想への教員によるフィードバックについて、時間の関係で一部が翌週でなく少し時間をおいてのフィードバックとなったことが質問14・15の点数が学科平均を下回ったことにつながっていると考えられる。
一方で、自由記述には授業の進め方や授業内外の対応の丁寧さに対しての肯定的意見も記載されていることから、今後も授業内容や課題に対する解説を細やかに行い、また質問等への誠実な対応を行うことで学生が理解を深められるような授業を進めていきたい。

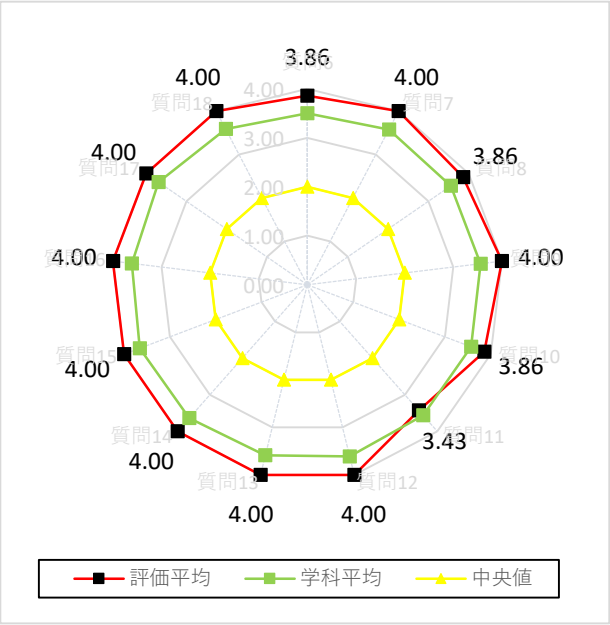
（３）次年度に向けての取り組み

次年度は、カリキュラム編成の関係上本科目の担当からは外れることになったが、他の担当教科においても時間配分に十分留意しながら授業を進行していくとともに、各回の感想・疑問を求める形式を踏襲し、授業内で生じた疑問等に適切に対応したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		暮らしに潜む罠	19名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

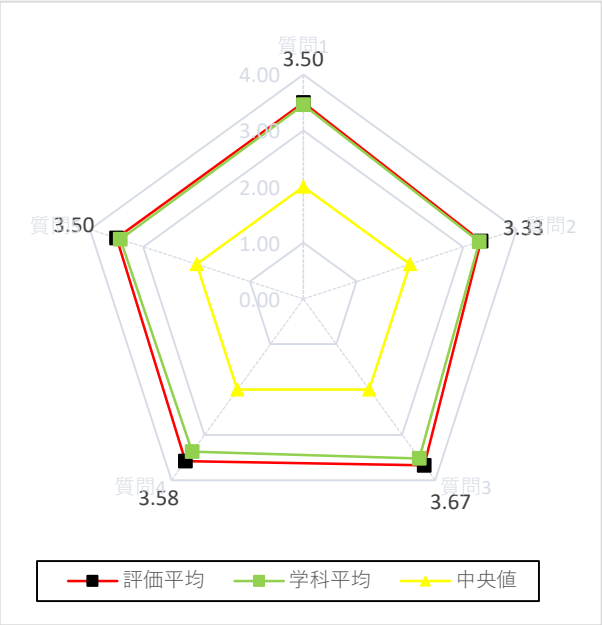
質問11を除いた他の項目すべて、平均を上回っている。

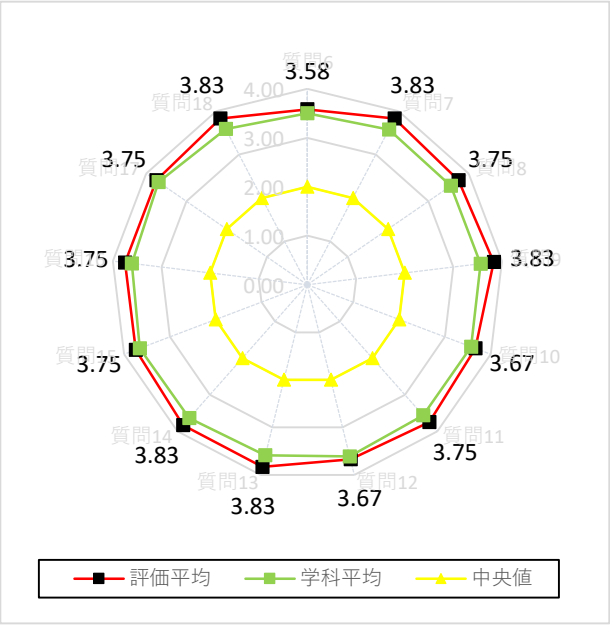
（３）次年度に向けての取り組み

質問11に関しては、内容について精査し、学生が取り組む課題との整合性を高めるように検討する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		臨床動作法の理論と実践	24名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

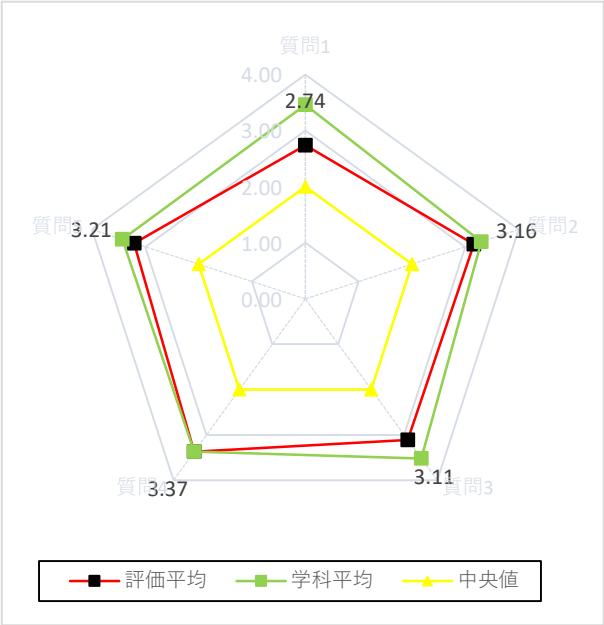
全項目において、学科平均もしくはそれ以上の得点であった。

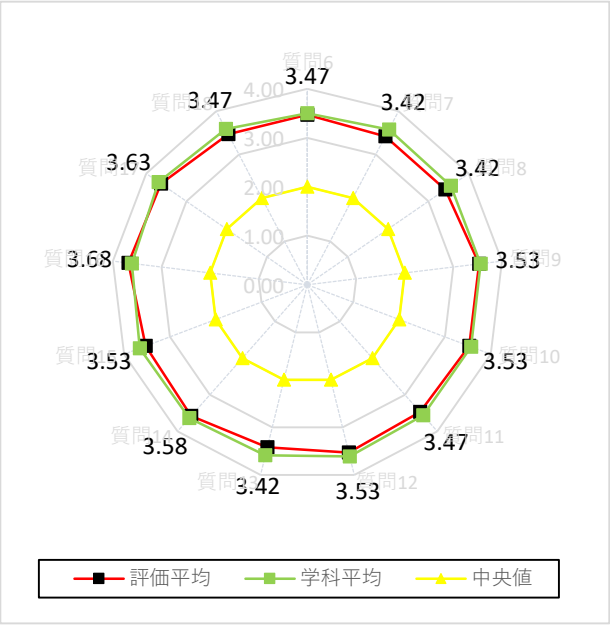
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も、今年度と同様取り組んでいく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		乳児保育Ⅰ	32名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

近年の保育所等における3歳未満児の子どもの就園率が高くなり、それに伴って乳児保育の重要性が指摘されている。令和3年度から「乳児保育」が「乳児保育Ⅰ」「乳児保育Ⅱ」に分けられ、Ⅰは主に概論、Ⅱは実践の形式で行われた。Ⅱについては保育現場経験が豊富な教員が担当し、Ⅰの概論について担当した。

コロナ禍も明け、対面形式で行った。テキストを用いながら、配布資料等も適切に準備し、状況に応じて視聴覚教材も使用しながら進めた。

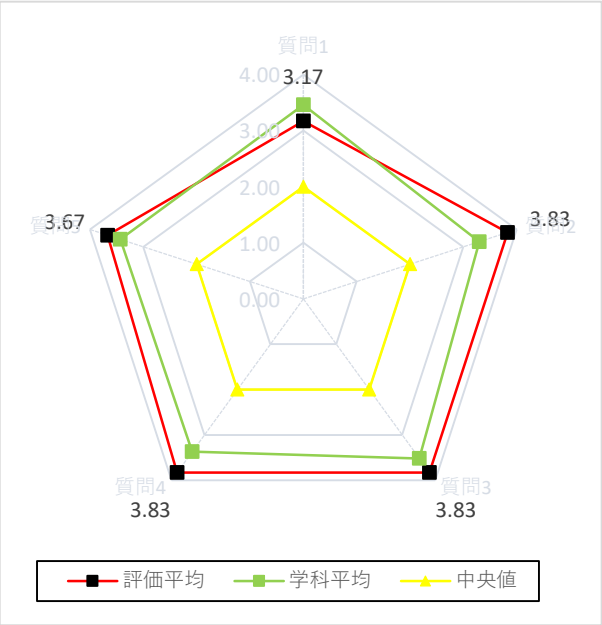
学生からの授業評価についてはすべての質問項目について一定以上の評価を得ている。

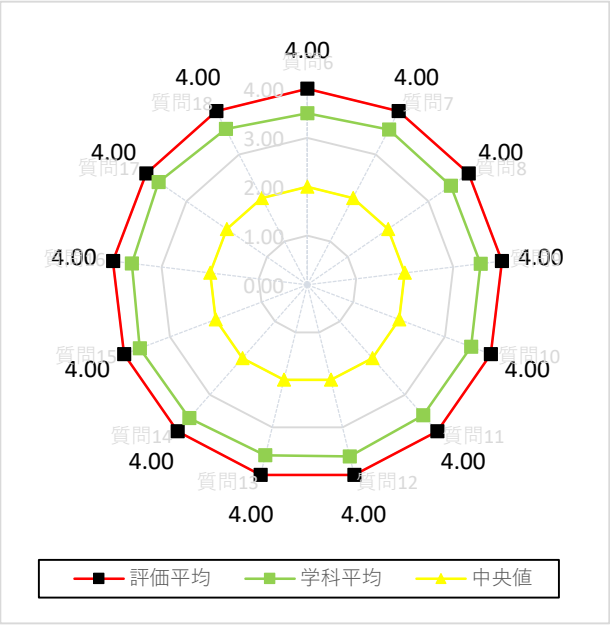
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も保育現場における「乳児保育」の重要性に鑑み、保育現場経験が非常に豊富な教員による「乳児保育Ⅱ」とできるだけ情報を共有しながら進めていくことによって、学生が保育現場の実習等で乳児についてしっかりと学んだ状態で臨めるような深い学びを促したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		キャリアアップ講座Ⅰ	8名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

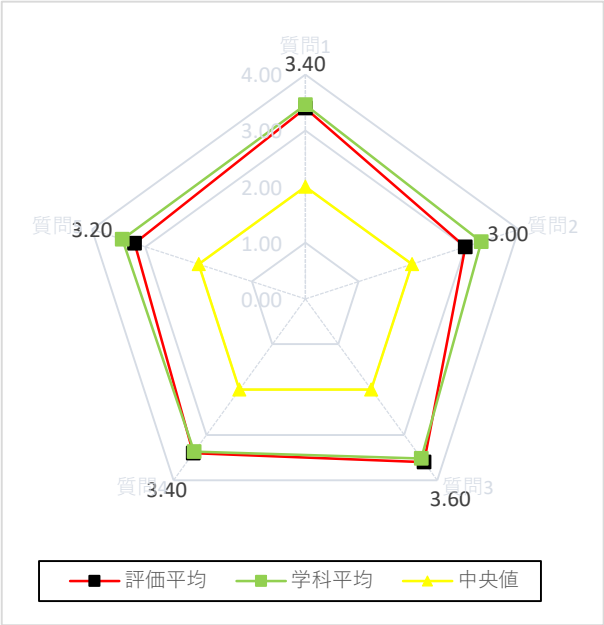
全項目において、学科平均を上回る得点であった。
・授業独自の教科書作成・配布
・毎回の授業で、学生と対話しながらの進め方を全教員が実施
・シラバスだけでなく、授業スケジュールも配布し、授業の進捗について学生が把握しやすいように工夫した
などが功を奏したと考えられる。

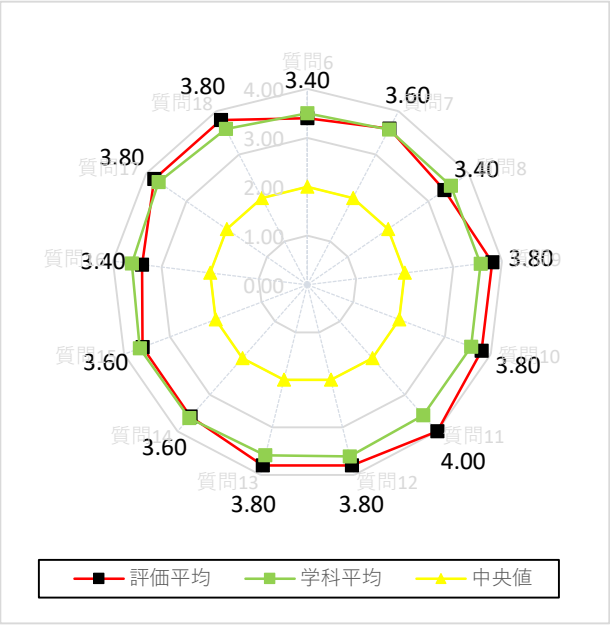
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も同様に取り組む。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子どもの健康と安全	34名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

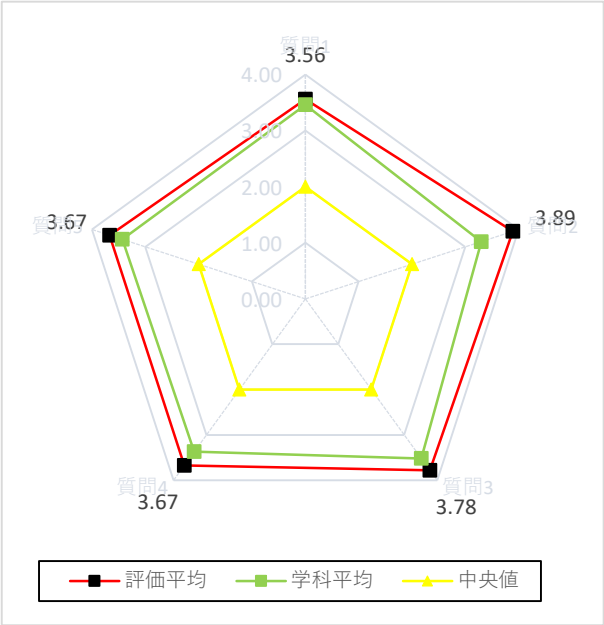
学科平均に足りてない主な項目として
質問２　シラバスの活用、質問５　学生の総合自己評価、質問８　授業の興味・関心の工夫、質問16　授業での双方向なやりとり等がある。
質問２シラバスに関しては十分に説明を行っていなかったので次回からは行うようにする。
質問５保育士にとってこの科目の持つ意義や必要性について理解を深め、興味が持てるような工夫が必要。
質問８授業の興味・関心が持てる工夫が足りない。学生のモチベーションを保つにはどんな工夫をしたらいいのか考える。
質問16どうしてもPPT資料の説明が中心になってしまう。もっと学生の意見や考え質問等を受けて双方向のやりとりで授業を進めていくようにする。
質問9～14の授業の中身の工夫や視聴覚機器の活用、配布資料、声の大きさや進む速さ、教員の意欲等は3,8以上。今後もこの評価が低下しないようにする。

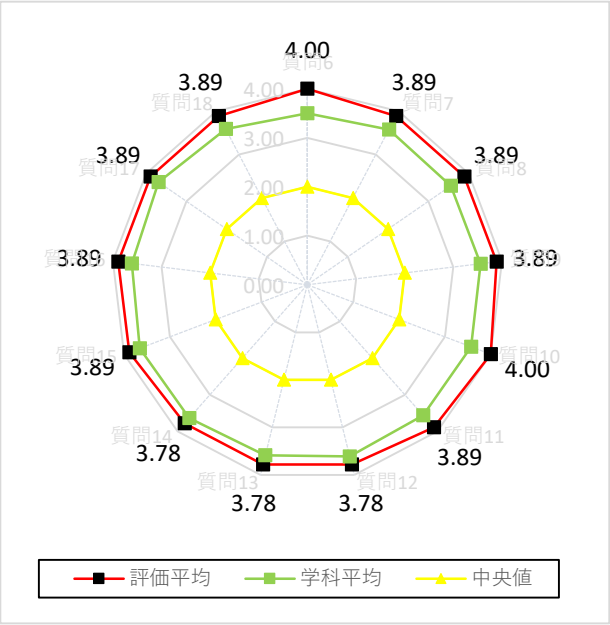
（３）次年度に向けての取り組み

シラバスの活用　⇒　授業の最初にシラバスと照らし合わせて・テキスト・配布資料について説明を行い進めていく
授業の最後に次回の内容についてシラバスに基づいて説明する。
授業の最初に前回の授業の振り返りを5～10分程度行い理解度の確認と質問を受ける。
子どもの健康や安全に関するニュースや事例についてグループワークや意見交換を行う。
子どもの演習用の人形を使って救急処置や救急蘇生の演習を行い専門的知識や技術の必要性を理解する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		キャリアアップ講座Ⅱ	11名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

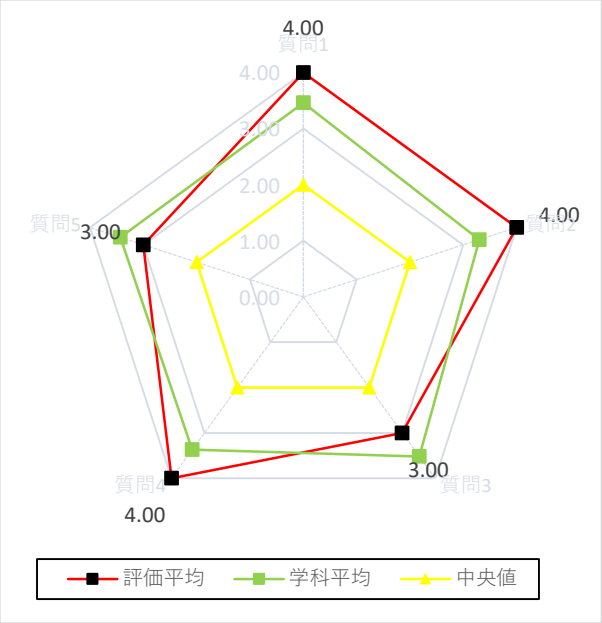
全項目が学科平均よりも上回った得点であった。
・学生との対話を両教員が毎回行って授業を進める。
・グループで考える時間を毎回取り入れる。
・アセスメントテストを授業の初回と最終回に実施し、自己成長を図るための工夫を行った
・シラバスだけでなく、授業スケジュールを配布
などの工夫が功を奏したと考えらえる。

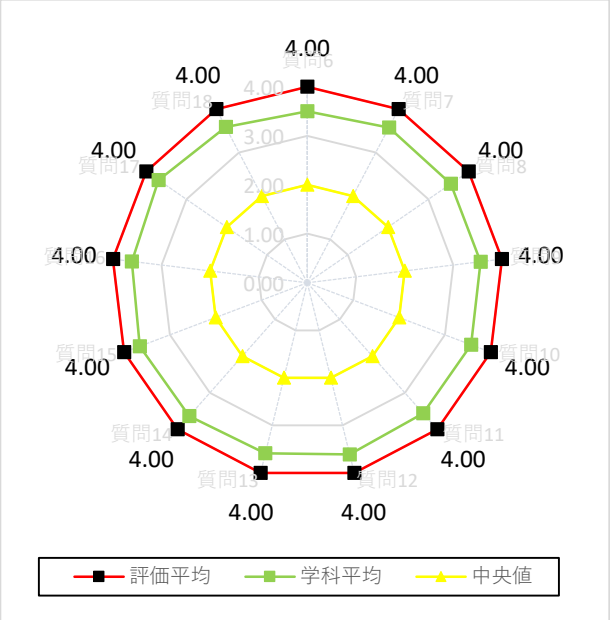
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も同様に取り組んでいく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理実習	34名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

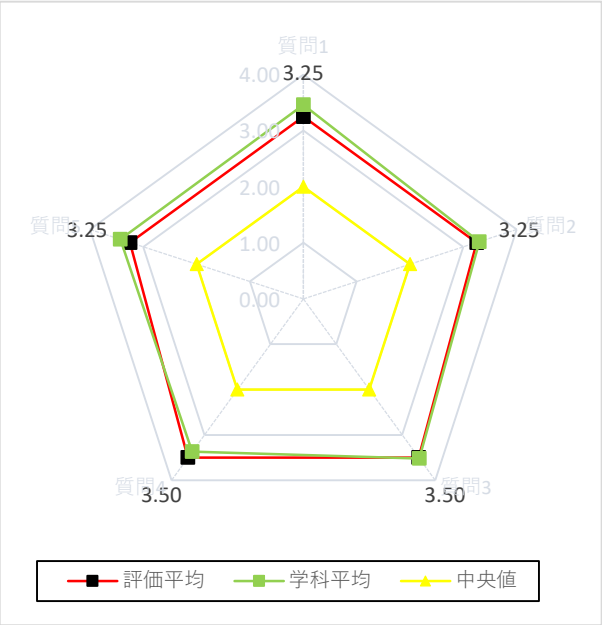
質問３，５以外の項目はすべて学科平均を大きく上回るものであった。
質問３，５は、学生の自己評価が過剰に低かった（教員はそこまで低いと評価していない）ことがあげられる。

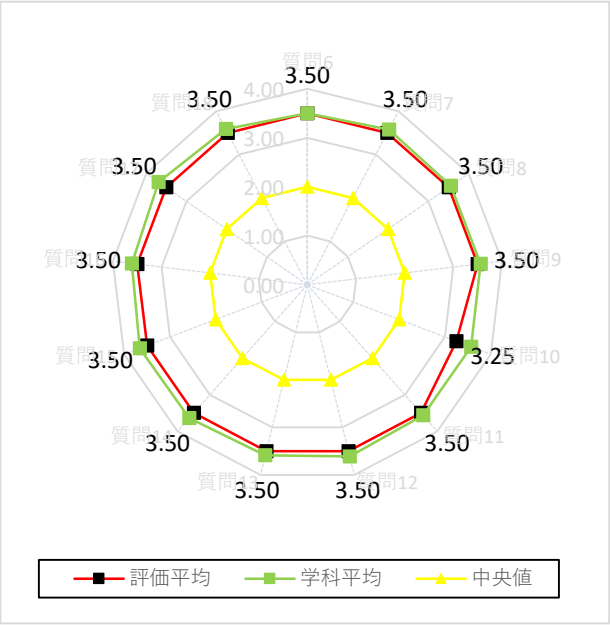
（３）次年度に向けての取り組み

学生に
・実習の到達目標
・自己評価チェックシートを用いて、実習終了ごとに学生自身に評価をさせる
・評価が著しく低くつける学生に対しては、教員が個別面談を行い、達成目標の共有を図る。
以上3点を、全教員で取り組む。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミナールⅠ	8名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

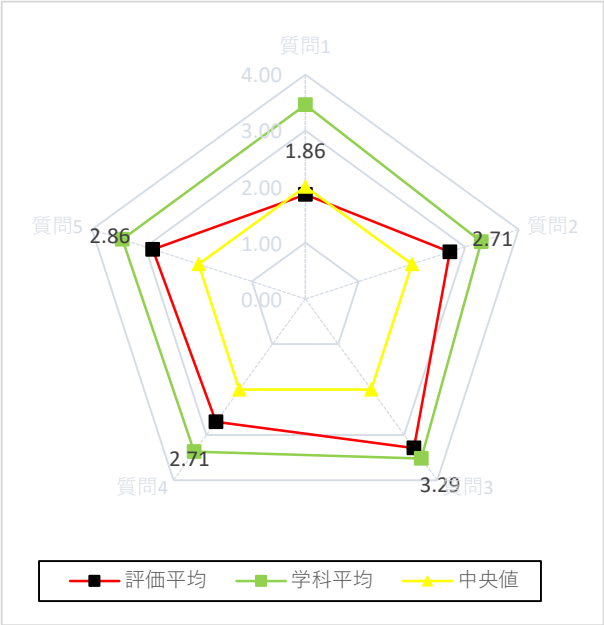
質問１～５に関しては学科平均と同等であった。
質問６～１８に関しては、平均よりやや低い結果であった。
この結果として、パワーポイントで授業内容を示すことが少なかったことと、授業の中で学生への個別的声かけが少なかったことが考えられる。

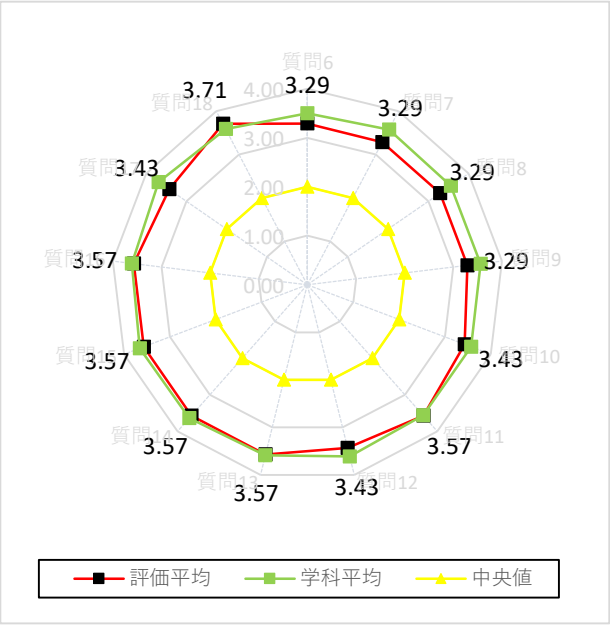
（３）次年度に向けての取り組み

次年度は、
・毎回の授業の中で、パワーポイントを用いて「今日の授業目標」「まとめ」などを行う
・机間巡視など学生への目配りを増やす
ことに取り組む。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理学文献講読Ⅰ	20名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

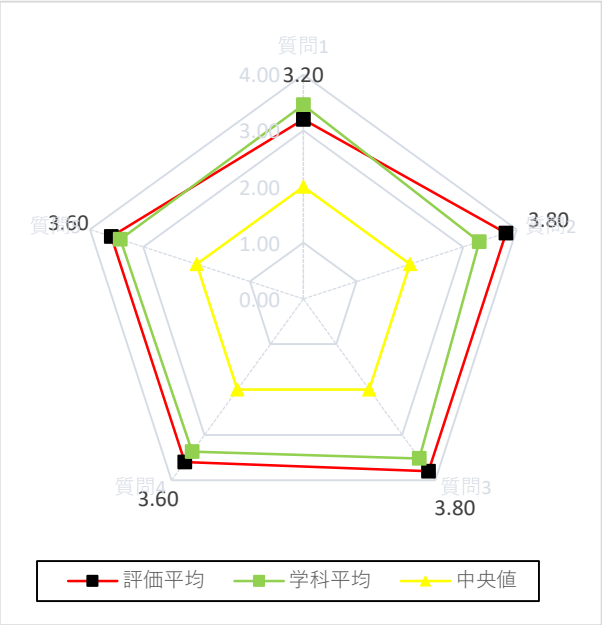
英文の文献を読んでいたこと、４年生は就職試験などで欠席が多かったようです。講義は大学院受験用の英文献講読であったので、それほど興味をそそるものではなかったと思います。

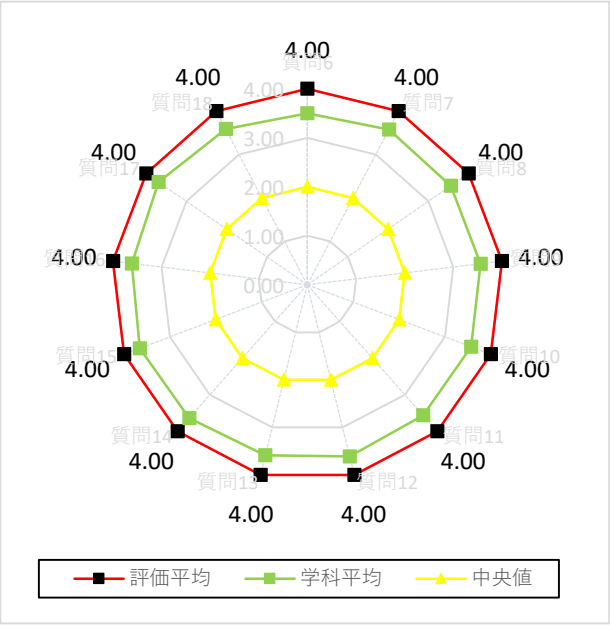
（３）次年度に向けての取り組み

ホームワークについて説明したいと思います。講義は、ときどき他の文献も入れたいと思います。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミナールⅠ	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

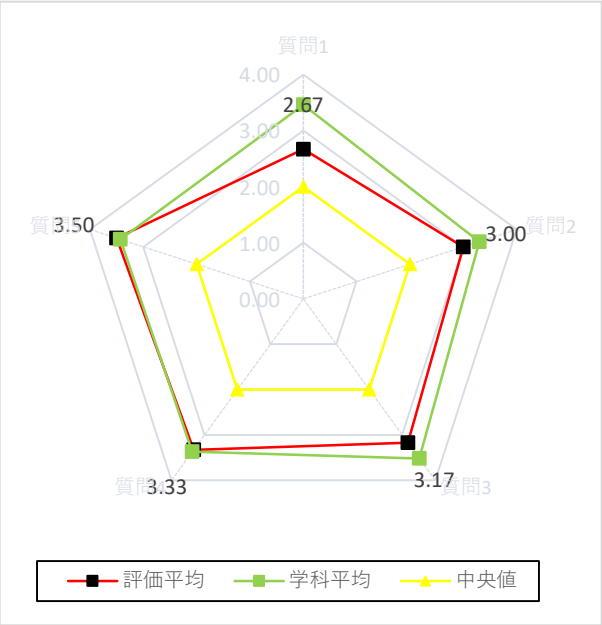
欠席以外は、学科全体より高い評価となっている。
２年次おいては、学修への意欲低下がみられる学生も数名いた影響だと考えられる。
多くの学生は、意欲的に取り組んんだ結果だと思われれるが、意欲低下が見られる学生への丁寧な対応が必要だと考えられる。

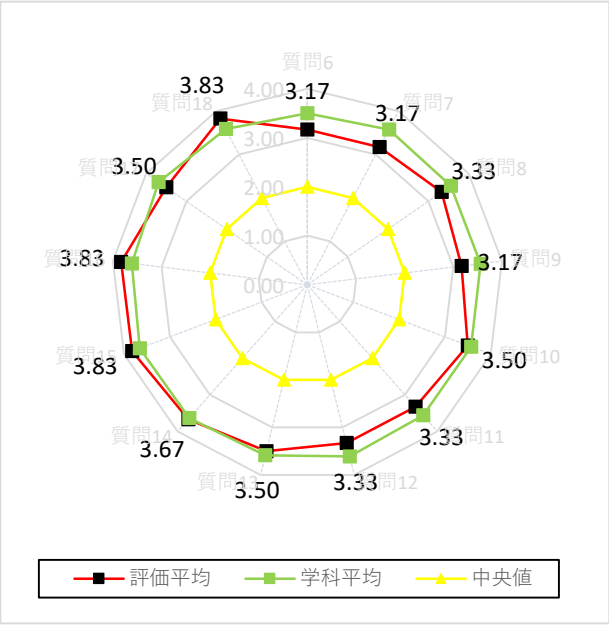
（３）次年度に向けての取り組み

全体的な資質の向上も合わせ持ちながら、学生一人ひとりに合った個別的な視点を持った関わりがゼミでは必要だと思われる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミナールⅠ	8名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

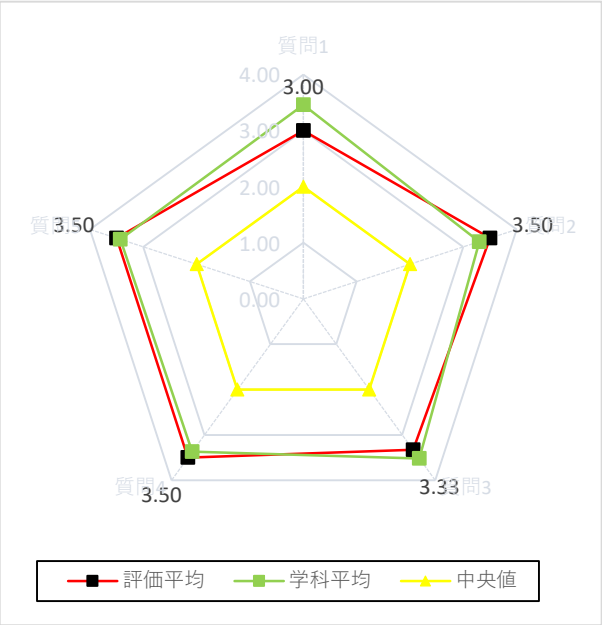
受講生全般に欠席が目立ち、また全般的に疲れが見える様子であった。その様子に個々に対応しながら、学修支援に取り組んでいったことは高く評価された。しかし、シラバスや授業目標の表示についてそれほど明確に意識されるものでなかったことが分かる。

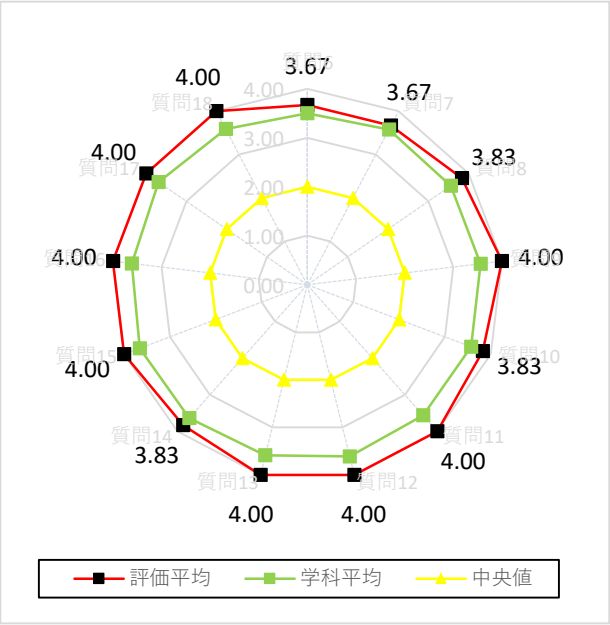
（３）次年度に向けての取り組み

次年度は担当者が変わるので、直接自分にできることはないが、シラバスや授業目標の表示については、教員側にも説明の比重が低くなってしまったことが考えられるので、担当者に改善を図ってもらうよう伝えたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミナールⅠ	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

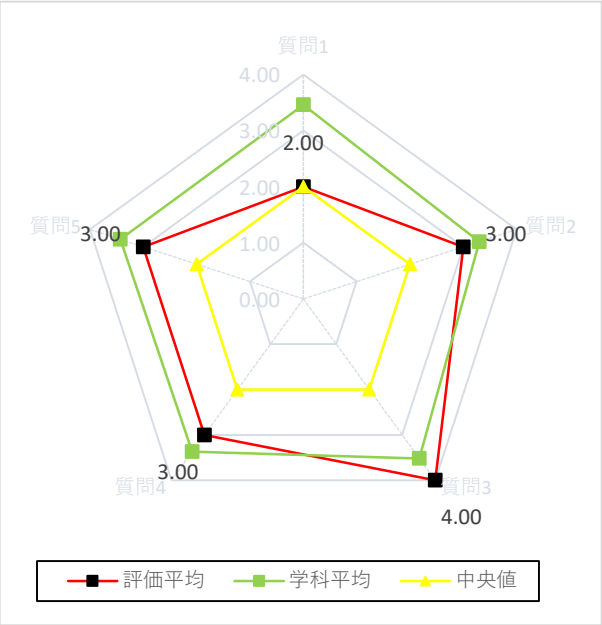
学生によって個別性があった。特に前期は、学生が生活に慣れていないところなどがあった。授業については、よく理解していたと思う。

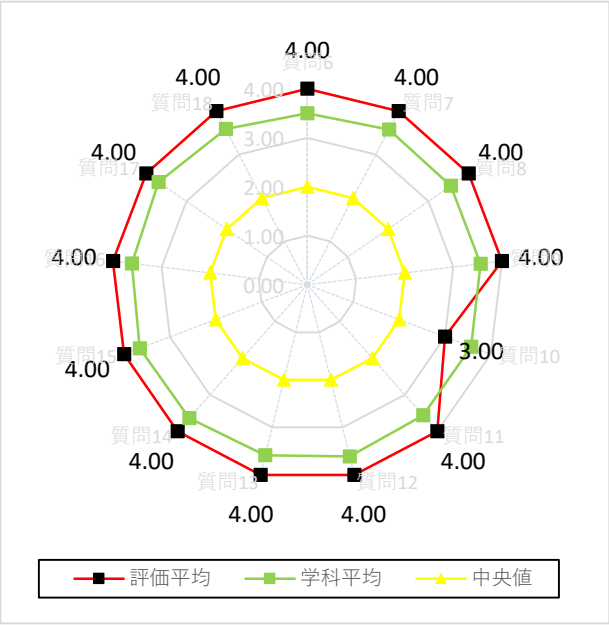
（３）次年度に向けての取り組み

次年度は担当しないが、この学生が３年になるので、しっかり対応したいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	6名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

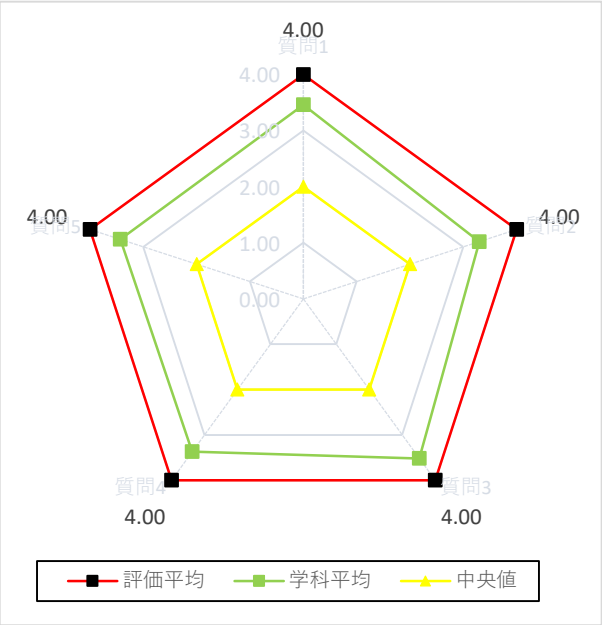
評価平均は、視聴覚機材・板書の工夫以外は学科平均を上回り、評価項目間には数値のばらつきが少なく、評価結果はバランスの良いものであったと考える。

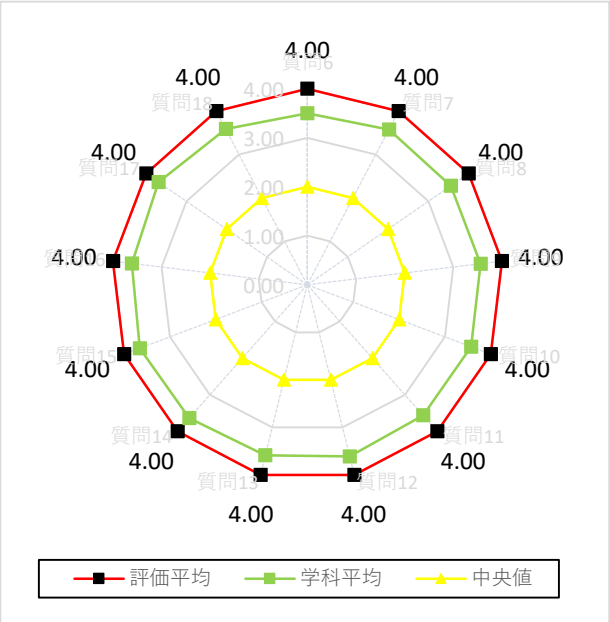
（３）次年度に向けての取り組み

ゼミナール科目の特性上、意見交換・ディスカッションの場面が多くなるため、視聴覚機材の活用・板書については行わないことも多くなる。
授業中の教材等の提示方法については、必要に応じて工夫を施し、引き続き授業の充実に努めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		卒業研究	10名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

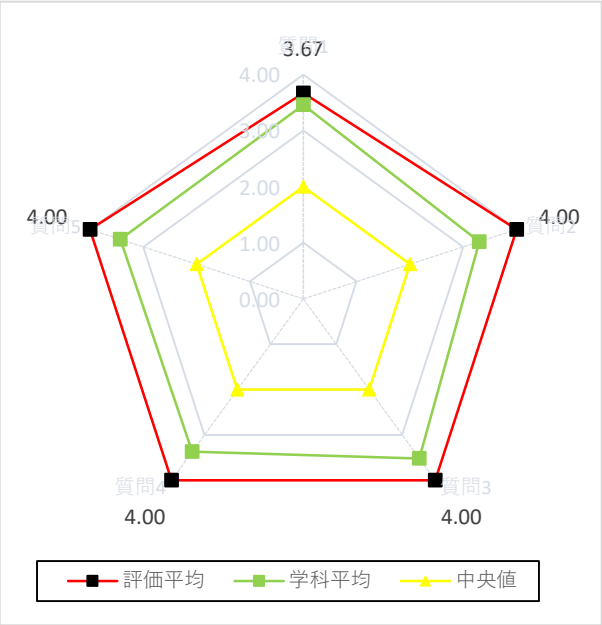
　すべての項目で学科平均を上回っており、学生が熱心に取り組んでいたと思われる。
全体も含めて個別指導を重視しているため、より細かく指導ができていると思われる。

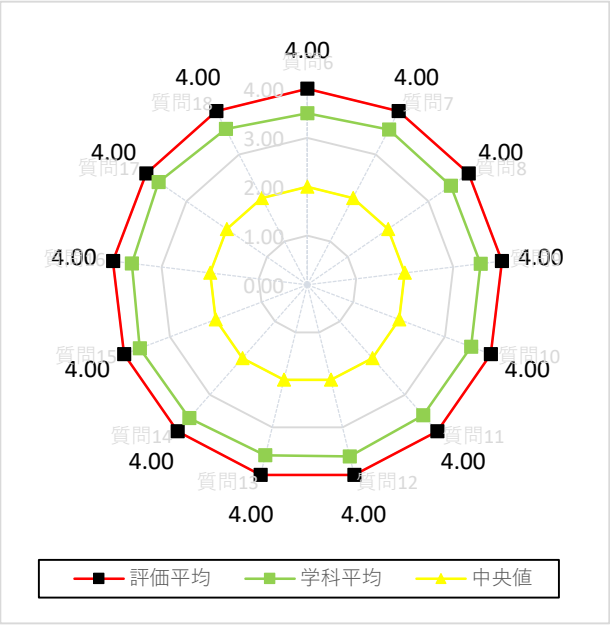
（３）次年度に向けての取り組み

　卒業研究は、学生生活の集大成であるため、力を入れ指導を行っている。
学生自身がテーマを決め論文を書く作業を行っているが、調査など時間がかかるが丁寧に指導をしながら論文作成を行っている。
今後も継続して丁寧な指導を行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミナールⅡ	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

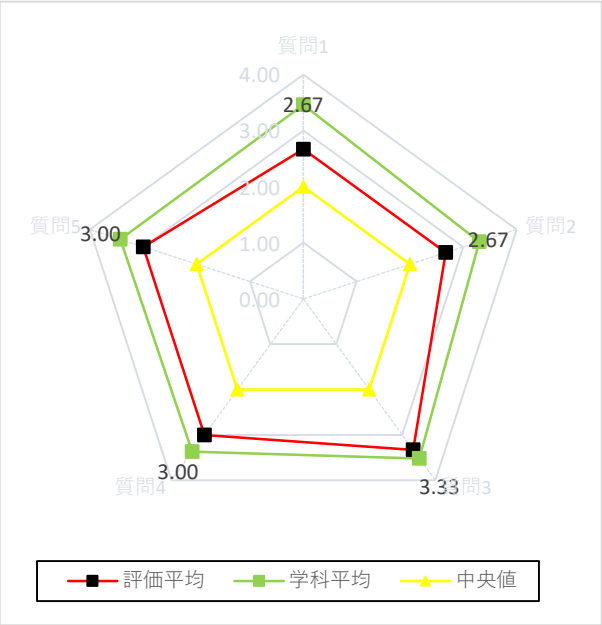
全てにおいて、学科平均より高い数値となている。
前期において、個別的な関わりを含めて、ゼミ生と信頼関係が形成された結果だと思われる。

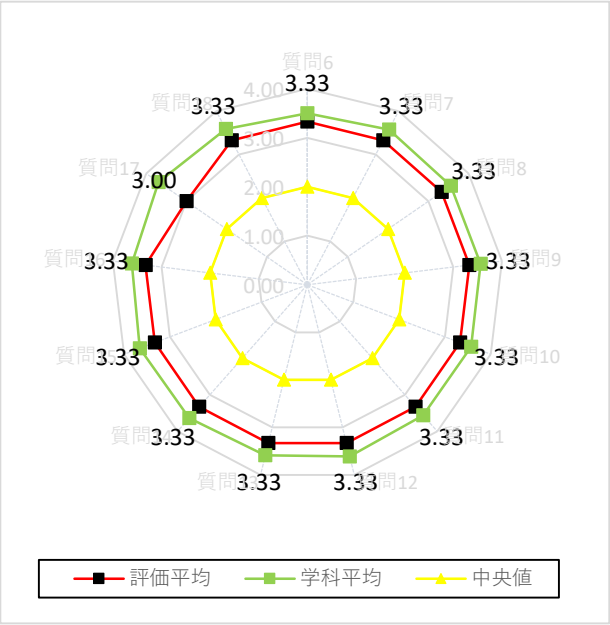
（３）次年度に向けての取り組み

２年次では、将来への展望が揺れる時期であり、セルフマネジメントを通して、キャリア形成のフォローを継続的に行う必要があると思われる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミナールⅡ	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

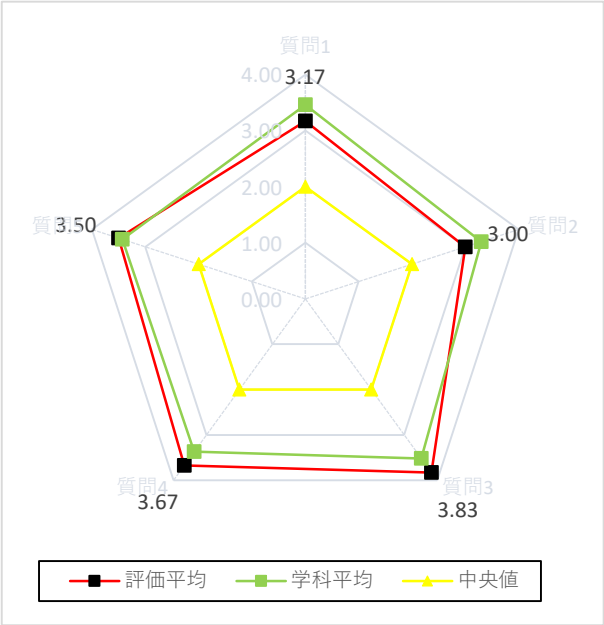
後期は、個別に対応することが多かった。授業については、やや低くなっている。４年生の卒論、院生の修論などで時間をとられていたことがあり、２年生への授業の時間は個別になっていたので、評価が低くなっているのではないかと思う。

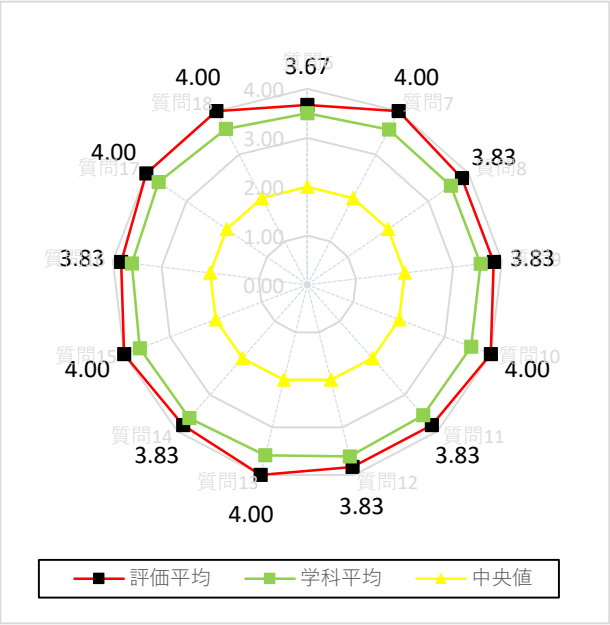
（３）次年度に向けての取り組み

次年度はセルフマネジメントゼミナールは担当しないが、３年生で担当するので、しっかり授業を行いたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

「子ども学」領域において、各分野・学問に応じた教育研究や学術研究等を遂行し、その結果を提出・報告することが求められている。本ゼミにおいては「子どもの環境と文化」に視点を置き、さまざまな角度からアプローチして疑問に思ったこと、もっと知りたいと思ったことなど、身近な内容で興味や関心をもった研究テーマを各自選択し、深めている。

集大成である「卒業論文」作成については、昨年度と異なり、本年度はコロナ禍も明け、対面授業で行うことができた。しかしながらコロナ禍で身に着けたオンライン授業もうまく取り入れながら進めることもできた。ただ、例年はアンケート調査を夏休み前に行い余裕をもって分析・考察することができたが、昨年同様に積極的に進めるのが難しかった。その結果、7名の学生の取り組みの姿勢や進度に大きな個人差が見られた。結果としては何とか論文を完成し、発表まで行うことができたことは学生の努力によるものであった。

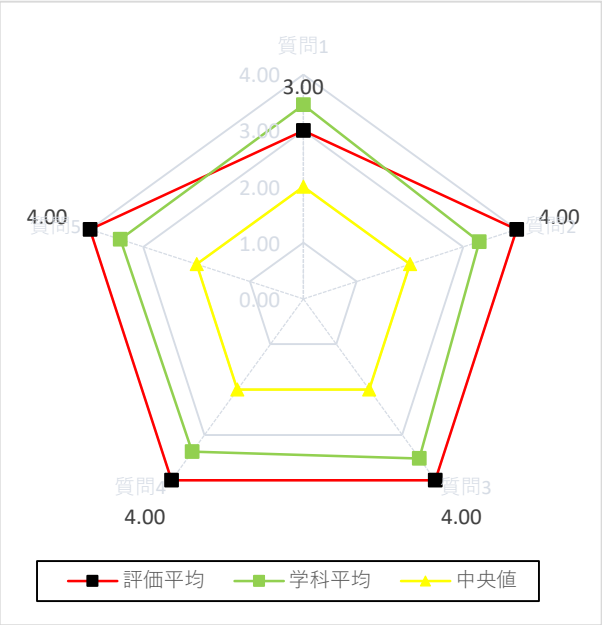
授業評価については、すべての項目について非常に高い評価を得ている。

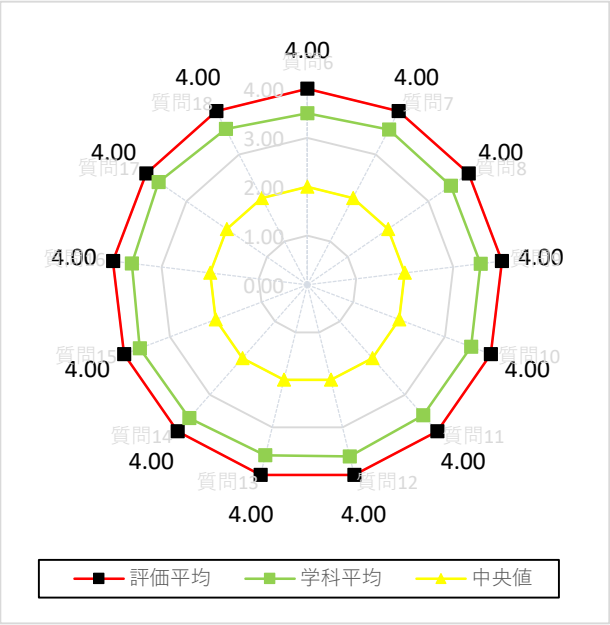
（３）次年度に向けての取り組み

令和6年度は、今年度の反省点も踏まえて、可能な限り対面授業しかも個別指導を中心に、オンライン授業も取り入れ工夫しながら行えるよう臨機応変な対応をしたい。3年生の段階からすでに仮のテーマを設定し、先行研究についてもある程度深め、ゼミ全体で中間的な発表も行っている。今後は、学生が自らの「卒業論文」に対して主体的に取り組み、無理のないスケジュールで完成に至ることができるようしっかりとしたサポートをしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		卒業研究	8名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

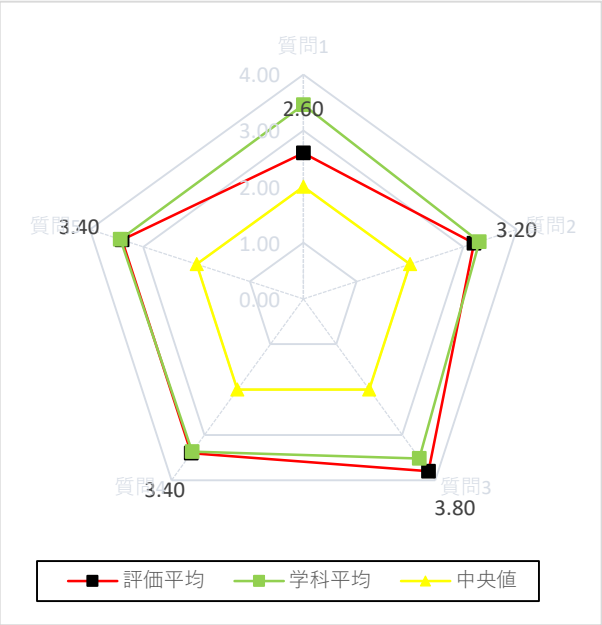
講義としては、全体的に高い評価を得ている。ひとまずは、高い評価として継続して実施していきたい。しかしながら、質問1授業は何回欠席しましたか。の項目のみ、低い結果となっている。就職活動等の影響により、出席回数が影響した可能性が考えられ、進路を検討しなければいけない多忙な時期であったことが要因であろう。

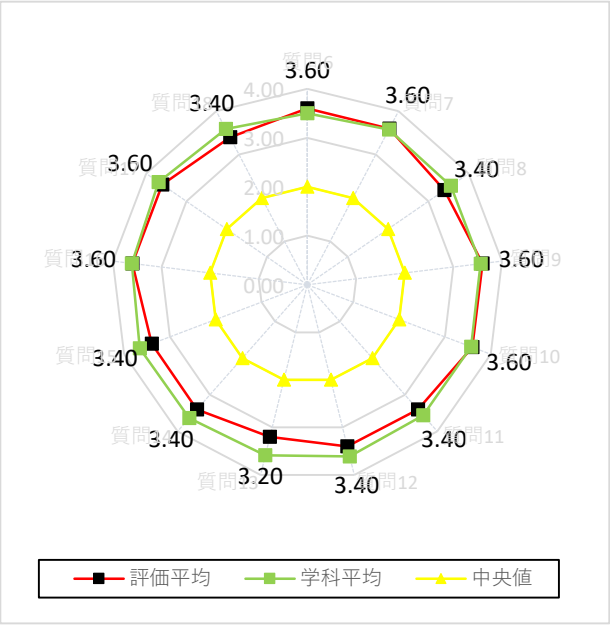
（３）次年度に向けての取り組み

上記で述べたことと関連するが、就職活動などとの関係もあり、出席回数に影響することは十分に考えられる。そのため、年度により学生の進路状況は異なるため、学生の様子を見ながら、支援していくことも必要であろう。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミナールⅡ	5名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

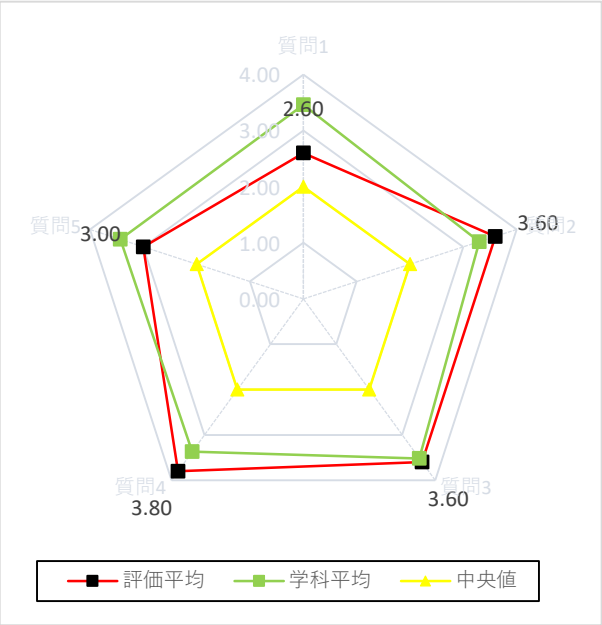
質問11教科書・配布資料等は役に立ちましたか。
質問12声の大きさ・明瞭さ・話す速さは適切でしたか。
質問13授業の進む速さは適切でしたか。
質問14学生の質問等に誠実に対応しましたか。
質問15公平に学生に対応しましたか。
が学科平均より低い得点であった。
学生とのコミュニケーションが質的・量的に少ないととられていたのかもしれない。

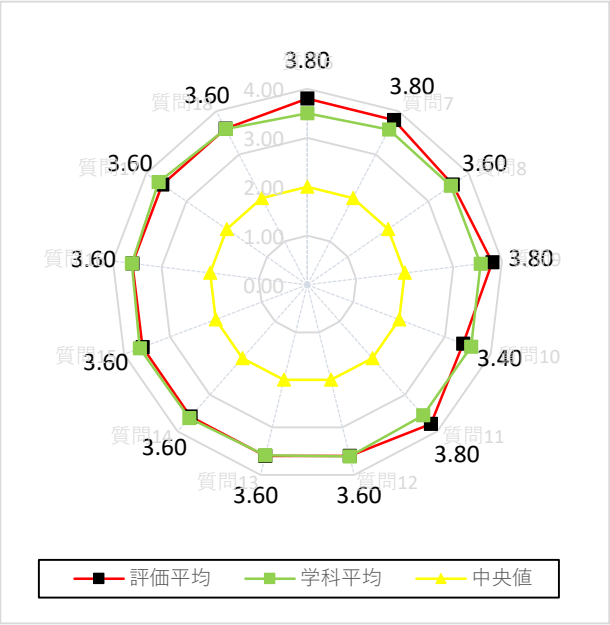
（３）次年度に向けての取り組み

個別面談時の時間配分を均等にする。
「質問はないか？」と学生にこまめに声をかける。
などに取り組む。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミナールⅡ	8名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

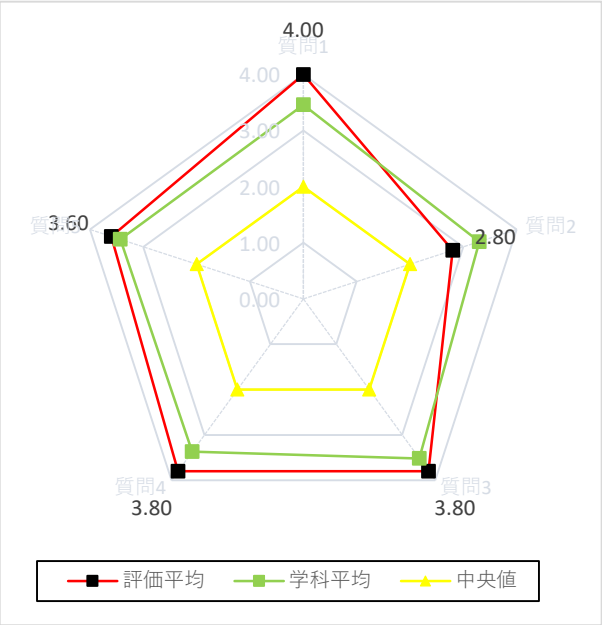
本講義はゼミ指導・個人指導と学科全体での授業形式とが混在しており、ゼミ指導においても各教員の指導体制が揃うよう、事前に調整を行って授業が行われた。後期は、学生が自らの興味があるテーマについてのレポートのまとめや発表を行うための指導の時間と全体でのキャリアプランニングのための授業とが大きな柱であり、各学生の主体的な取り組みを求めることが多かったため、学生による取り組みの差が学生の自己評価に影響したと考えられる。一方で、教員が授業教材等を準備して行うような授業ではなかったため、教員に対する評価としては、質問10など、一部回答しづらい項目もあったと思われる。
授業評価回答数は、最終回に評価時間を設けたが、体調不良等で欠席の学生の評価が行われなかったため、授業最終回だけでなく、早めに周知を行ってて授業評価に取り組めるよう、計画を立てていきたい。

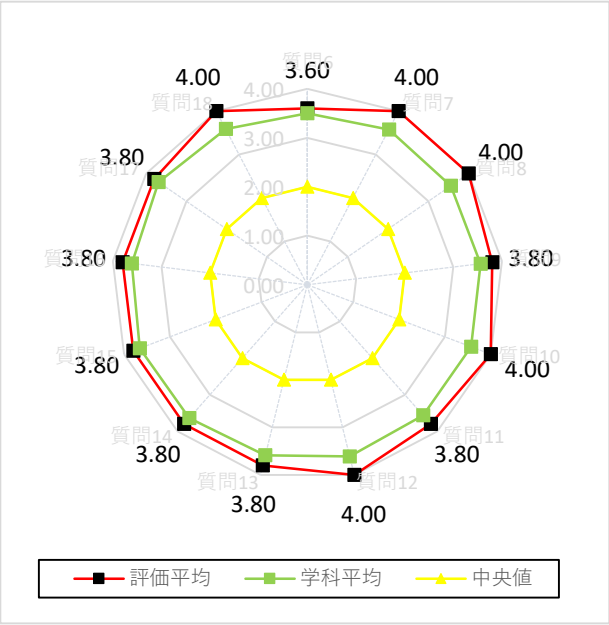
（３）次年度に向けての取り組み

今年度同様授業担当するすべての教員で授業内容や教授方法などについて十分話し合いコンセンサスを得る時間をとることで、より分かりやすい授業構成につなげたい。また、学生のためになる、より適切な教材の検討などさらなる内容の工夫を行えるよう準備を行っていきたい。
ゼミ指導内では、上記にも述べたように、個別ゼミ指導で使用した教材が卒業論文に向けてどのように関連するかなどの見通しを詳細に伝えることで、課題に取り組むモチベーションを上げるよう工夫したい。
対面授業による個別指導を細やかに行うことができたが、学生の取り組み状況に影響される部分もあったため、モチベーションを高めるような働きかけを行いたい。資料提示の工夫や全体指導・個別指導、授業外課題などをバランスよく行うことで学生の学修の向上につなげたいと考える。
授業評価回答数は、最終回に評価時間を設けたが、体調不良等で欠席の学生の評価が行われなかったため、授業最終回だけでなく、早めに周知を行ってて授業評価に取り組めるよう、計画を立てていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	5名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

卒業研究は、学生が自分にとって現状において、価値があると考える命題の決定から、その命題で何を明らかにしたいのか（目的）、また、それを明らかにしていくための手立て・方法、さらには必要な資料、先行研究の選択、そして倫理感等々のすべての過程において、自己探求をしていくという唯一の学びの機会であると考える。まさに自分が勉強をしたくなる、学びたくなる、探求したくなる、という主体的な学びであると考える。

本授業においては、命題及びそれで何を明らかにしたいのか、ということに十分な時間をとっていった。但し、本年度は教員採用試験実施が6月に変更されたという大きな出来事があり、本授業履修生はそのための準備を優先せざるを得ない状況となった。そのことで、当初の見通しから、大きく卒業研究の進捗状況に遅れが生じる結果になった。しかし、結果として、この期間に卒業研究モードから一旦、クールダウンができたというポジティブな面もあったように思われる。

以上ような様々な状況の中でも学生は命題の解決に向けた主体的な取組を進めることができた、という成功体験を得ることができたということが言えるのではないかと考える。

（３）次年度に向けての取り組み

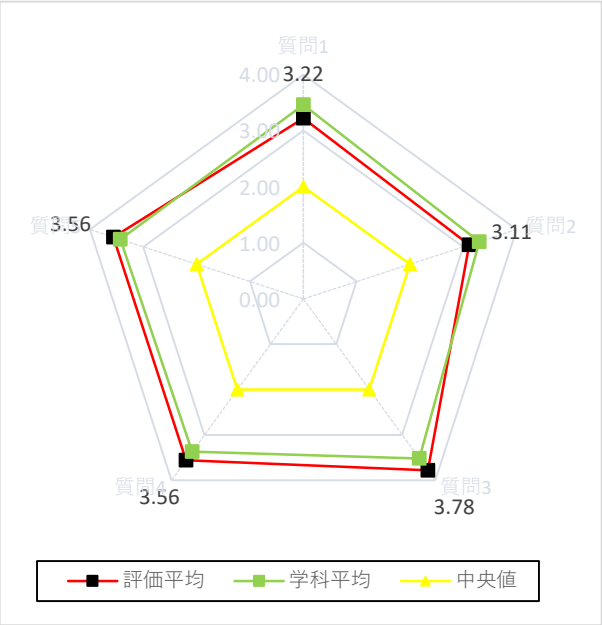
基本的な進め方については次年度も変更をしないでいく。
目的は、学生自身がそのすべてを自分の学びとして価値づけ、卒後の自分自身の専門職としての意識、意欲の向上、そのために何をどう学んでいけばよいのか、等を獲得していくための契機となっていくような機会として位置付けていく。
そのために本年度は以下のことに焦点を当てた授業としてきたい。

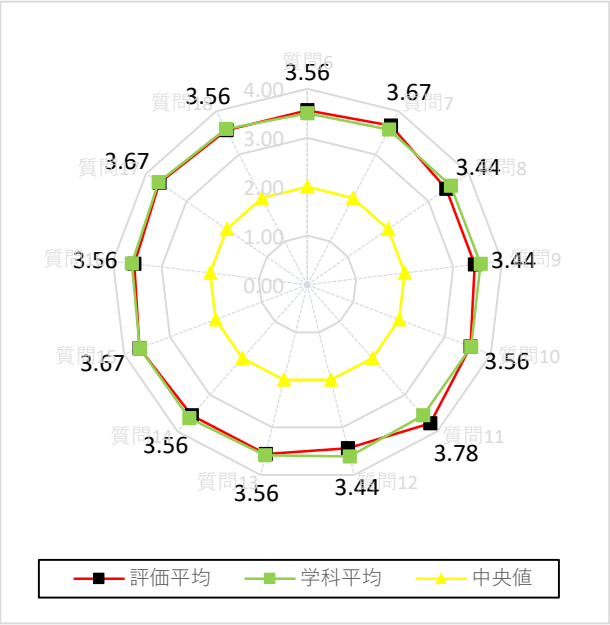
・決定した命題を多面的、多角的に分析していくこと。
・その上で、明らかにしていきたいことを、明確に位置付けていく。
・そのためにどのような研究方法が適切であるか、という3点である。

さらに、各々が進捗状況に合わせて複数他者に発信していくことで、伝えること、また、聴き手は受け止め、理解しようとする姿勢を身に付けること、さらには、ディベート等の機会をつくり、お互いの考えを尊重しながら、自分の意見を、客観的な背景や事実、理論等をもとにしながら発信し、考え方の交換をしながら整理していく機会を増やしていくこととする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		セルフマネジメントゼミナールⅡ	9名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

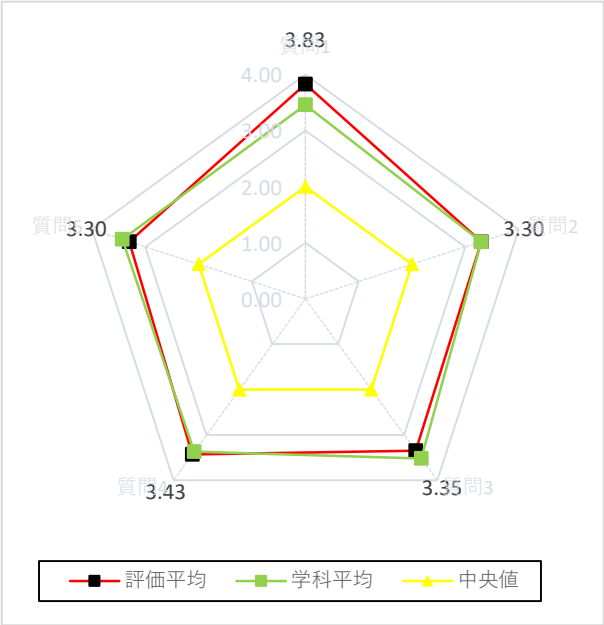
前期に見られた受講生の疲れや欠席が落ち着いたこともあり、授業評価における項目間の偏りがなくなった。しかし、研究課題の遂行という大きな課題が出されて自分で遂行していくことを支援する授業の性質から、授業への興味やわかりやすさは、個人が選ぶテーマや課題遂行力に依存したと考えられる。

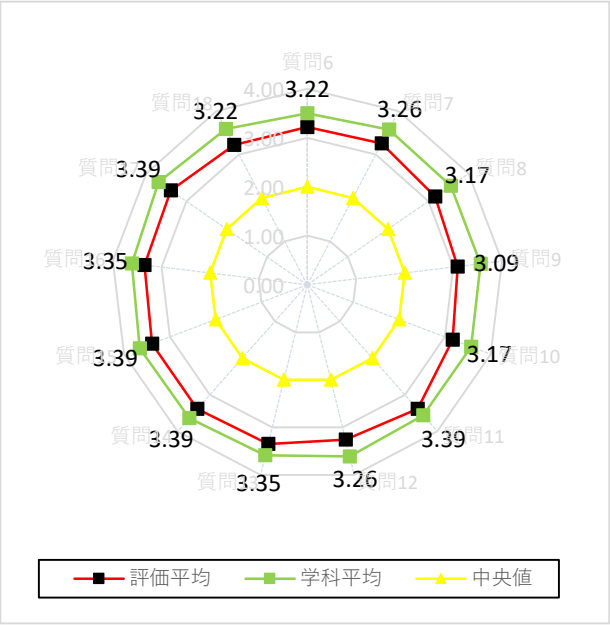
（３）次年度に向けての取り組み

次年度は授業者が変わるほか、授業の回数や進め方がかわる。充実した授業を行ってほしい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼児と人間関係	66名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

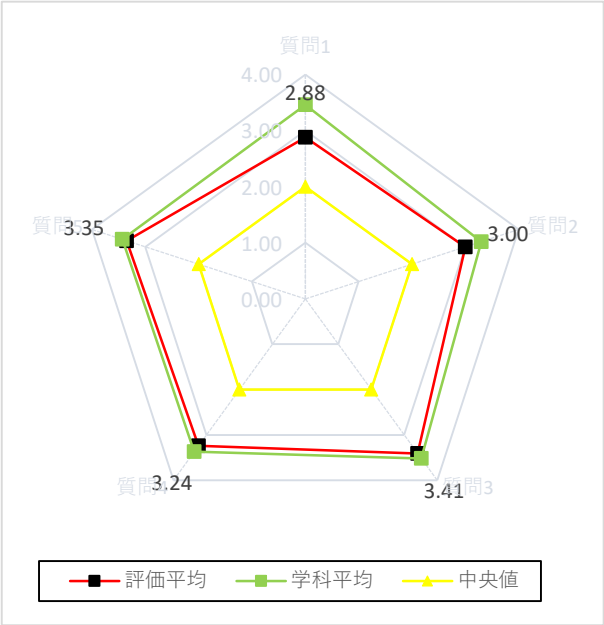
8回の授業の中で、①乳幼児の発達と特徴を踏まえ、それに応じた遊びや自立心を活かした生活の重要性の理解。②領域「人間関係」のねらいや内容の理解。③家庭・地域・園の役割と人的環境の重要性の理解を掴むことがねらいである。同時に、心は体調にも影響を受けるので、幼児期は特に「食う・寝る・遊ぶ」がいかに重要か。大人であっても「早寝・早起き・朝ご飯・朝うんち」は意識することも触れた。まず、人間関係なので周りの人との自己紹介から入ったが、留学生が3人受講し、とても良い影響を与えてくれた。最後には自国の幼児教育を紹介してくれ反響を呼んだ。また、教科書の説得力のある文章から、自分自身の人間関係に刺さると言う学生もいた。生涯に渡って人間関係は大事なので今の自分の悩みに引きつけて考えることが出来ているようであった。意見交換も取り入れ、人間関係が希薄と言われているが、避けたくなる理由等、考えた。自由席にしていたが、学びの姿勢に差があり、中盤に学生間から私語の苦情が出たので、指定席にせざるを得なかった。締めくくりは小テストだったが、範囲を絞ったので点数は取れていたが、取り組みに差があった。

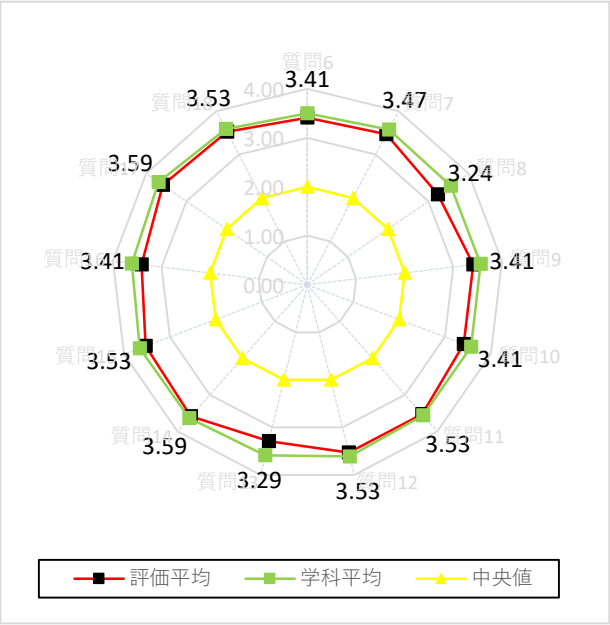
（３）次年度に向けての取り組み

8回の授業の中で、何を厳選して取り上げるかが課題である。乳幼児の発達と特徴を踏まえ、それに応じた遊びや自立心を活かした生活の重要性に焦点を置く。特に0，1，2歳児は最も重要であるので、様々な資料を提供しつつ深めていきたい。また、領域「人間関係」のねらいや内容の理解は、子どもの姿がエメージ出来るように絵や写真を用いる。その上で、家庭・地域・園の役割と人的環境の重要性も事例を出して考えていきたい。特に、生涯に渡って人間関係は大事なので、幼児期に人的環境が果たす役割を、自分事として過去の自分を振り返りながら、「人間関係を築く力」について深めていきたい。今後も学生同士の意見交換を取り入れ、人間関係にまつわる話題を学生から集めていく。そして「人間関係を学ぶ意義」を個々人が掴めるよう、学生が自分自身の言葉で納得していくよう、様々な工夫をしていきたい。実践を踏まえて、心の栄養剤である「絵本の読み聞かせ」の機会も取り入れていく。そして、毎回の授業の感想をとり、学生の捉え方、見方を踏まえ検討し、授業の柱をしっかりしたものにしていく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習指導Ⅰ	28名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

昨年度までと異なり、コロナ禍も明け、すべて対面授業での指導が可能であった。実習指導については遠隔授業では伝えきれない部分も多いので、対面授業ができたことは非常に有意義であった。

初めての外部実習である施設・保育所実習に向けて、実習の意義・目的・心構えを学習するとともに、対象となる子どもや利用者の年齢や状況に応じた保育・支援、また指導計画・支援計画立案等さまざまな内容を習得できる指導を行うよう心がけた。特に学生にとっては、経験のない未満児や障がいをもつ利用者についての理解が非常に難しいため、視聴覚教材等を適切に使用したり、保育現場の保育者や指導員を招へいし、具体的な指導を盛り込むなどの工夫をしている。

授業評価については一定以上の高い評価を得ている。学生も不安を抱えながらではあったが、より以上に真剣に取り組むことが高い授業評価につながっていると考える。

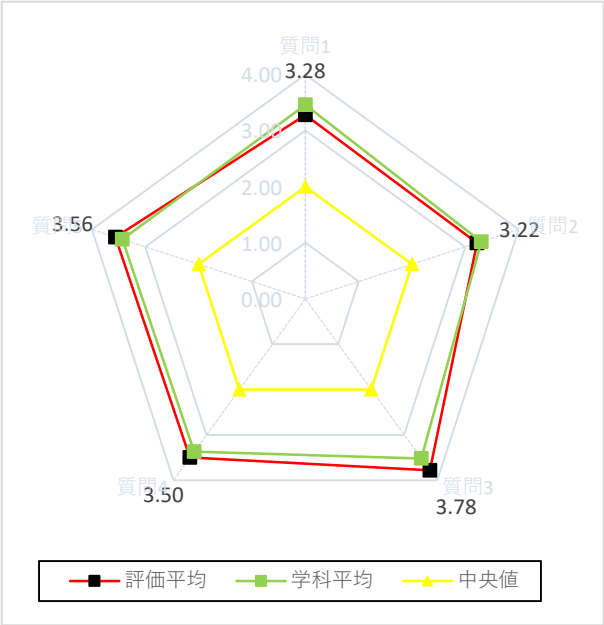
（３）次年度に向けての取り組み

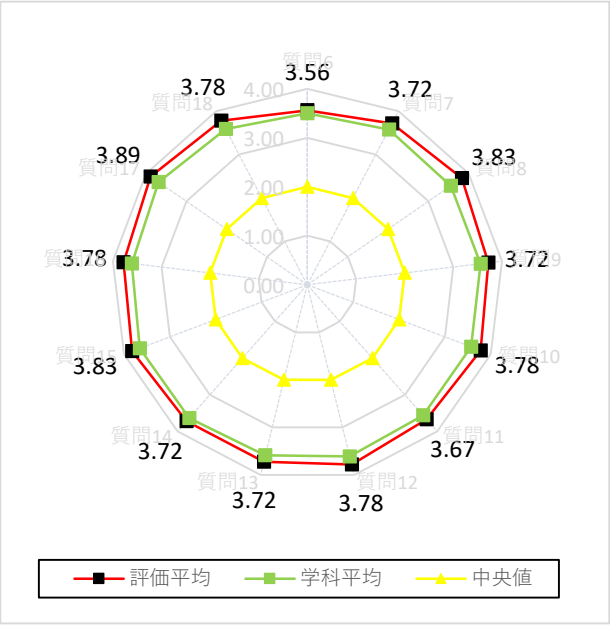
令和6年度は、今年度の反省点を踏まえて、実習担当者としてより臨機応変に対応できるよう心がけたい。

学生が日頃あまり経験のない未満児や障がいをもつ利用者についてしっかりと理解した上で実習に臨めるような工夫が必要である。また、記録や指導計画・支援計画等の書き物については、書くことが苦手な学生も多くいるため、「書く」というたくさんの経験ができるように視聴覚教材等の適切な使用も含め、工夫して授業を進めていきたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		カルチャーと心	38名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

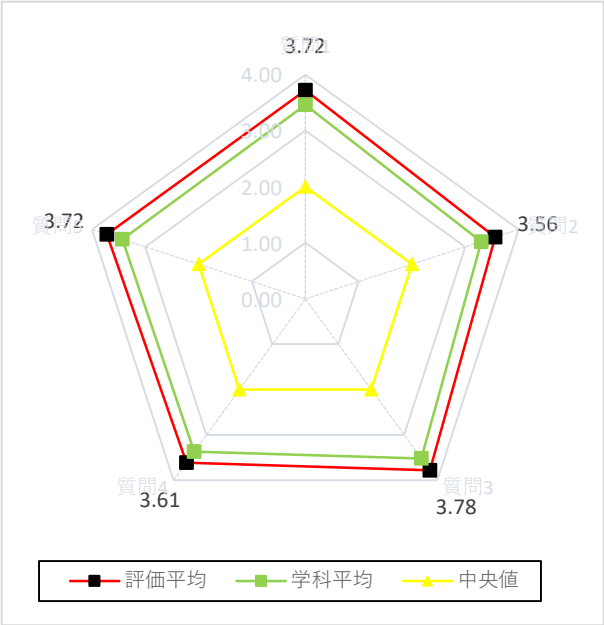
講義としては、全体的に高い評価を得ている。しかしながら、質問6シラバス（授業計画）について説明がありましたか。については、やや評価が低いようである。初回の講義からシラバスと共に、講義に入っているため、シラバスの内容が薄れている可能性が考えられる。映像の更新や講義内容に関しても新しいものを取り入れて、講義を行っていきたい。

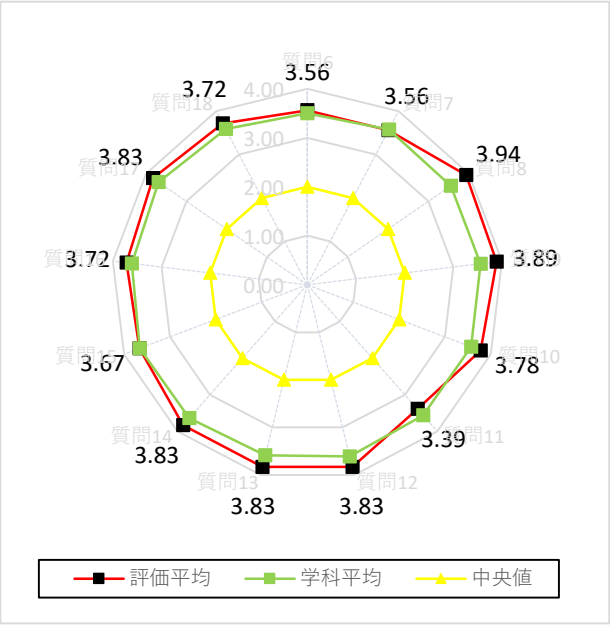
（３）次年度に向けての取り組み

次年度に向けては、上記でも記載したように高い評価を維持していきたい。また、シラバスの説明に関しては、資料を通じて、明確に伝えることを心掛けたい。また、最新のアニメや映像（研究成果を含む）ものも取り入れながら、講義を行っていきたい。また、好評であった個別課題に関しても、引き続き行っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		アニメ・映画・絵本と心理学	40名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

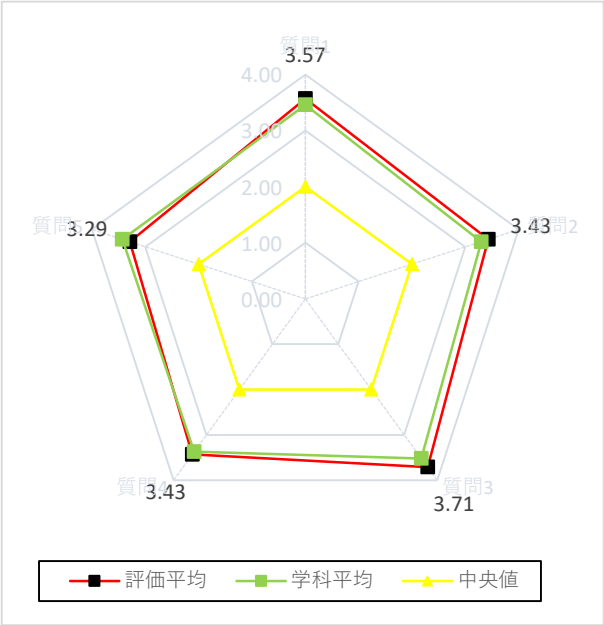
　アニメや映画は臨床心理学の学問と関連が深く、人間の内面の深さを取り入れた作品が多い。
ほとんどの項目が学科平均より高く、学生の関心度の高さがうかがえる。
本授業のねらいを再度丁寧に説明しながら授業を展開させる必要がある。

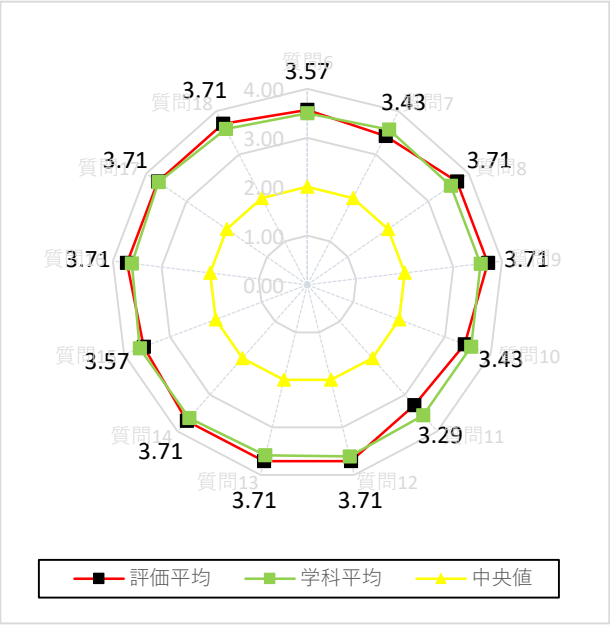
（３）次年度に向けての取り組み

学生の関心度も高く評価も高い。映画など人間の内面と深くかかわる内容を選択しているためで、アニメや映画の教材を選択することの重要性がある。
次年度も学生たちと内容を吟味しながら教材を選んでいきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		キャリアアップ講座Ⅲ	15名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

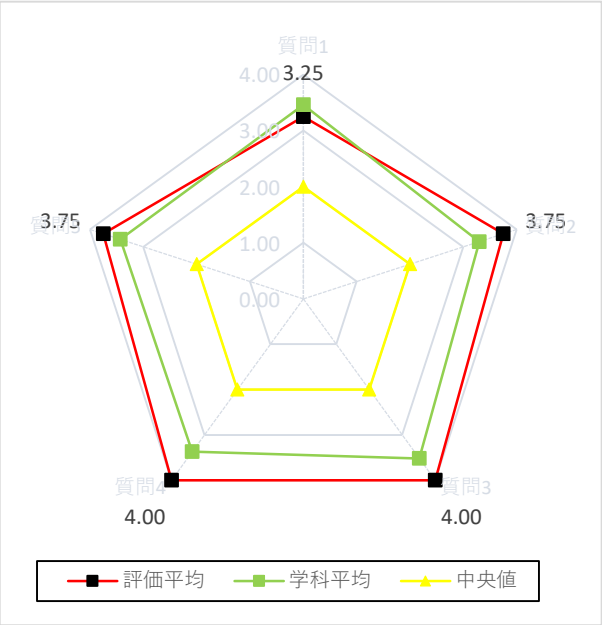
質問7教員は授業の到達目標を明確にして、授業を展開していましたか。
質問10視聴覚機器や板書の用い方は適切でしたか。
質問11教科書・配布資料等は役に立ちましたか。
が平均より低かった。
配布資料やチェックシートは多く配布しているが、学生にその意図や目的が伝わらなかったk脳性がある。

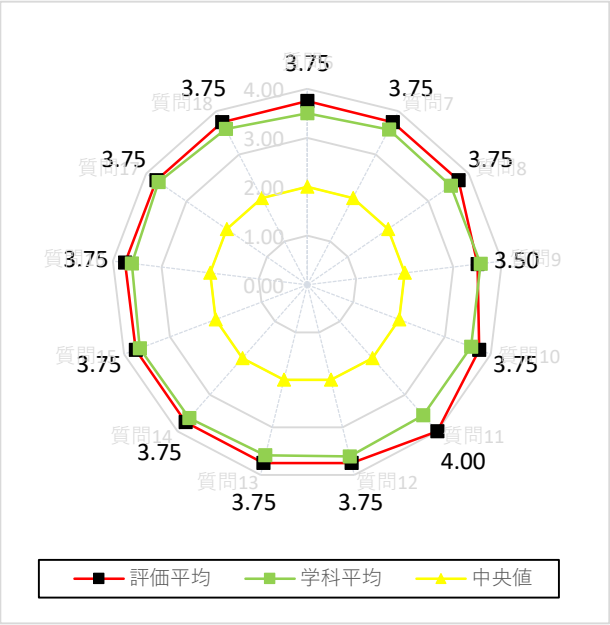
（３）次年度に向けての取り組み

毎回の授業時に「目的」「到達目標」を示してから、授業を進めていくようにする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼稚園教育実習Ⅰ	55名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

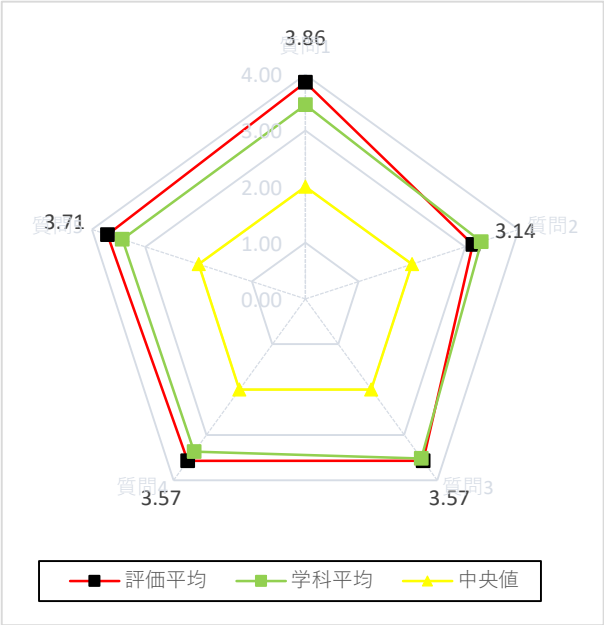
幼稚園教育実習Ⅰは、保育を学ぶ学生にとって初めての保育現場である。附属幼稚園においては、コロナ感染インフルエンザ感染の懸念の中、55名を受け入れて頂いた。配属先の担任の教諭には、学生一人一人が机上で立案した指導案を夏休み中に添削して頂いた。10日間の実習では、観察・参加・部分実習を経て、指導案に基づいた責任実習の機会を得た。今回、10月前半のaクラスは運動会に貢献し子どもともよく遊べていた。後半bクラスは元気がなく体調不良が多かった。園からは、熱があるのに出勤していた、規定時間前に帰宅しようとした、責任実習の当日、担任に相談しないで内容を変えた等、勝手に自己判断する事案が数件あった。また言葉遣い、実習生同士のふざけ合い、担任の倉庫を勝手に開ける、掃除があまり出来ていない等、実習生としての自覚のなさも目立った。グラフの質問1にあるが、特にbクラスから喉の不調、体調を崩しているとの訴えが多かった。実際、最終日に園の数クラスが学級閉鎖になり、お楽しみ会が出来ないクラスもあった。波乱の実習であったが、評価などの結果を見ると初めての実習は得るものが多く、学生の自己評価が高いと分析する。

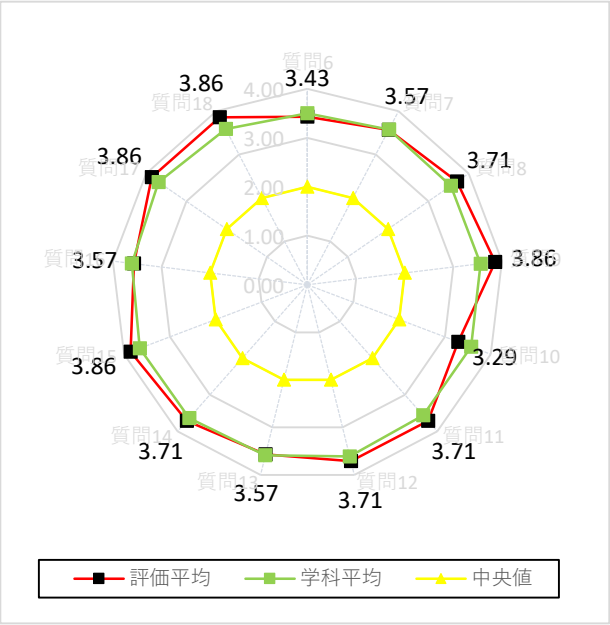
（３）次年度に向けての取り組み

今回の幼稚園教育実習Ⅰの結果を受け、実習生としてどうあるべきか、具体的に実際を伝えていく必要がある。その上で学生が自分自身で考え、自覚と心得を明確にする必要がある。対策として実習に向け、態度や言葉の表現、目的意識を自分の言葉で伝えるなど、経験のない学生が、気づきを持てる取り組みをしていきたい。また、実習中の様々な事柄について、学生との会話から悩みや課題にいち早く気づき、対応をしていきたい。同様に、園の先生方からの気づきにも応じ、実習中に改善していきたい。次年度に向けて園から提案頂いた、①日誌について、エピソード記録や、日誌の内容を子ども理解に繋げるよう記録部分を区切り焦点を当てた書き方にするのはどうか。②体調不良の学生の検温と病院受診の徹底の依頼。③指導案の活動内容の事前のすり合わせ等、園と連携を取りながら検討していきたい。初めての実習で、実習生自身苦労はしたが、本人が子どもの魅力・保育の面白さに目覚められようにサポートしていく心構えである。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習指導Ⅱ	25名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

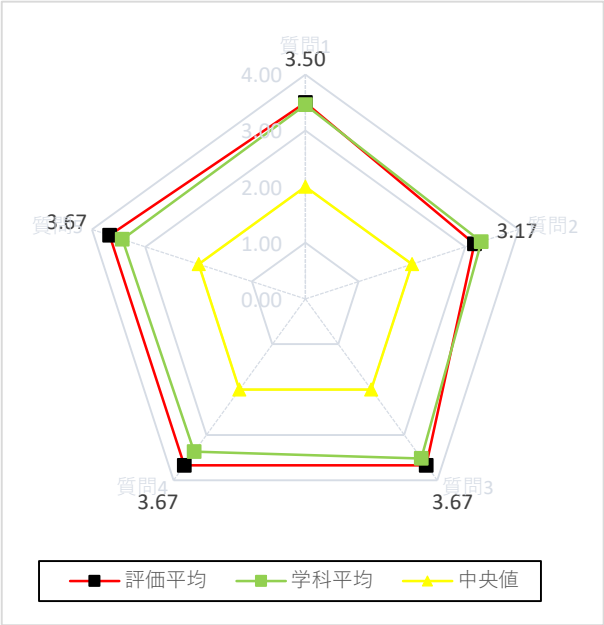
保育士の資格取得の集大成として、就職を意識した学生の真剣な姿勢が伺え、模擬保育やグループワークで大いに学び合う事が出来た。それが出席率や自己評価の高さに表れている。授業では、保育所での実習の目的を明確にし、子育て支援、地域社会とのつながり、小学校への接続などの問題にも触れた。ほとんどの学生が保育実習Ⅰ・幼稚園教育実習ⅠとⅡを経験しているので、模擬保育では子どもに実際に見せ聞かせるクオリティーの高い保育教材を作ることが出来ていた。また、責任実習の経験からの学びや保育の課題など、経験による生の声で意見交換が出来ていた。評価では、シラバスの活用や説明の評価が低いが、授業の目的・模擬保育の日程調整など計画的に進めてきた。また、視聴覚機器、板書の活用は少なかったので、要点の明確な確認のためにも、もう少し取り入れていきたい。その分、配布資料は厳選して内容を補っていたが、説明を工夫していきたい。特に評価が高かったのが、授業は分かりやすく工夫されていた、公平に学生に対応した、教員は熱心に取り組んだ、総合評価、であったので、学生と教員側の意向が合っていたと分析している。

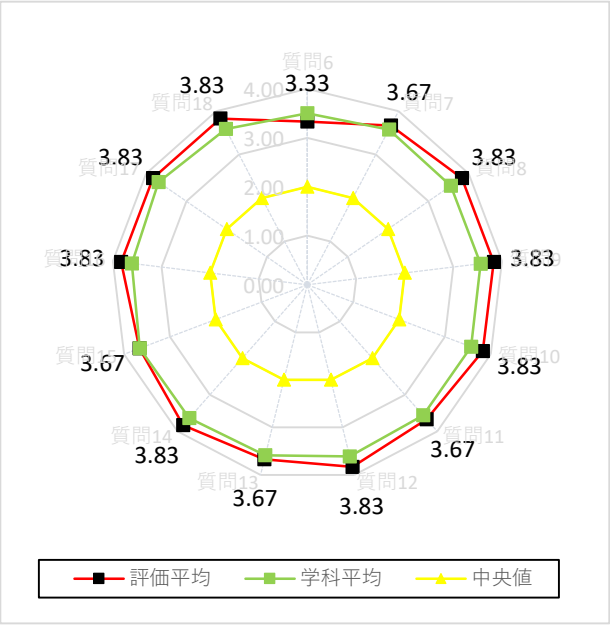
（３）次年度に向けての取り組み

ほとんどの学生が卒業に向け、保育・教育現場という社会を意識して授業に取り組んでいるので、保育実習Ⅱの目的を踏まえ、学生同士のやりとりで保育観・倫理観が深まる授業を目指したい。学生の中には道に迷い、欠席したり元気が出ない様子もあったので、相談にのりながら、実習は最後まで人生の糧になるように取り組むよう励ましていきたい。学生の模擬保育では、保育者役として奮闘し、導入や雰囲気の作り方など、緊張しながらも楽しんで取り組んでいるようであったので、さらには子どもの役の充実、その後の意見・情報交換を有意義にしていきたい。授業で取り上げる内容は、子育てにおける家庭との連携・地域との関わり・小学校との接続にしてきたが、保育現場の現状は複雑で厳しいことから、家庭問題など、学生の問題意識から取り上げ、見つめていきたい。今後、社会において助け合って学ぶ姿勢が大事になるので、グループワークを工夫し周りの協力者と共に意欲が湧くような時間を作っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習Ⅱ（保育所）	25名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

保育実習Ⅱでは、保育実習Ⅰにおける経験と課題を踏まえ、各保育所の特性や一人ひとりの子どもの実態、保護者の状況等を理解し適切な援助を行うことが目標となっている。また、専門職としての保育士の役割や職務を理解し、自らの保育観や倫理観をさらに深め、新しい学習課題を発見する機会としてとらえることが必要とされる。

本年度は新型コロナウィルス感染拡大を理由として実習を断られるケースはなかったもののPCR検査やワクチン接種を条件とする受け入れもあったが、実習を希望する学生の全員が実習を終了することができた。学生にとっては実習をさせていただけることに感謝の気持ちが大きく、その気持ちをもって行動することができた。この評価については、一人ひとりの学生がそれぞれの実習園でさまざまなことを学び、その過程や結果について自己評価をしたものであるが、質問内容が実習そのものにはあまりそぐわない内容ではあるものの、おおむね一定以上の評価をしている。

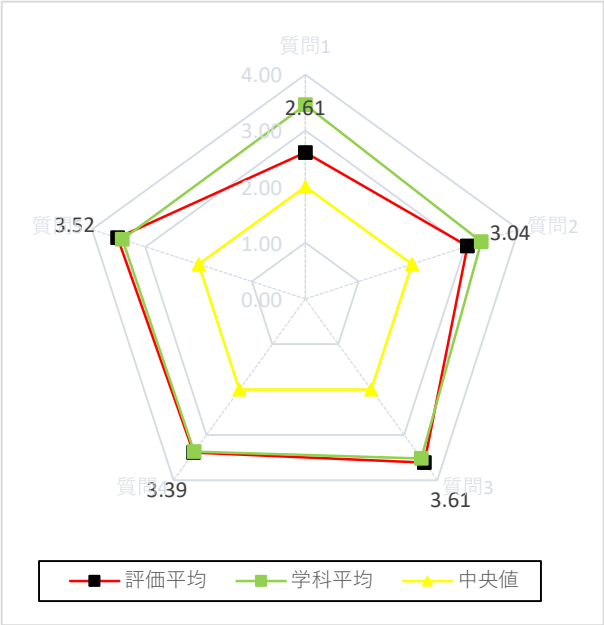
（３）次年度に向けての取り組み

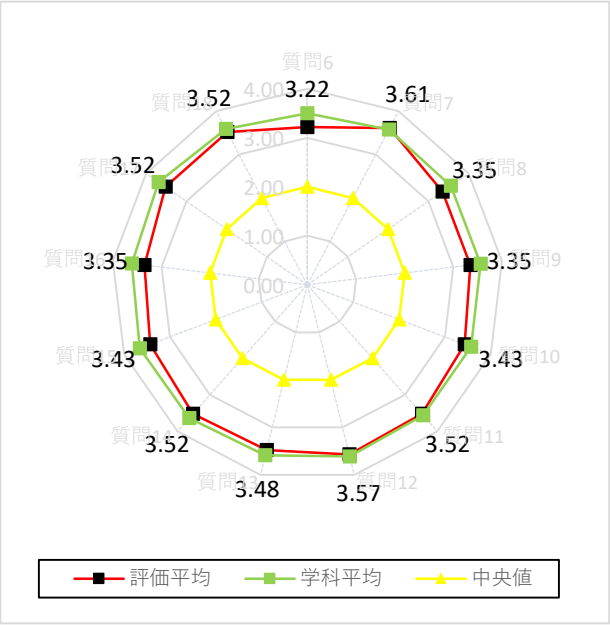
保育現場では、コロナ禍は明けたものの対象児には未満児もいるため、今まで以上に学生にも配慮するよう指導する必要がある。実習担当者として臨機応変に対応できるよう心がけたい。保育実習Ⅱは、最終学年である4年生で行う仕上げの実習である。自らの今後の進路を定めるうえでも非常に重要な実習であると言える。特に地域社会における保育の現状、子育て支援、保護者支援に対する理解やその実践についての学習、さらには、さまざまな社会資源との連携の実際などについても学習することが求められており、その内容は多種多様である。

これらを踏まえ、令和6年度は実習園ともさらに連携を密にし、学生一人ひとりの保育観や倫理観を確立して行けるよう、サポートしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼稚園教育実習指導	52名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

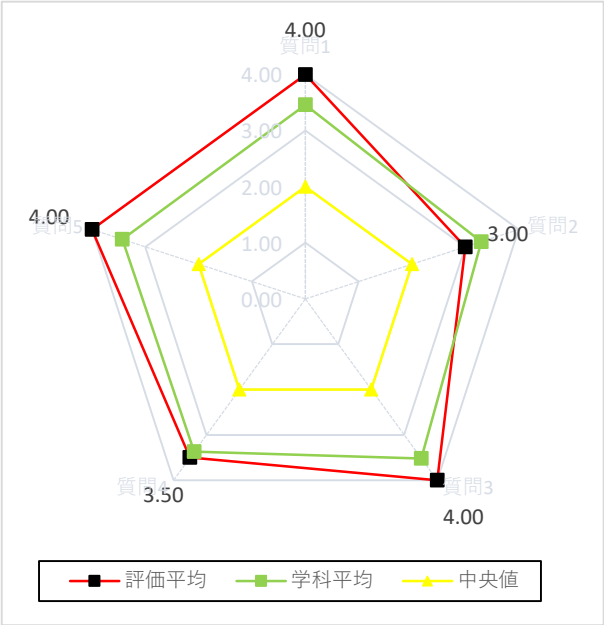
2年次、学生の初めての事前活動は、実習の意義を明確にし、日誌の書き方を学び、何より指導案作成は学生も教員も苦労して立案した。附属幼稚園側は、未熟な実習生を苦慮されながらもご指導頂き、幼稚園教育実習Ⅰを終えることができた。事後活動ではグループにより、実習で学んだことのテーマを絞り、図解作成に取り組んだ。そこから明確になった課題と目標を持って次の実習に繋げている。学生の自由回答に実習の連絡事項の要望があったので気を付けていきたい。3年次、カリキュラムの移行期で、小学校教育実習が一斉にではなく、何人かずつ五月雨式に行われたため出席率が低く、幼稚園教育実習Ⅱの事前・事後の活動は、各自が実習に向けて個人的に取り組んだ。実習手続きの書類配布や指導が難しく、県の企画である保育士の魅力を伝えるセミナーには、全体の半数しか参加できなかった。それでも、この授業の自己評価が高い数値で示され、実習を多くこなした自信が表れていると感じた。実習後の個人テーマによる学びの図解作成は意義深く、1人7分の発表と質疑応答は具体的で保育の奥深さや喜びを感じるものでとても有意義であった。

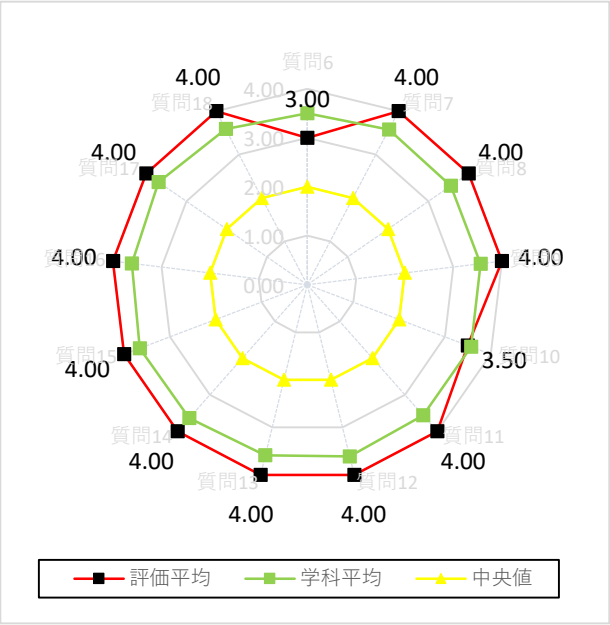
（３）次年度に向けての取り組み

2年次の事前活動は、個人が実習の意義をこれまでよりも明確にし、実習の心得をもって真剣に取り組み、附属幼稚園には迷惑を掛けないよう指導したい。指導案作成は難易度が高いので、子どもの姿をイメージしやすいような工夫をしていきたい。事後のグループ活動は、学生の貴重な学び合いの場になるので発表まで丁寧にやり遂げ、それをもとに個人の課題と目標を、次の実習に繋げていく。しかしその後の問題は、幼稚園教育実習Ⅱが、3年次の2月、春休みに設定されている事である。事前活動は、例年以上に実習の準備に時間が取れ、DVD視聴による日誌の書き方のスキルアップ、指導案を立案し模擬保育なども取り組める。一方事後には、今年度まで行ってきた個人の学びを整理し、他者に発表し意見交換する時間がとれず、日誌の提出や個人レベルの学びに留まるようで残念である。「実習で得た学びの報告会」をしていく事を願い、具体策を練っている。そして保育の面白さや魅力を学生自ら見出せるよう、学生の意見を聞きながら、授業を展開していき、幼稚園教諭の資格取得に相応しい締めくくりを実践したいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習指導Ⅲ	15名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

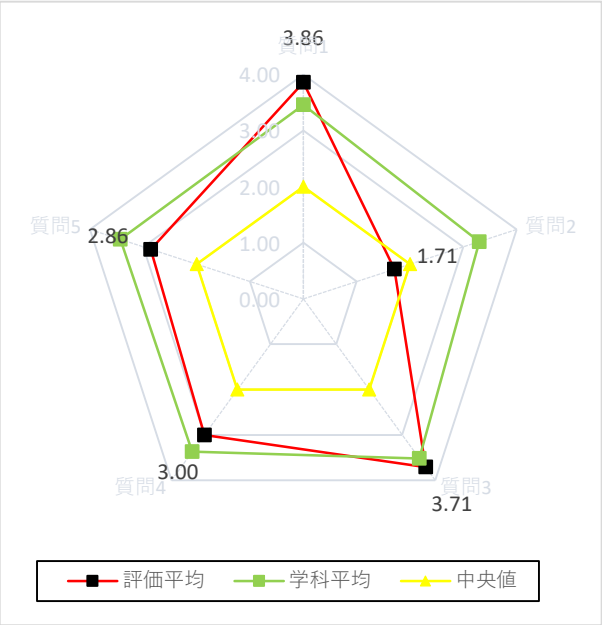
保育実習指導Ⅲについては、対象となる学生が7～8名と少ないため、ゼミ形式で授業を進めている。
本年度はコロナ禍も明け、対面授業で行うことができた。それによって遠隔授業では伝えきれない細かい部分も十分に伝えることができた。実習先施設の種別としては、今回の受講生の実習先は児童養護施設を中心にさまざまな種別であったため、お互いが情報を共有し学べるよう配慮して進めた。
授業評価については、自らの学びについての評価も授業についての評価も高い。

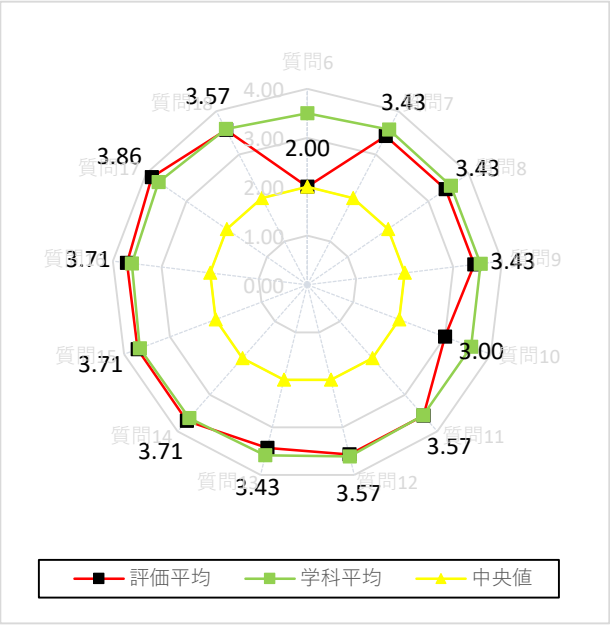
（３）次年度に向けての取り組み

令和6年度の対象学生は例年に比べるとやや多く10名である。しかしながら基本的にはゼミ形式で進めるとともに、一人ひとりの学生の学びを受講者で共有できるようアクティブラーニングの形で進めていきたいと考える。
そのためには、学生それぞれが実習に臨むうえで事前に調べたことや、実習後に学んだことを報告する機会を設けて、学生間で双方向的に学習できるような環境を整える必要がある。また、教員もその環境の中に存在することによって適切な指導やサポートができるよう努力したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習Ⅲ（施設）	8名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

保育実習Ⅲでは、保育実習Ⅰ（施設）における経験と自らの課題を踏まえ、各施設の特性や一人ひとりの利用者の実態、保護者の状況、各社会資源との連携等について理解し、利用者に対する適切な支援を行うことが目標になっている。また、専門職としての保育士の役割や職務を理解し、自らの保育観・倫理観をさらに深め、新しい学習課題を発見する機会としてとらえることが必要とされる。

本年度はコロナ禍も明け、昨年度までに比べると制限もそれほど多くはなかった。しかしながらコロナ禍を経験した学生は感謝して実習に臨むという気持ちが強く、授業評価が高いことにつながっていると考えられる。

仕上げの実習として、大学において振り返りを行い、課題や問題点を解決し、社会に出ていけるよう各自が努力していくこと、さらには教員としてそれをサポートしていくことが必要であると考える。

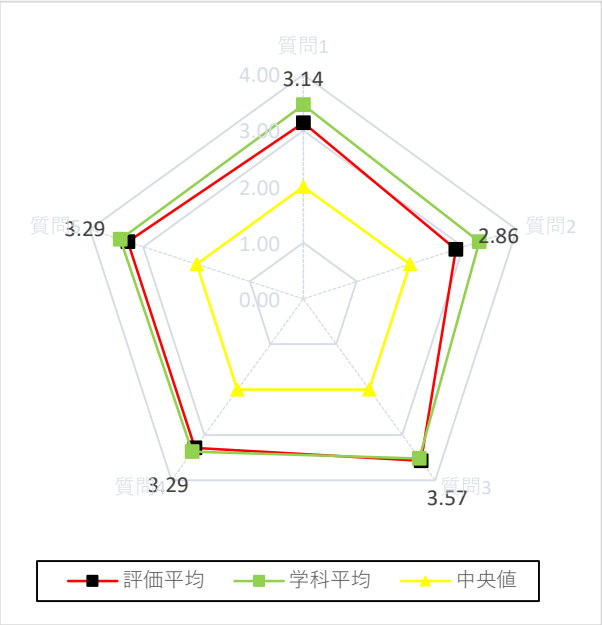
（３）次年度に向けての取り組み

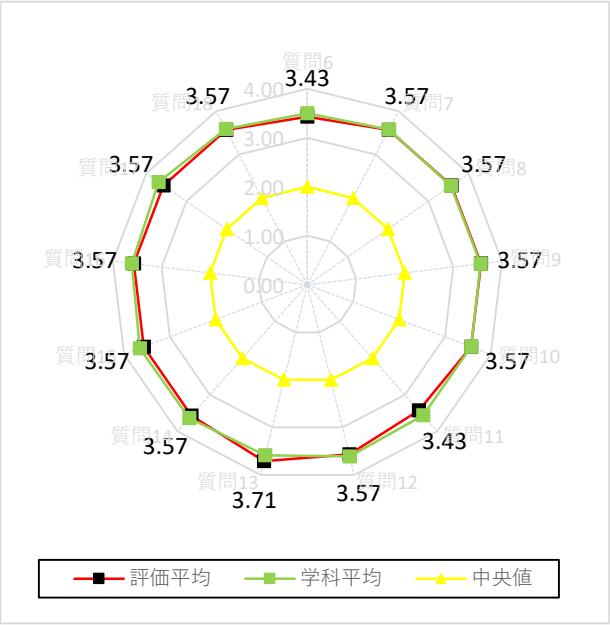
令和6年度は、実習担当者としてさらに臨機応変に対応できるよう心がけたい。保育実習Ⅲは、最終学年である4年生で行う仕上げの実習である。自らの今後の進路を定める上でも非常に重要な実習であると言える。特に支援を必要とする利用者に対する個別支援や地域社会における支援の現状、保護者支援に対する理解や実践についても求められており、その内容は多種多様である。

これらを踏まえ、令和6年度もなお一層実習施設とも連携を密にし、学生一人ひとりの保育観や倫理観を確立していけるようサポートしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理専門ゼミナール	10名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

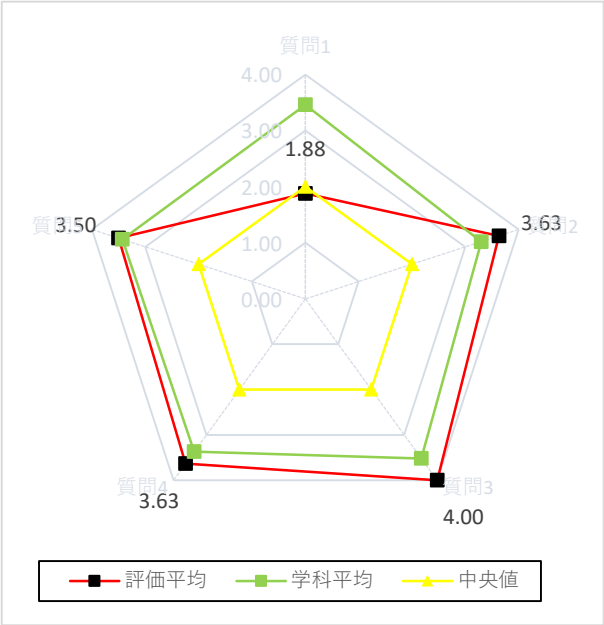
質問２、６、１１が学科平均より低かった。
見通しが立ちやすいよう工夫する必要がある。

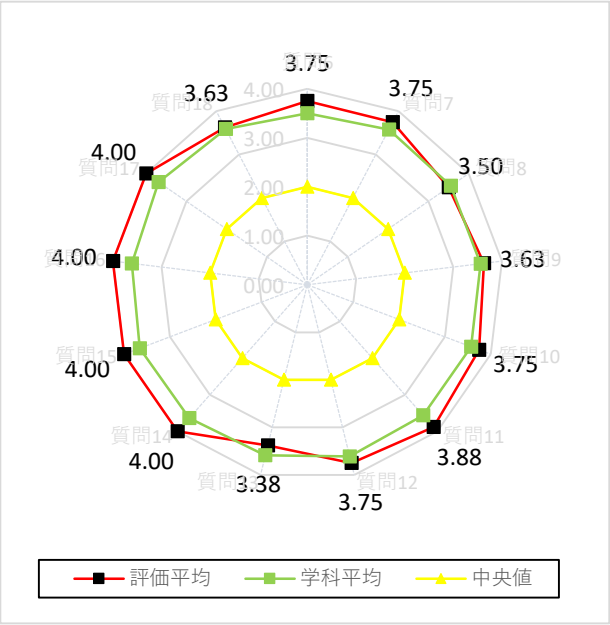
（３）次年度に向けての取り組み

授業開始時にシラバスと、本日の授業の目的を学生に説明するようにする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理専門ゼミナール	9名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

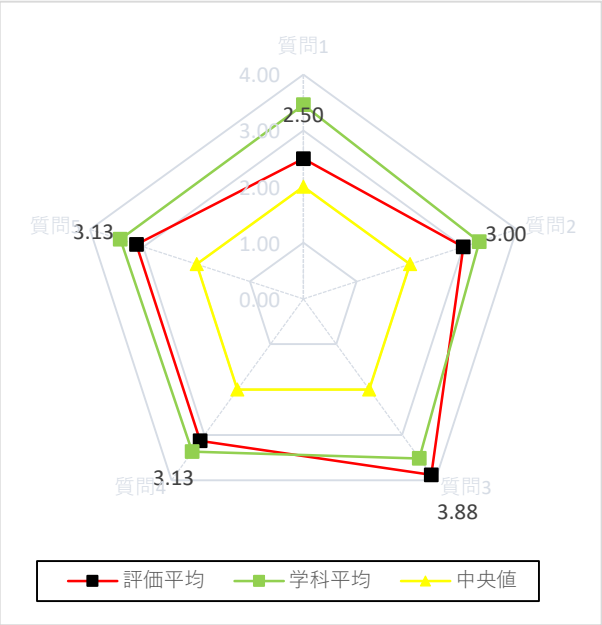
個々の欠席が目立ったが、教員の教授行為に対する授業評価については堅調であったと言える。夏休み中の課題提示があいまいだったことで、後期に負担が集まり、そのために質問13について評価がやや低くなったと考えられる。

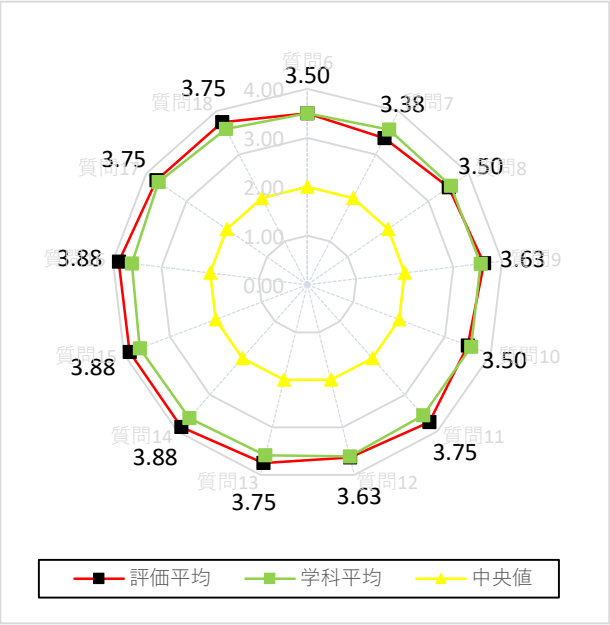
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も、受講者の人数や特徴にあわせながら目的を達成する授業が出来たらと思う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理専門ゼミナール	11名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

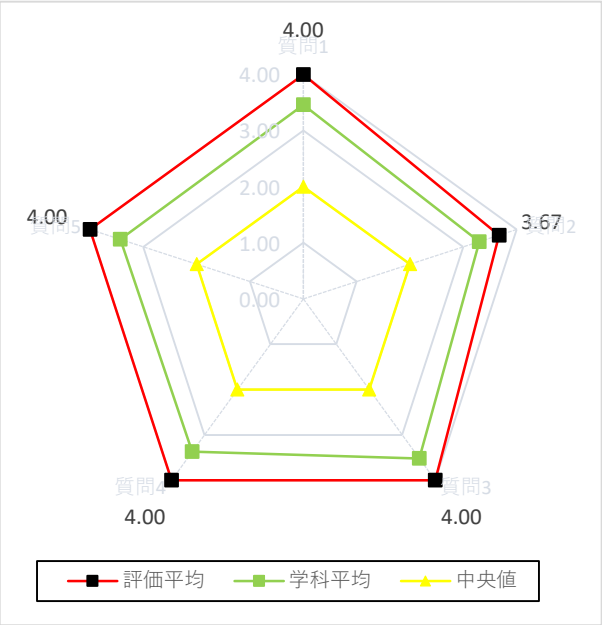
概ね高評価であった。しかしながら、質問6シラバス（授業計画）について説明がありましたか。質問7教員は授業の到達目標を明確にして、授業を展開していましたか。質問10視聴覚機器や板書の用い方は適切でしたか。いずれも適切に説明していたが、説明が不十分であった可能性がある。また、機器に関しては、例年通りであるため、板書の回数等が影響しているかもしれない。

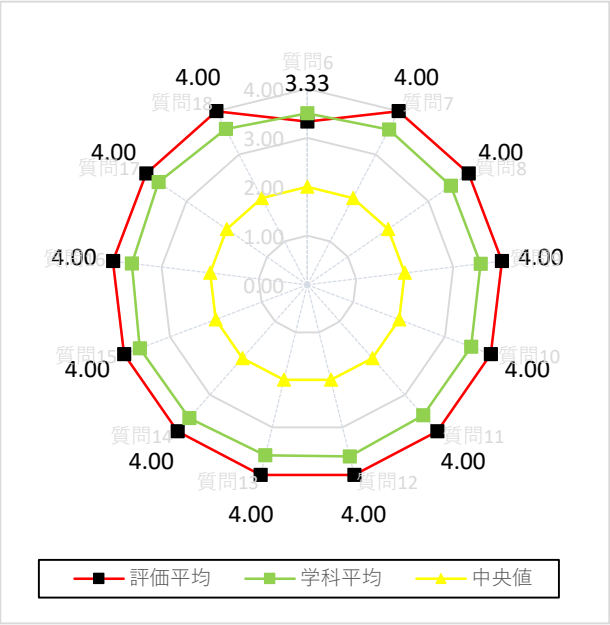
（３）次年度に向けての取り組み

評価について、悪い状況ではないが、改善点がいくつかあげられる。シラバス、卒業論文への道筋、その後の目標を明示して、講義を行っていくこと、板書等を意識しながら、説明に工夫して講義を進めていくことを意識して次年度に備えたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	心理カウンセリング		心理専門ゼミナール	18名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

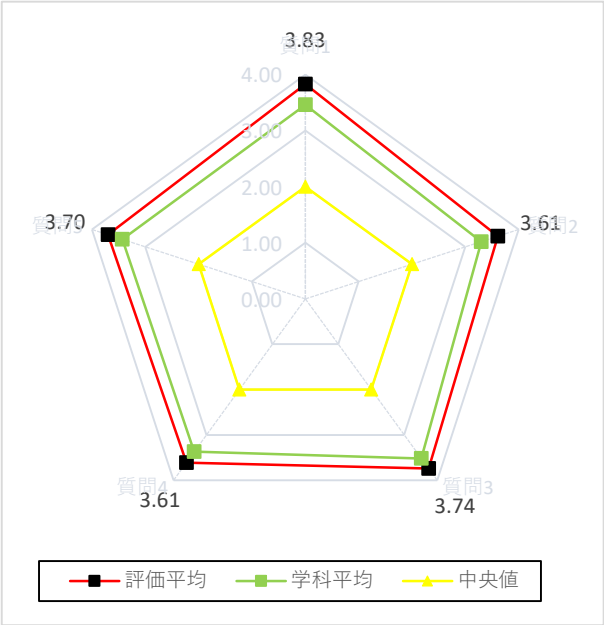
この科目は、卒業研究に向けて専門的な研究をすすめていく準備をする授業でもある。学科平均よりも高く評価されている、関心の高さがうかがえる。
論文を読んだり、そのことを通して話し合いをしていく中、学生が自主的に学習することを促し学習に対する意欲を高めることができていると思われる。

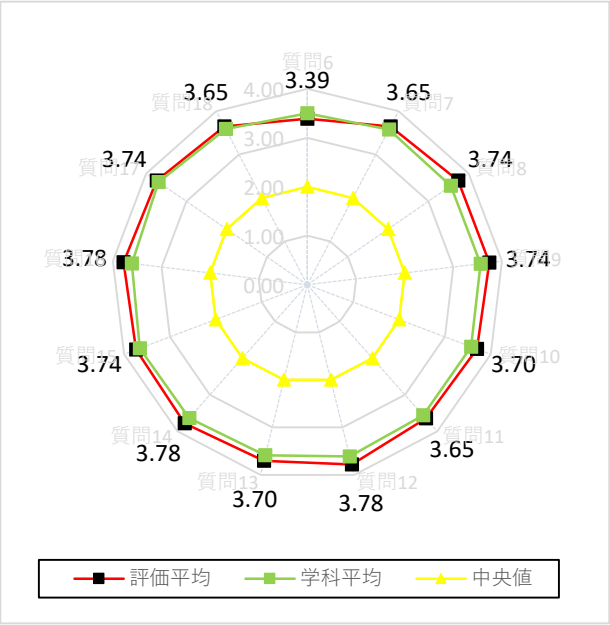
（３）次年度に向けての取り組み

学生の評価も高く、専門的に学んでいくことへの興味がうかがえる。
学生の主体性を重視しながら今後も取り組み、学生が納得す津卒業研究へとつなげていければと思う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		特別支援教育実習指導	37名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

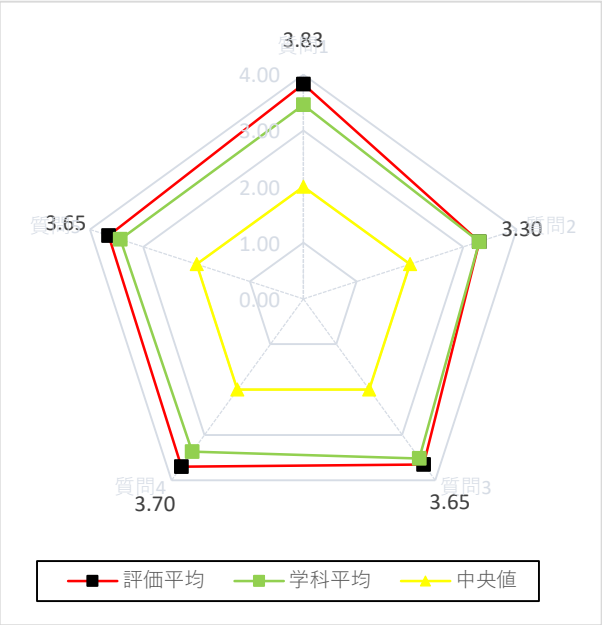
実習を引き受けていただいた佐賀をはじめとする九州各県の特別支援学校へは感謝しかない。
学生も、ボランティア体験として特別な支援を必要とする児童生徒等にはかかわったことはこれまでもあったと思うが、教育として、特別な支援、指導、そして配慮を継続して行い、児童生徒の充実した学校生活の実現という重い責任と役割を担う一員としての臨床経験は初めてである。そのことのために、先輩の先生方から学び、真似をし、そして自分の中に落とし込んでいく作業を行うということを丁寧に行うことの必要性を肌で感じてくれた思う。この経験を通して、日ごろの学内の授業では学びえない体験、経験を得、獲得した技術も少なくなかったと考える。このことが表れた調査結果であると考える。

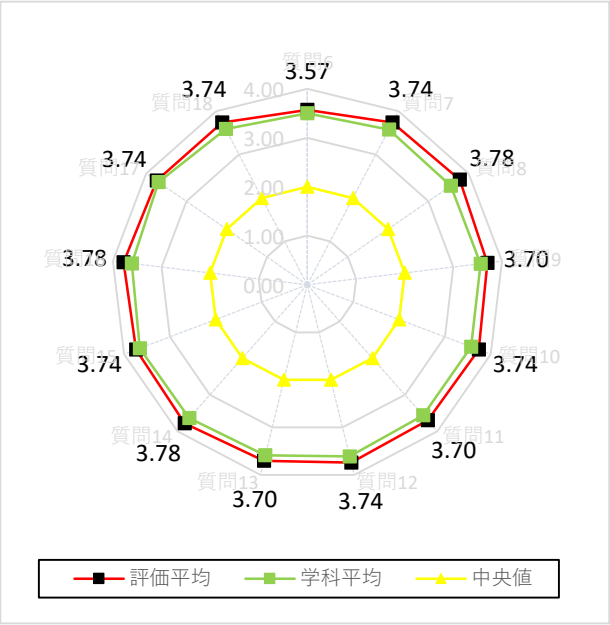
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も、特別支援教育実習を体験するすることで学生が、将来の社会の中での「自己の役割と責任」を考える切っ掛けとできるように進めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		特別支援教育実習	37名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

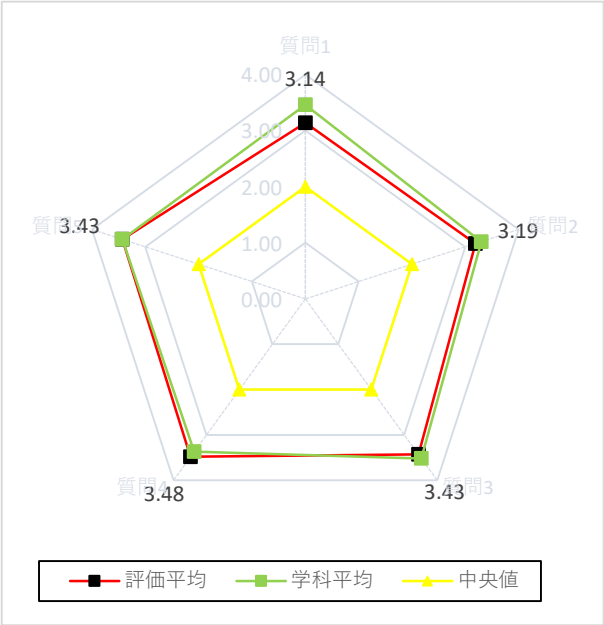
受講する学生の地元近隣にある特別支援学校での教育実習を原則としている（地元の居住地域に特別支援学校がない場合等は異なる）。そのことで、安心感、安全感をもつことができ、充実した２週間の教育実習を送ることができていると思われる。
実習校により、その特徴や伝統、文化が異なることが少なくない。そのために、最初は戸惑いを隠すことができない学生も少ないが、実習開始２週目には、時間的な流れへの対応、実習担当教員との関係性の構築も少なからずできてくることから、担当クラスに在籍する子どもへの指導・支援等に熱中することができていくようである。実習終了時には２週間（実質１０日間）という短い期間であるために心残りで終了してくる学生がほとんどを占めるようである。
その実習校の管理職及び担当していただく教員等との面談で共通的にでてくる実習生に期待する姿として「社会性」「主体的学び」「柔軟かつしっかりとした受け答え、対応」ということが求まられていると感じる。実習までに行う実習指導では学習活動案（指導案）の作成等の技術面のみでなく、先に挙げたような点についても丁寧に受講生に伝えていく必要がある。

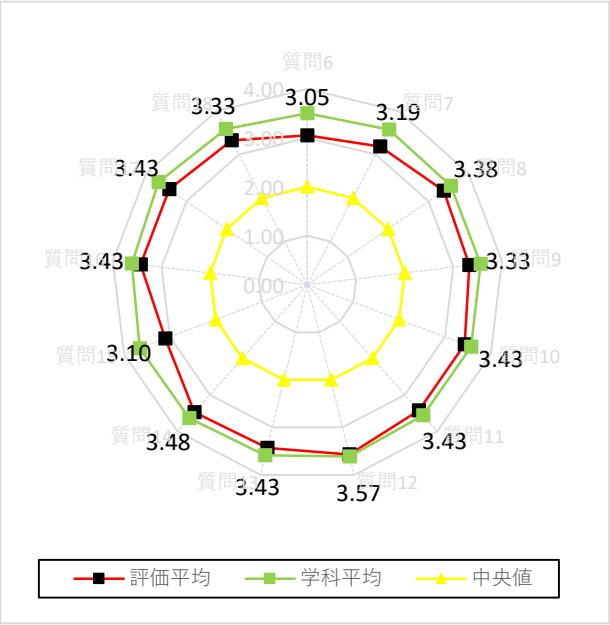
（３）次年度に向けての取り組み

本年度の巡回での実習校の関係者との面談内容を活かした教育実習指導にしていく必要がある。また、実習後も丁寧な振り返りと自己評価の時間を確保していくことで、実習に行くことが目的なるのではなく、実習での体験が自己の進路に活かせるような学びとなっていくようにしていく必要がある。
また、次に続く後輩の学生が見通しを持つことができるような実習体験報告を実施していく上で、「どう伝わったか」という視点で捉え、そのためには「どう伝えたがよいか」ということを学ぶことができるように工夫していきたい。この点は、受講生が小学校、特別支援学校等の子どもたちとのかかわり、その子たちを支援をする教師との関係性が必要となる職業を目指していることであることから、極めて重要な点となる。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼稚園教育実習Ⅱ	52名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

幼稚園教育実習Ⅱでは、幼稚園教育実習Ⅰにおける経験と自らの課題を踏まえ、各幼稚園の特性や一人ひとりの子どもの実態、保護者の状況等を理解し適切な援助を行うことが目標となっている。また、専門職としての幼稚園教諭の役割や職務内容を理解し、自らの保育観や倫理観をさらに深め、新しい学習課題を発見する機会としてとらえることが必要とされる。

昨年度と比べると、コロナ禍も明け、制限も少ない中での実習であった。

この授業評価については、一人ひとりの学生がそれぞれの実習園でさまざまなことを学び、その過程や結果について自己評価したものであるが、質問内容が実習そのものにはあまりそぐわない内容となっている。しかしながら、一定以上の高い評価をしており、この経験が学生にすばらしい影響を与えていると考えられる。

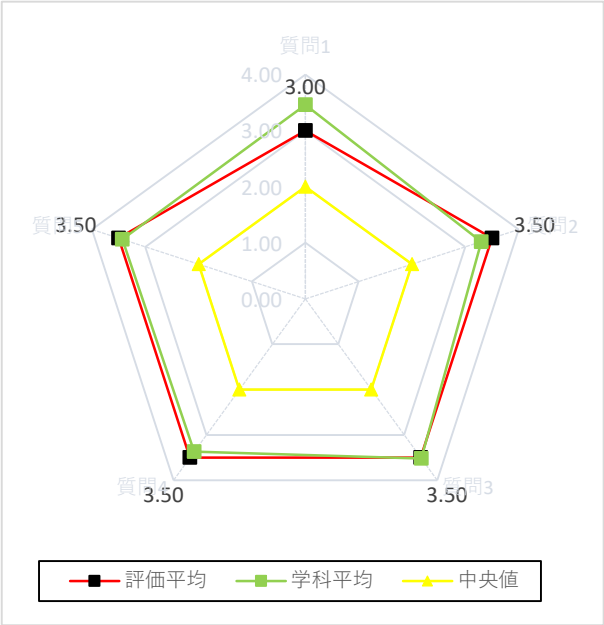
（３）次年度に向けての取り組み

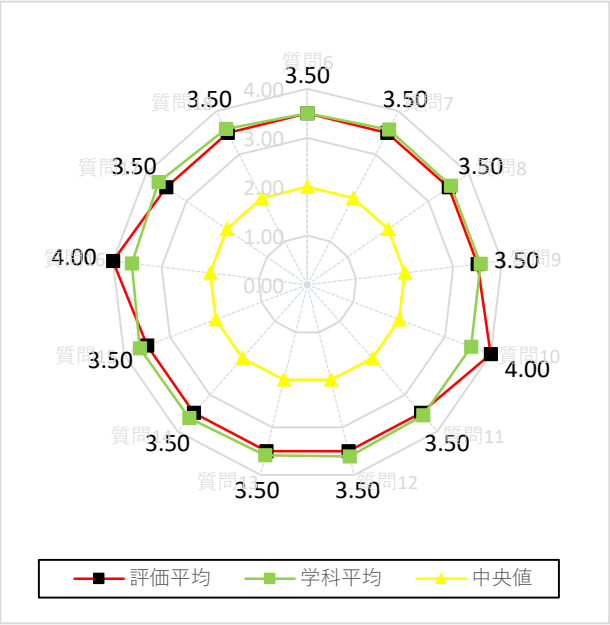
幼稚園教育実習Ⅱは、3年生で行われる幼稚園教育実習の仕上げの実習である。自らの今後の進路を定めるうえでも非常に重要な実習であると言える。特に地域社会における保育の現状、子育て支援、保護者支援に対する理解や実践についても求められており、その内容は多種多様である。

これらを踏まえ、令和3年度は実習園ともなお一層連携を密にし、学生一人ひとりの保育観や倫理観を確立していけるよう努力しサポートしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう（発展）	6名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

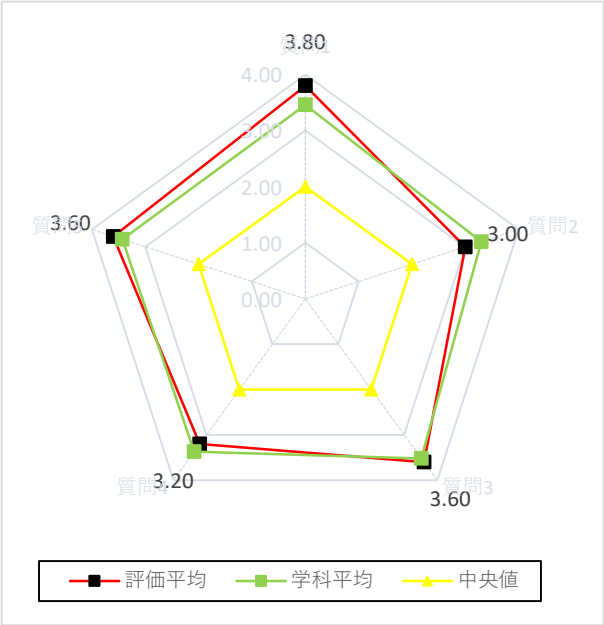
評価平均は学科平均をやや上回り、特に視聴覚機材・板書の活用や、双方向のやりとりについて評価ポイントが高い。

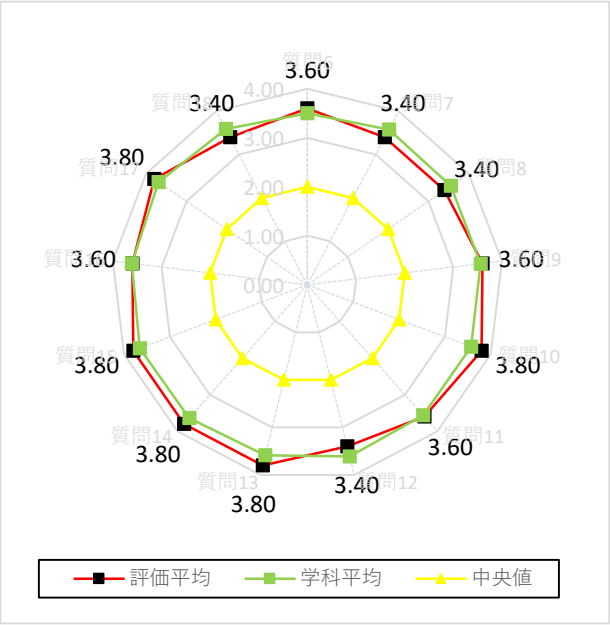
（３）次年度に向けての取り組み

視聴覚機材・板書の活用や、双方向のやりとりなど今年度の授業のよかった点を踏襲しつつ、必要な改善を加え、引き続き授業の充実に努めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう（発展）	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

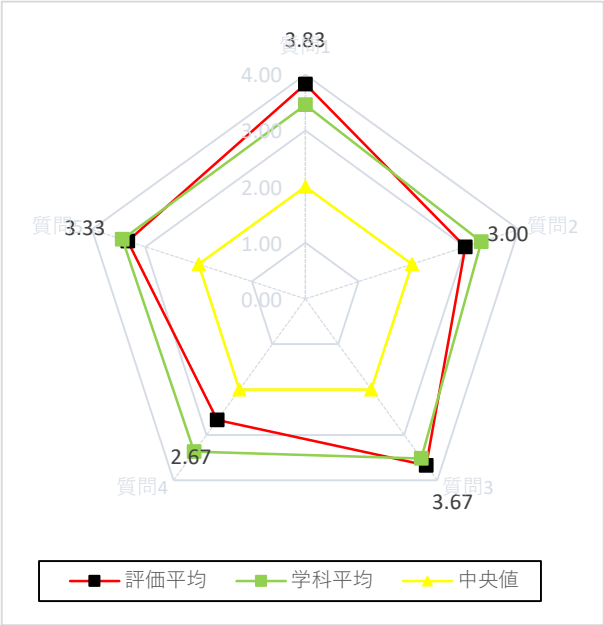
本年度から始まった授業である。前年度までの「あすなろうⅠ基礎」の授業や体験活動を踏まえて、今年度は個人やグループでキャリアについて考え、それを発表した。本ゼミは小学校教諭希望と幼保希望の学生がバランスよくいたため、グループも進路に応じて分けて行った。希望する職種についてはもちろん興味深く進めることができたが、異なる職種についてもお互いに学びあうことができて有効であったと思料する。

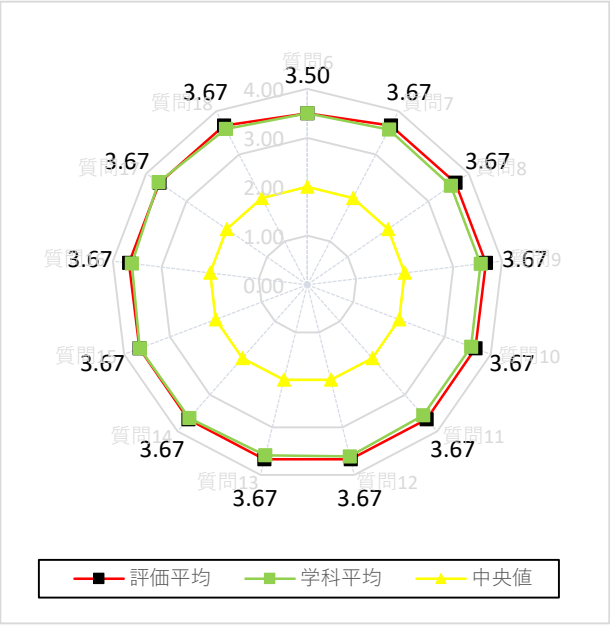
（３）次年度に向けての取り組み

令和6年度も今年度同様、自らが目指すキャリアに向けて、個人での資料作成・発表、グループによる資料作成・発表を行うことによってお互いが多様な職種に関心を持つとともに、自らの進路に向けた糧となるような取り組みを行いたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう（発展）	6名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

質問4「あなたはこの授業を理解するために自分で何か工夫をしましたか」が低いのは，学生が受け身であったことが伺われる。各自がボランティアに行ったことを共有したり，各自のキャリア形成について考えるという内容，また１単位のため，基本が隔週開講だが，ボランティア参加時期や，幼稚園実習の時期に開講されず，期間が空くため，モチベーションが下がったことなどが考えられる。

他の項目は，概ね「学科平均」と同じ状況であった。

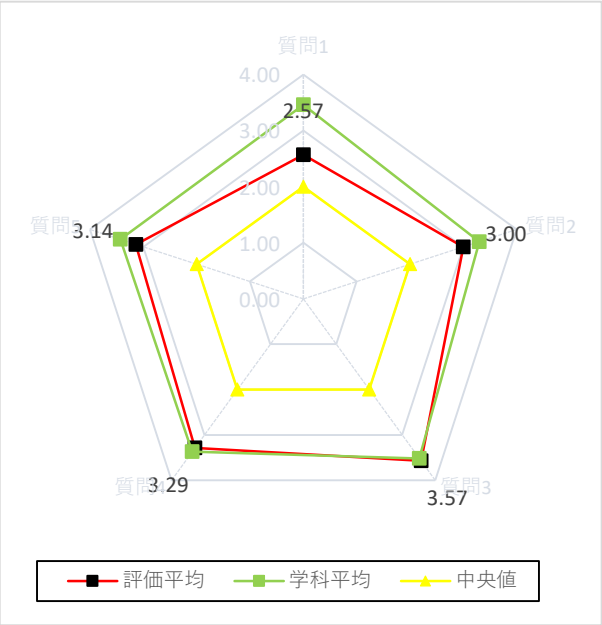
質問8「授業は興味・関心が持てる工夫がされていましたか」，質問17「教員は熱心に授業に取り組んでいましたか」等は，「学科平均」より若干高かったので，学生たちは，それなりに満足していたようである。

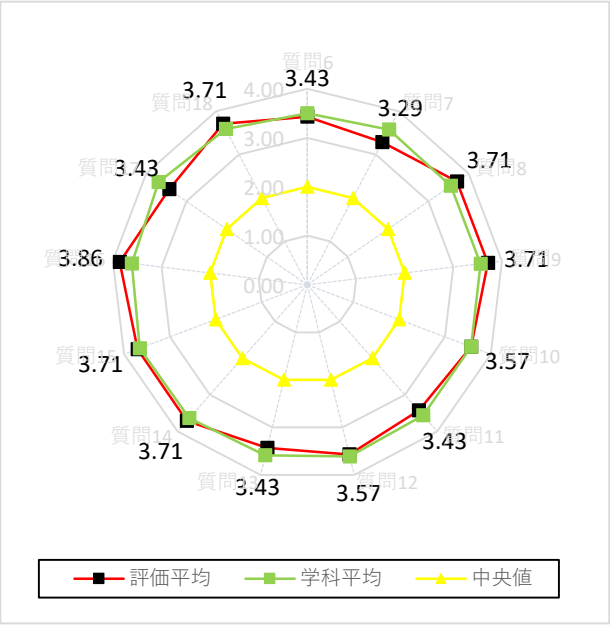
（３）次年度に向けての取り組み

２年ゼミとして，学生の進路意識，キャリア形成，学業の状況，学生相互の思いや考えの共有化などを大切にしながら，次年度に臨みたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう（発展）	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

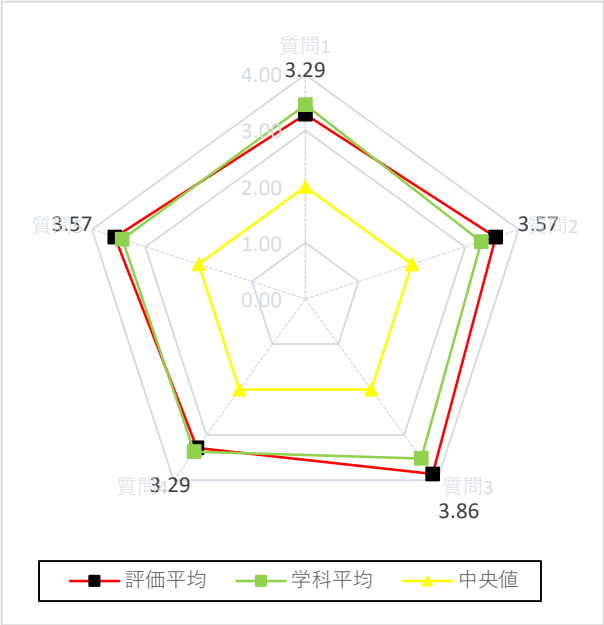
授業の構成は、２つの柱で行った。
①療育に関する知識や発達に関する理論、他機関・多職種連携等に関して講義形式及びレポート報告を通したディスカッションが柱の一つである。
②担当教員がフィールドとして久留米市との連携で２0年以上継続して実施してきている発達障がい児等の発達の異型と言われる幼児、児童及び脳性麻痺等の運動障がいのある幼児、児童～大人の方々への臨床臨床動作法を主としたセラピー、個別やグループでの遊びを中心としたセラピー、さらにその兄弟姉妹、及び保護者等の関係者を含めた発達支援法としての療育事業での体験活動がもうひとつの柱である。
この２つのことを通して、支援を必要としている障がいのある子（育つ側の難しさのある子）とのかかわりや認識を深めることはもちろんであるが、その家族の方々とのかかわりや会話の中で多くのことを学ぶことができたと考える。特に、所謂、普通の子育てと異なり、子育ての入り口から異なる子育てを行ってきた親、そして普通の兄弟姉妹関係とは異なる関係を過ごしてきた兄弟姉妹から学ぶことが多かったのではないかと考える。

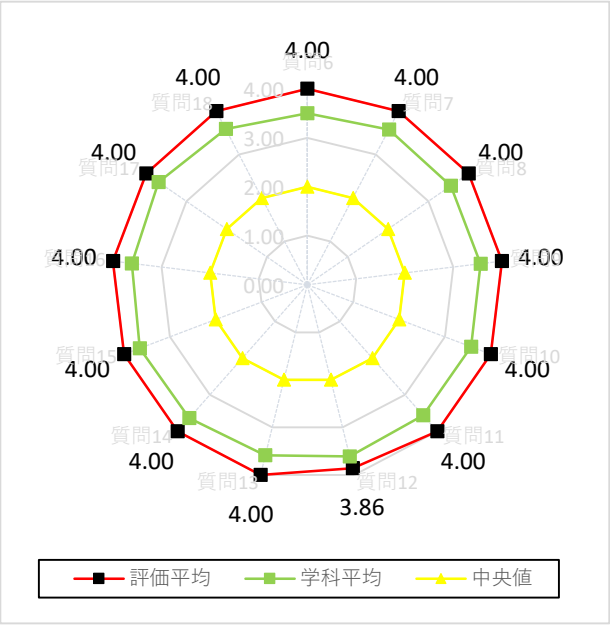
（３）次年度に向けての取り組み

次年度も２つの柱を通して、学生には「深い学ぶことと、広く学ぶこと」の経験と、臨床を通して「深くかかわることと、広くかかわること」の経験を積んでいくことができるようにする。
そのことにより、自分の将来の進む道、求めるもの・こと等を考え、判断していくことができる材料として、臨床の場での指導を行っていくこととする。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		社会科演習	10名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

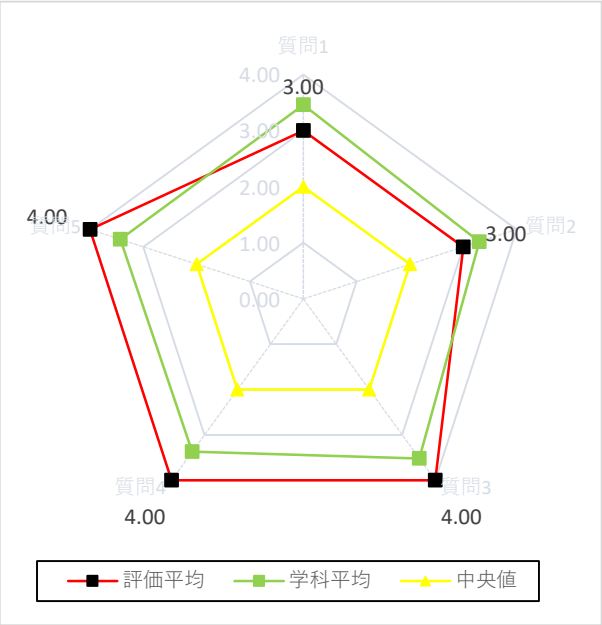
質問６～18に関し，学科平均を大きく上回る高評価であった。
質問１「授業は何回欠席しましたか」が，学科平均「3.36」をわずかに下回る「3.29」となった主たる理由は，教育実習のために欠席せざるを得ない学生が数名いたことによる。

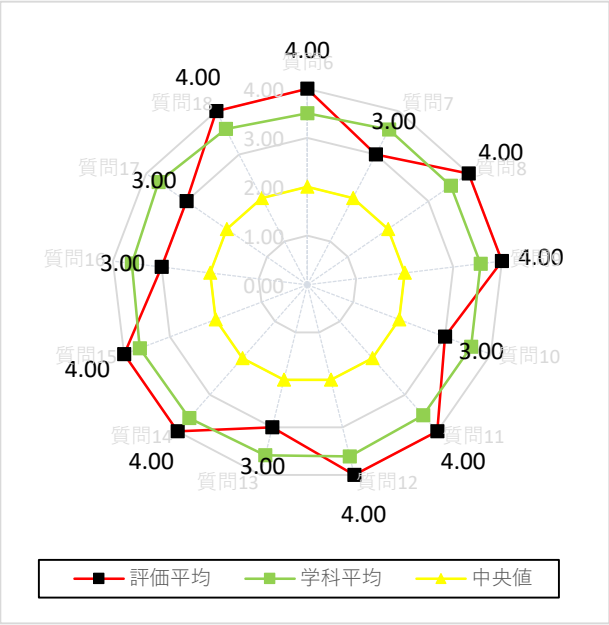
（３）次年度に向けての取り組み

今期は，小学校実習直前の学生が多かったので，学生の実習校を中心に，地理的・歴史的な特徴を調べさせ，発表させる活動を行った。これは，実習にも大変役立ったようである。また，「厳しい」という噂から，履修者が10名と，ゼミ程度の人数であったので，密度の濃い学習が成立した。また，学生からの提案に応え，フィールドワークとして，市内の社会見学も行った。次年度も，よい点は継承していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	5名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

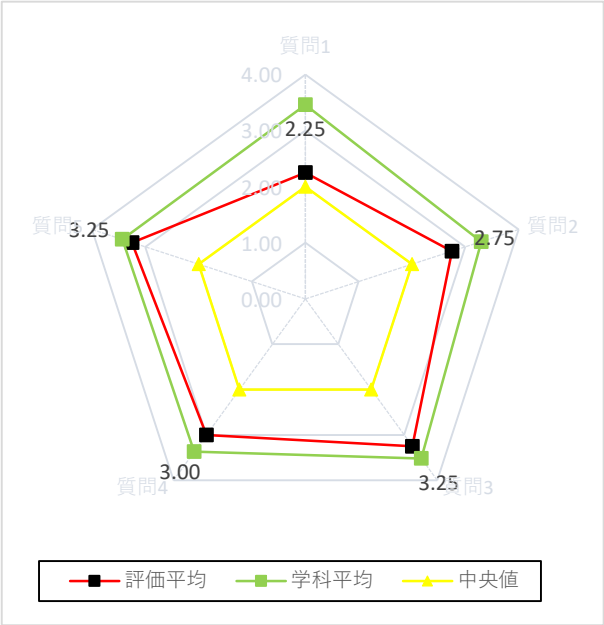
令和４年度の授業評価対象となっている。ここでは分析対象としない。

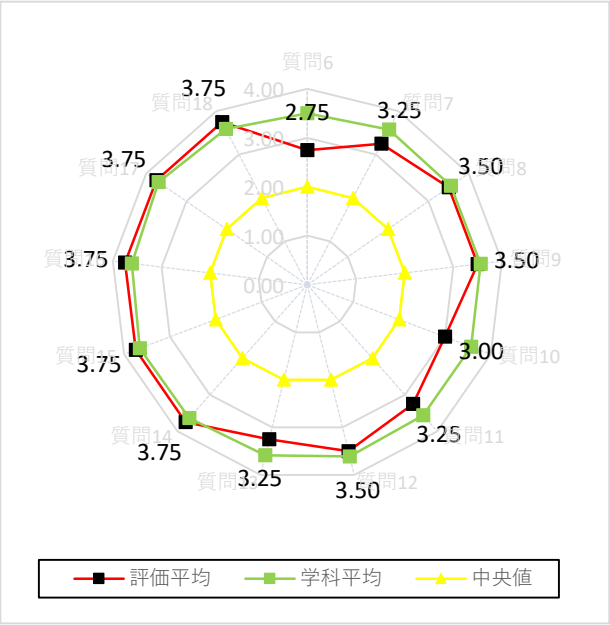
（３）次年度に向けての取り組み

令和４年度の授業評価対象となっている。ここでは反省対象としない。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	7名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

すべての項目について、一定以上の高い評価を得ている。昨年度と異なり、本年度はコロナ禍も明け、対面授業による発表をとおして学生相互でテーマを共有し意見を出し合うなど、できる限り双方向的な授業が可能となった。「子ども学演習」については、4年次の卒業研究の基礎になるものであり、論文作成に向けてさまざまな工夫をしているところである。現在は仮テーマを設定し、それに基づいた先行研究検索やその内容について検討しレジュメを作成し、中間発表を行った段階である。学生にとっては、自分が興味ある分野において自らテーマを設定し文章を書くという経験があまりないため、かなり細かい部分まで指導する必要があった。

これらのことを踏まえると、一人ひとりの学生の個性や能力に応じた個別対応が不可欠であり、細やかな配慮が求められていると考える。

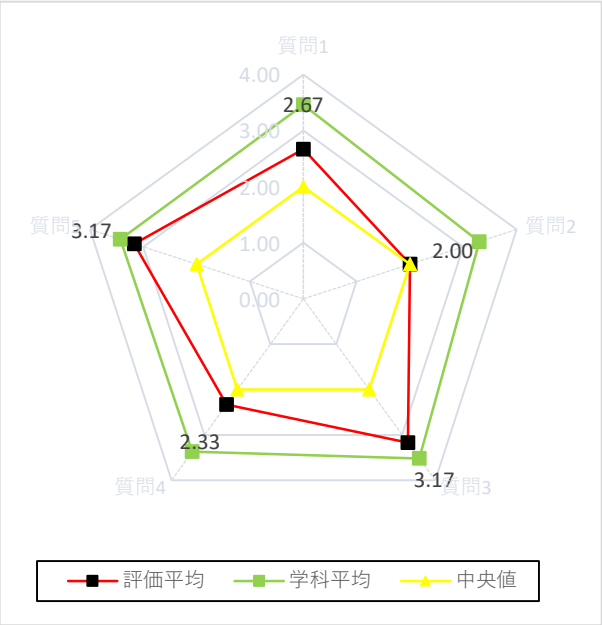
（３）次年度に向けての取り組み

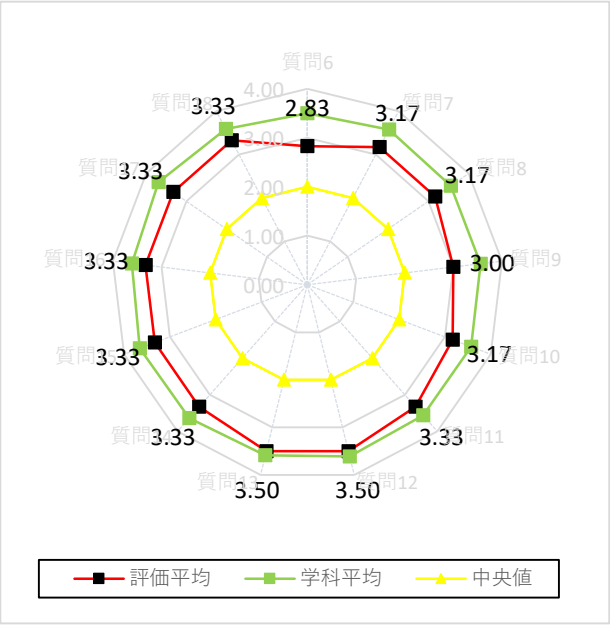
一人ひとりの学生の状況に応じた細やかな配慮を怠らず、学生が自分の考えをまとめて文章で表現したり、他人に対して自分の意見を発表するスキルを身に着け、4年次の卒業研究にすすむことができるようしっかりと指導をしていきたい。

さらには、それぞれの考え方や研究成果をゼミの学生間で共有できるようにアクティブラーニング的な授業を進めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	6名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

本年度は、教員採用試験の実施時期の変更に伴い、そために必要となる小学校教育実習の時期も急遽大幅に変更となった（１１月がつ～2月初旬）。そのことで本年度後半に実施する予定であった担当教員がフィールドとして久留米市との連携で２0年以上継続して実施してきている発達障がい児等の発達の異型と言われる幼児、児童及び脳性麻痺等の運動障がいのある幼児、児童～大人の方々への臨床臨床動作法を主としたセラピー、個別やグループでの遊びを中心としたセラピー、さらにその兄弟姉妹、及び保護者等の関係者を含めた発達支援法としての療育事業での体験活動を前半部分に設定することになった。本来であれば、この体験活動に向けた発達理論、療育理論、親子関係に関すること、多職種連携に関することなどの認識面における学びが不十分となものとなった。

そのようなことが明確にあらわされている授業評価であると思われる。

（３）次年度に向けての取り組み

次年度は教員採用試験が６月～７月、８月という実施及び、小学校教育実習が３年生１１月実施と固定されることで、学生には見通しを持たせた環境での学びと体験を提供していくことができると考える。
次の３点のことを行う。

①　定型発達にある乳幼児の発達と非定型発達（発達の異型）にある乳幼児の発達、求められる療育の姿、発達支援構造全体としての療育について等の理解と認識を高めていくこと。

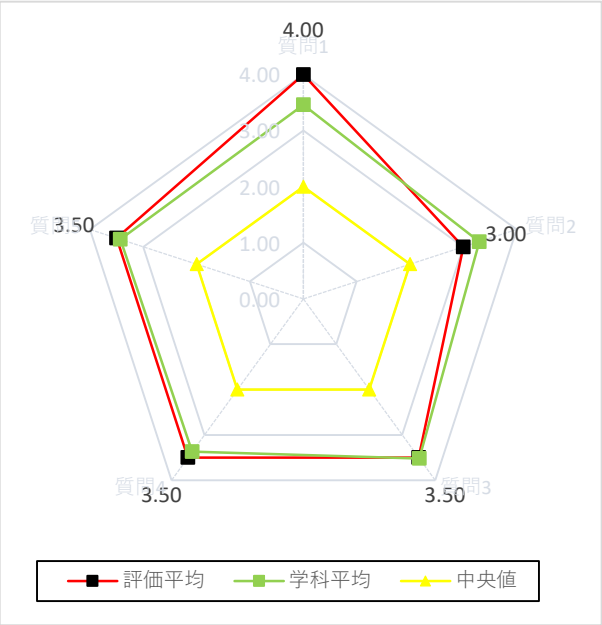
②　療育の場における療育体験をさせていくこと。

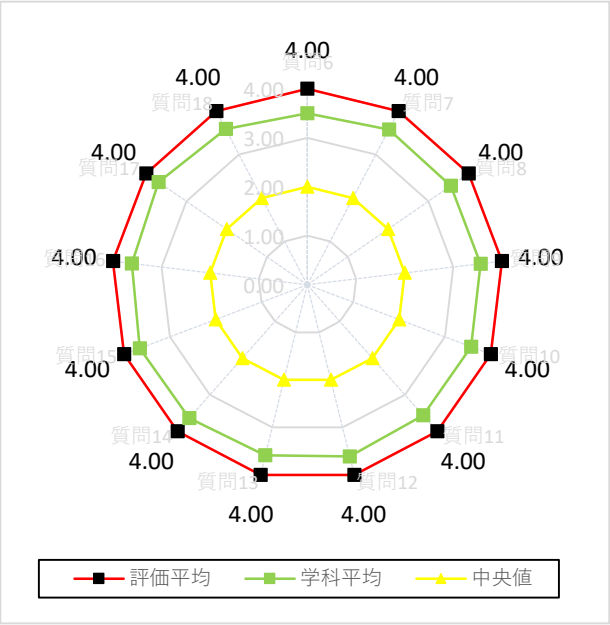
③　育ちにくさのある子どもの保護者とのかかわり等について、実体験をさせていくこと。

以上のことを通して、将来の自分自身の進むべき道、希望する道等を考え、判断していくための材料となりうるように授業を進めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	8名

（１）学生による授業評価結果





（２）結果の分析と評価

評価平均は学科平均をすべての項目で上回り、また評価項目間には数値のばらつきが少なく、評価結果はバランスの良いものであったと考える。

（３）次年度に向けての取り組み

学生とのコミュニケーションと学生の実体験を重視した授業を計画する。